水産庁委託事業

平成 29 年度

水産多面的機能発揮対策支援委託事業

調査報告書

平成 30 年 3 月

全国漁業協同組合連合会
全国内水面漁業協同組合連合会
公益社団法人全国豊かな海づくり推進協会
一般社団法人水産土木建設技術センター
株式会社水土舎

目　次

１．水産多面的機能発揮対策事業の評価・検証 1
1-1. 自己評価結果のとりまとめ 1
1-2. 実施状況取りまとめ報告書のデータベース化 1
1-3. 有識者による検討委員会の開催 2
２．水産多面的機能発揮対策事業の技術サポートの推進 4
2-1. 講習会の開催 4
(1) 講習の対象と講習場所の選定 4
(2) 講習内容とテキストの作成 4
(3) 参加状況及び開催結果 7
(4) アンケート結果 9
2-2. サポート専門家による技術的指導 38
(1) サポート専門家の登録 38
(2) サポート専門家の派遣 46
(3) 指導内容の整理と参考資料の作成 51
2-3. 水産多面的機能発揮対策事業の情報提供・共有 58
(1) 模範、参考となる活動組織（優良事例）の抽出と報告会の開催 58
① 優良事例の紹介 58
② 事例報告会の開催 59
(2) 事例集の作成 87
(3) 各種媒体による情報提供 87
① ポスターの配布 87
② ウェブサイト 89
③ 新聞広告 90
３．平成 29 年度支援事業の成果と課題 92
3-1. 活動組織によるモニタリング及び自己評価 92
3-2. 講習会の開催 92
3-3. サポート専門家による技術的指導 92
3-4. 模範、参考となる活動組織の抽出 93
3-5. 事例報告会の開催 93
3-6. 各種媒体による情報提供 94

資料編 1　平成 28 年度自己評価結果とりまとめ報告書 ..... 資 1-1
資料編 2　平成 28 年度実施状況とりまとめ報告書 ..... 資 2-1
資料編 3　検討委員会議事録 ..... 資 3-1
資料編 4　講習会テキスト ..... 資 4-1

資料編 5　講習会議事録 ･････････････ 資 5-1
資料編 6　サポート専門家による報告書 ･････････････ 資 6-1
資料編 7　活動事例集 ･････････････ 資 7-1
資料編 8　報告会発表資料 ･････････････ 資 8-1
資料編 9　報告会議事録 ･････････････ 資 9-1

１．水産多面的機能発揮対策事業の評価・検証

平成 28 年 3 月 29 日付け水産庁長官通知「水産多面的機能発揮対策交付金実施要領の運用」（以下、「要領の運用」）第 6 の 10 に規定する対象活動組織が行なった前年度（平成 28 年度）の自己評価及び地域協議会の 2 次評価を基に、成果実績その他の評価結果を活動項目別に集計・整理し、平成 28 年度における活動組織の成果を評価した。

1-1. 自己評価結果のとりまとめ

活動組織が行なった 28 年度の自己評価及び地域協議会の 2 次評価を基に、表 1-1-1 に示す成果指標及び自己評価点を活動項目ごとに集計、整理した。

また、「環境・生態系保全」に関しては、活動組織が実施したモニタリングデータを収集し、海藻の被度やゴミの収集量など、数値による定量的な成果を整理した。併せて、前年度に JF 全漁連及び全内漁連が実施した活動成果に係るアンケートを回収し、定性的な成果についても整理した。

上記の自己評価結果、モニタリング結果、アンケート結果を報告書にとりまとめ、水産庁に提出した（資料編 1 に収録）。

表1-1-1　自己評価表の整理・集計項目

活動項目		成果指標	自己評価点
1. 環境・生態系保全	① 藻場の保全 ② サンゴ礁の保全 ③ 種苗放流 ④ 干潟等の保全 ⑤ ヨシ帯の保全 ⑥ 内水面生態系の維持・保全・改善 ⑦ 漂流、漂着物、堆積物処理 ⑧ ③⑥⑦の効果促進 ⑨ 廃棄物の利活用	対象水域における生物量の増加	成果目標 組織体制 横展開
2. 海の安全確保	⑩ 国境・水域の監視	不審船または環境異変の通報件数の増加	成果目標 組織体制 横展開
	⑪ 海難救助訓練	海難救助に参加した件数の増加	
	⑫ 資機材等の整備		
上記に関連し、その効果を高め、漁村文化の継承に資する教育・学習		理解度	成果目標 組織体制 横展開

1-2. 実施状況取りまとめ報告書のデータベース化

データベースとして整理する項目は表 1-2-1 に示すとおりとした。各活動の単位面積あた

りの作業量や必要額を整理し、今後の事業の効果的な推進に資するための資料を作成した（資料編 2 に収録）。

また、①の自己評価の集計結果を基に、成果目標を達成できなかった活動組織および自己評価点（総合点）が 2 点未満の活動組織を抽出し、実情を後述のサポート専門家が聞き取りした上で、今後の活動やモニタリングの方法等について指導を行った。

表1-2-1　データベース化した項目

項目	内容
基礎情報	都道府県名、地域協議会名、市町村名、活動組織名
活動項目等	活動項目、保全活動面積、モニタリング後の面積
項目別の活動内容	実施面積、実施時期、参加人数、協定に係る要件確認の有無、市町村チェックの有無
項目別の実施状況（実績額）	・収入額（合計額、うち交付金の額） ・支出額（合計額、日当・謝金、傭船料、資材購入・リース費、交通費・運搬費、委託費、その他協議会等で設定した独自の費目）

1-3. 有識者による検討委員会の開催

上記の実施にあたっては、表 1-3-1 に示す有識者から意見を聴取し、今後の評価を実施するにあたっての課題を含め、効果的な事業の推進に必要な課題の抽出を行った。また、適宜サポート専門家を招聘して事業の推進に関する意見交換（専門家会議）を行った。検討委員会及び専門家会議の開催状況を表 1-3-2 に、各会議の議事録を資料編 3 に収録した。

表1-3-1　検討委員（有識者）

氏名（敬称略）	所属・役職	選定理由
乾政秀	（株）水土舎　最高顧問	平成13年度公益的機能等調査委託事業及び平成14年度多面的機能評価等調査委託事業等に関わり、水産業・漁村の多面的機能の評価及び沿岸環境保全についての造詣が深い。
柿野純	（株）東京久栄技術顧問（元千葉県水産試験場）	平成25～28年度 水産多面的機能発揮活動サポート専門家。アサリを主とした干潟の二枚貝類の調査及び保全技術についての造詣が深い。
鹿熊信一郎	沖縄県海洋深層水研究所　所長	平成25～28年度 水産多面的機能発揮活動サポート専門家。サンゴ礁の保全技術及び海外のMPA（海洋保護区）における評価手法等について造詣が深い。平成27年度「水産業・漁村の多面的機能発揮の支援のあり方に関する検討会」委員。

桑原久実	国立研究開発法人水産研究・教育機構 水産工学研究所 水産土木工学部 部長	平成25～28年度 水産多面的機能発揮活動サポート専門家。藻場・干潟造成に関する造詣が深い。平成27年度「水産業・漁村の多面的機能発揮の支援のあり方に関する検討会」委員。
藤田大介	東京海洋大学　准教授	平成25～28年度 水産多面的機能発揮活動サポート専門家。海藻類の生態及び藻場の保全技術（磯焼け対策）についての造詣が深い。
樋田陽治	元山形県内水面漁連	平成25～28年度 水産多面的機能発揮活動サポート専門家。内水面漁業に関する行政、研究両面での経験が豊富なだけでなく、県内水面漁連では内水面漁業振興に尽力。現在、希少種の保護にも取り組んでいる。
崎長威志	広島県内水面漁連参与	平成25～28年度 水産多面的機能発揮活動サポート専門家。水産行政に関する経験が豊富であり、県内水面漁連では内水面資源の回復、河川環境の再生対策の推進にも携わる。前広島県内水面漁場管理委員。
桐生透	元山梨県水産技術センター	平成25～28年度 水産多面的機能発揮活動サポート専門家。河川環境保全、外来生物など、内水面漁業が直面するさまざまな課題に造詣が深い。現在、長野県内水面漁場管理委員。

表1-3-2(1)　検討委員会・専門家会議の概要（1）

第１回　検討委員会	
日時	2017 年 6 月 19 日（月）　10:00～12:00
場所	コープビル 6F 第 5 会議室（東京都千代田区内神田 1-1-12）
協議事項 (1) 平成２８年度自己評価について (2) その他	

表1-3-2(2)　検討委員会・専門家会議の概要（2）

第２回　検討委員会	
日時	2018 年 12 月 12 日（火）　10:00～12:00
場所	コープビル 6F　第 5 会議室（東京都千代田区内神田 1-1-12）
協議事項 (1) 平成 28 年度の自己評価及びモニタリング結果について (2) 技術講習会の報告について (3) 事例報告会の内容について	

(4)その他

表1-3-2(3)　検討委員会・専門家会議の概要（3）

第１回　専門家会議（内水面）	
日時	2017 年 2 月 28 日（水）　14:00～16:20
場所	三会堂ビル第２会議室（東京都港区赤坂 1-9-13）
協議事項 (1) 平成 29 年度水産多面的機能発揮対策支援事業の概要及びサポート状況報告 (2) 情報交換	

２．水産多面的機能発揮対策事業の技術サポートの推進

水産多面的機能発揮活動の技術的水準の向上を図るため、本事業に取り組む活動組織等を対象として、技術的事項に関する講習会の開催及びサポート専門家による技術的な指導を行った。

2-1. 講習会の開催

活動組織による「海の安全確保」「環境・生態系保全」に係る活動の技術的水準の向上と適切な組織運営の推進を図ることを目的として、本事業に取り組む活動組織等を対象とした講習会を開催した。

(1) 講習の対象と講習場所の選定

講習会の参加対象は、活動組織、協定市町村、地域協議会会員等の事業関係者とし、地域協議会を通じて参加を促した。会場及び開催日程は表 2-2-1 に示すとおりである。

表 2-1-1　講習会の日程と会場

開催地	日程	会場
東京都渋谷区	7 月 4 日（火）	国立オリンピック記念青少年総合センター （東京都渋谷区代々木神園３－１）
福岡県福岡市	8 月 9 日（水）	福岡国際会議場 （福岡県福岡市博多区石城町２－１）
大阪府大阪市	9 月 7 日（木）	マイドームおおさか （大阪府大阪市中央区本町橋２－５）

(2) 講習内容とテキストの作成

講習会は活動項目別の部会形式とし、特に藻場・干潟については、開催地ごとに技術的なテーマを絞り開催した。

開会時は、全参加者が一堂に会し、事業の概要、評価等についての講習後、各部会に分かれてサポート専門家のコーディネートのもと、他の組織の模範となる活動組織の代表などが講師となって取組の要点を紹介し、参加活動組織は、成功・先進地区と自分たちの活動を比較し、自分たちの組織に足りない点や、今後、積極的に取り入れていくべき点を自己診断した。その後、サポート専門家、講師、参加活動組織間で課題解決策等について意見交換等を行った。

テキストの内容は、モニタリングの手引きの他、参加活動組織の活動内容と実績を整理したものとし、参加者が他の活動組織の情報を把握しやすいものとした。各会場で配布したテキストは資料編 4 に収録した。

表 2-1-2　講習プログラム

9:00	受付		
9:30	開会　オリエンテーション ・事業の概要について ・評価について		
	東京会場	福岡会場	大阪会場
10:30	・教育・学習部会（干潟・内水面） ・藻場部会 先進地区活動組織事例紹介 参加活動組織の課題の解決 意見交換	・教育・学習部会（干潟・内水面） ・藻場部会 ・サンゴ礁部会 先進地区活動組織事例紹介 参加活動組織の課題の解決 意見交換	・教育・学習部会（干潟・内水面） ・藻場部会 ・海の安全部会 先進地区活動組織事例紹介 参加活動組織の課題の解決 意見交換
12:30	休　憩		
13:30	・教育・学習部会（藻場） ・内水面部会 ・干潟部会 先進地区活動組織事例紹介 参加活動組織の課題の解決 意見交換	・教育・学習部会（藻場・サンゴ礁） ・内水面部会 ・干潟部会 先進地区活動組織事例紹介 参加活動組織の課題の解決 意見交換	・教育・学習部会（藻場・海の安全） ・内水面部会 ・干潟部会 先進地区活動組織事例紹介 参加活動組織の課題の解決 意見交換
15:30	個別相談会（希望者のみ）		
16:30	閉　会		

表 2-1-3　藻場部会及び干潟部会のテーマ

会場名	藻場部会	干潟部会
東京	海藻のタネ不足対策について	底質の改善（シジミ）
福岡	食害対策について	食害等の対策について
大阪	アマモの活動について	稚貝の確保について

表 2-1-4　各会場のコーディネーター及び先進地区活動組織事例紹介

会場名	部会	コーディネーター	先進地区活動組織事例紹介
東京	藻場部会	中嶋泰氏	名護屋地区藻場保全活動組織（大分県） 吉田忠氏
	学習・教育部会（干潟・内水面）	大浦佳代氏	船橋市漁業協同組合活動グループ（千葉県）柴田敬一氏
	学習・教育部会（藻場）	大浦佳代氏	江ノ島・フィッシャーマンズ・プロジェクト（神奈川県）山下由香里氏
	干潟部会	吉田司氏	小川原湖地区漁場保全の会（青森県） 沼田広樹氏
	内水面部会	樋田陽治氏	富山市水辺をきれいにする会（富山県） 東秀一氏
福岡	藻場部会	中嶋泰氏	榛南磯焼け対策活動協議会（静岡県） 松本匡広氏
	学習・教育部会（干潟・内水面）	大浦佳代氏	益田川と海をつなぐ自然環境保全活動組織（島根県）佐々木隆志氏
	サンゴ礁部会	岩瀬文人氏	恩納村美ら海を育む会（沖縄県） 比嘉義視氏
	学習・教育部会（藻場・サンゴ礁）	大浦佳代氏	名護屋地区藻場保全活動組織（大分県） 吉田忠氏
	干潟部会	吉田司氏	網掛川干潟再生の会（鹿児島県） 木村毅氏
	内水面部会	稲田善和氏	高尾野川をきれいにする会（鹿児島県） 髙崎正風氏
大阪	藻場部会	片山貴之氏	日生藻場造成推進協議会（岡山県） 天倉辰己氏
	学習・教育部会（干潟・内水面）	大浦佳代氏	富山市水辺をきれいにする会（富山県） 東秀一氏
	海の安全部会	益原寛文氏	愛南地区沿岸海難（津波）救助協議会（愛媛県）下田雅一氏
	学習・教育部会（藻場・海の安全）	大浦佳代氏	海のゆりかごを育む会（福井県） 西野ひかる氏
	干潟部会	吉田司氏	前潟干潟研究会（広島県） 下戸成治美氏

	内水面部会	崎長威志氏	京の川の恵みを活かす会（京都府） 竹門康弘氏

(3) 参加状況及び開催結果

参加状況は、表 2-1-5 に示すとおりであり、福岡会場が延べ 316 名と最も多く、3 会場で延べ 755 名が参加した。

各会場における開催結果（議事録）は資料編 5 に収録した。

表 2-1-5　参加状況

	藻場	干潟	内水面	サンゴ礁	海の安全	教育学習（藻場）	教育学習（内水面・干潟）	合計（延べ）
東京	53	34	32	―	―	45	47	211
福岡	98	49	18	27	―	92	32	316
大阪	29	40	48	―	25	27	59	228
合計	180	123	98	27	25	164	138	755

教育・学習部会（干潟・内水面）

藻場部会

干潟部会

内水面部会

図 2-1-6(1)　講習会の開催状況（東京会場）

藻場部会	サンゴ礁部会
干潟部会	内水面部会
教育・学習部会（干潟・内水面）	教育・学習部会（藻場・サンゴ礁）

図 2-1-1(2)　講習会の開催状況（福岡会場）

開会

教育・学習部会（干潟・内水面）

藻場部会

海の安全部会

干潟部会

内水面部会

図 2-1-1(3)　講習会の開催状況（大阪会場）

(4) アンケート結果

以下、各会場で実施したアンケート（図 2-1-2）の結果を示す。

東京会場では参加者 173 名（事務局、関係団体、コーディネーター、事例報告者を除く）のうち、142 件の回答を得た（回答率 82%）。福岡会場では参加者 316 名（事務局、関係団体、コーディネーター、事例報告者を除く）のうち、206 件の回答を得た（回答率 65%）。大阪会場では参加者 228 名（事務局、関係団体、コーディネーター、事例報告者を除く）の

うち、162 件の回答を得た（回答率 72%）。

平成２９年度水産多面的機能発揮対策講習会　アンケート

会場	東京	福岡	大阪					
部会	藻場部会　干潟部会　内水面部会　サンゴ礁部会　海の安全部会 教育・学習部会（藻場）　教育・学習部会（干潟・内水面）							
所属	活動組織	市町村	地域協議会	その他		年齢		歳代
職業	漁業	自営業	会社員	公務員	団体職員	NPO	その他	

（1）　内容は今後の活動の参考になりましたか？

①　大変参考になった　②　一部参考になった　③　参考にならなかった

（2）　事例紹介と自組織の活動を比較して、足りない点や、今後、積極的に取り入れていくべきと感じた点等をお書きください。

（3）　事例紹介以外で参考になった点等をお書きください。

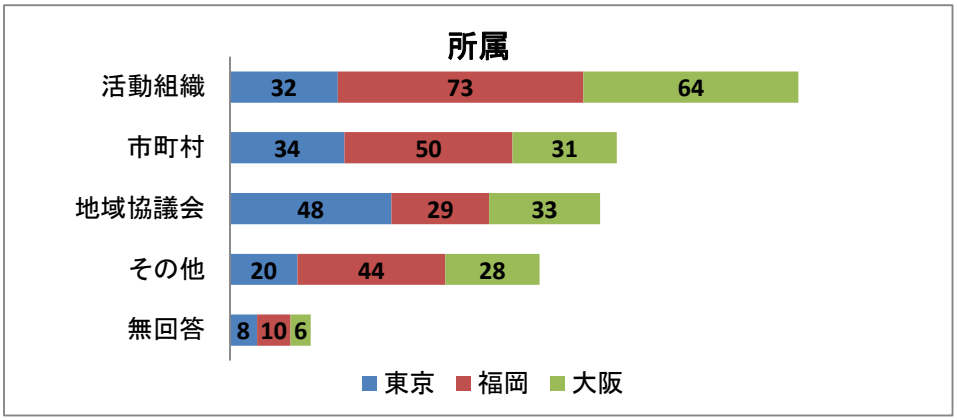
（4）　今後の講習会について、開催地や時期、部会テーマ等のご要望をお書きください。

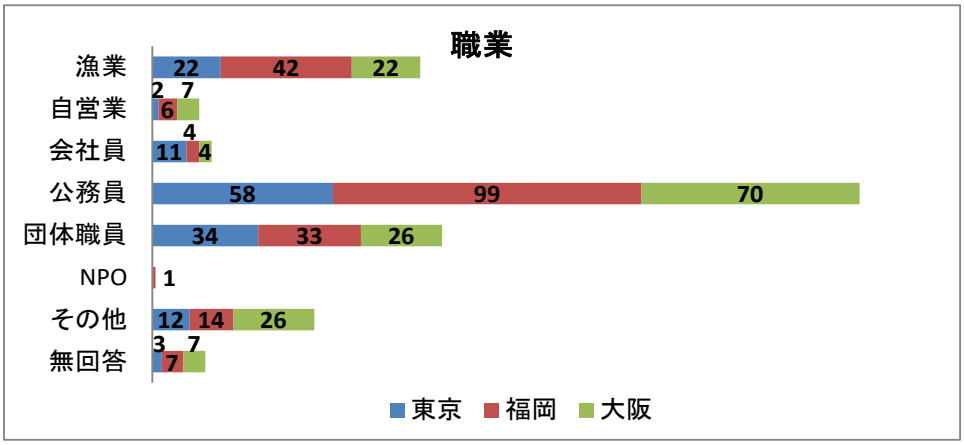
（5）　講習会に参加しての感想・意見等をお書きください。

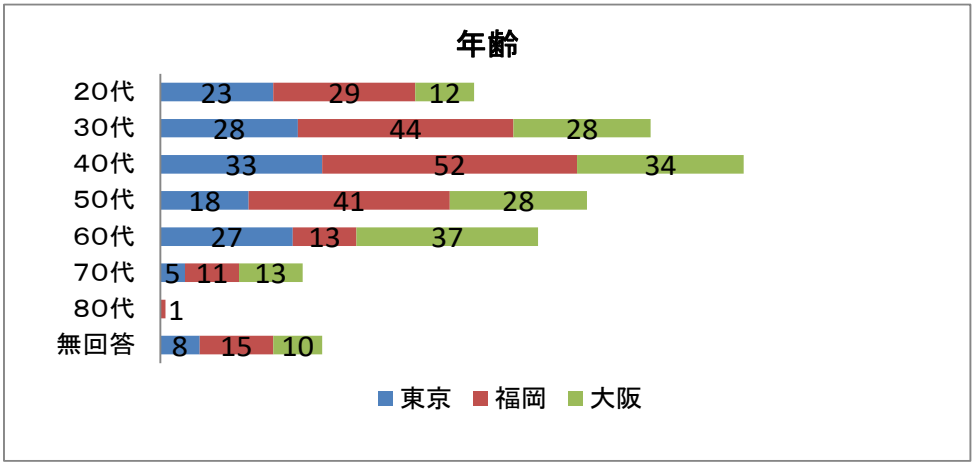
アンケートへのご協力ありがとうございました。

図 2-1-2　アンケート用紙

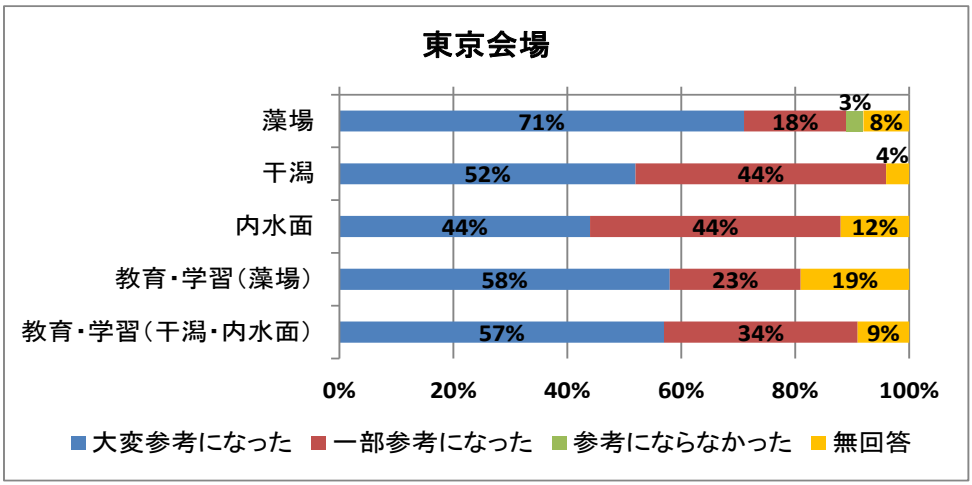
●参加者の所属・年齢・職業

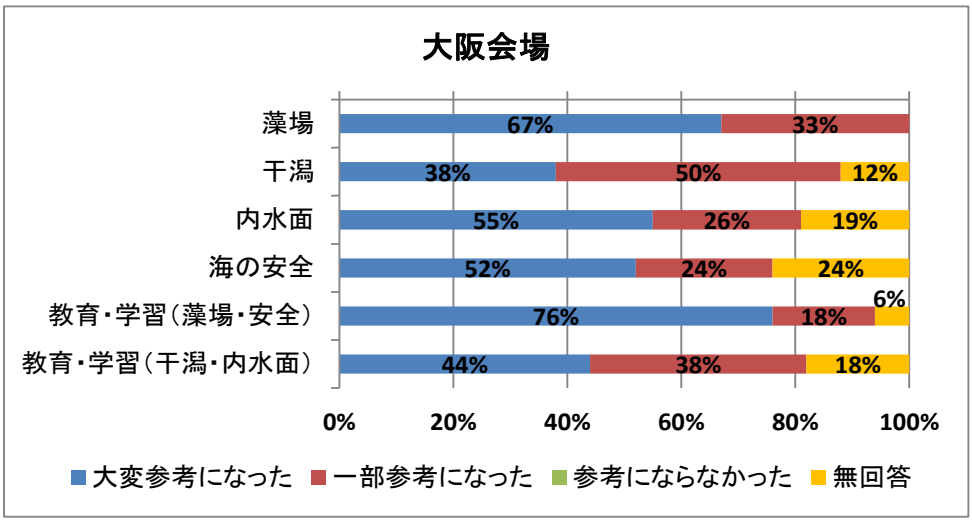

所属
活動組織
32
73
64
市町村
34
50
31
地域協議会
48
29
33
その他
20
44
28
無回答
8
10
6
東京
福岡
大阪

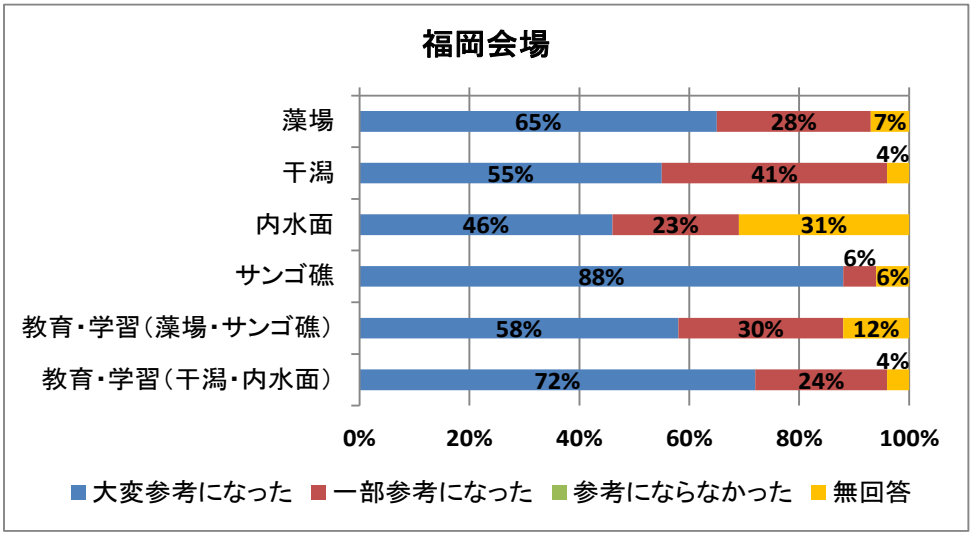

職業
漁業
22
42
22
自営業
2
6
7
会社員
11
4
4
公務員
58
99
70
団体職員
34
33
26
NPO
1
その他
12
14
26
無回答
3
7
7
東京
福岡
大阪


年齢
20代
23
29
12
30代
28
44
28
40代
33
52
34
50代
18
41
28
60代
27
13
37
70代
5
11
13
80代
1
無回答
8
15
10
東京
福岡
大阪

（１）内容は今後の活動の参考になりましたか？



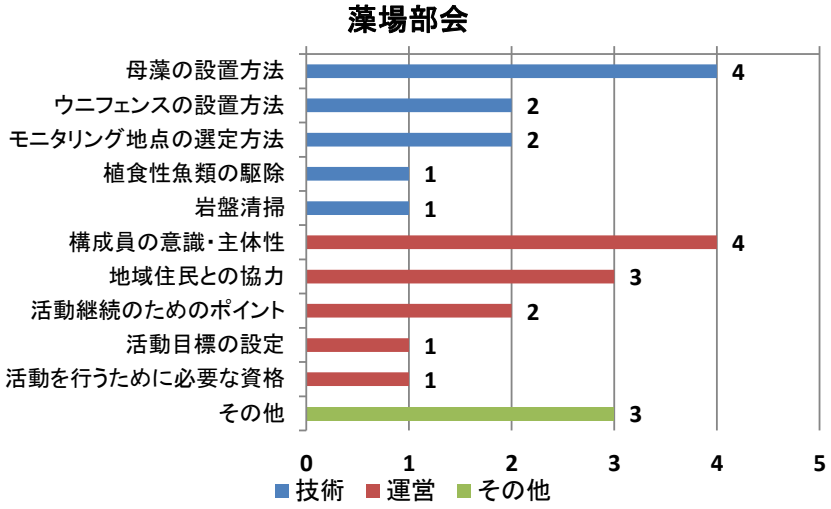




（２）事例紹介と自組織の活動を比較して、足りない点や、今後、積極的に取り入れていくべきと感じた点等をお書きください

【東京会場】

〇藻場部会



①技術

＜母藻の設置方法＞

タネ付け方法
スポアバックとネット
種づけについて、活動方針が参考になった。
藻場拡大のために、母藻を広げていくこと。

＜モニタリング地点の選定方法＞

自組織の活動ではデータ数が足りないので、もっと増やすべき。
適地、モニタリング地点の選定方法（具体的に）。

＜植食性魚類の駆除＞

魚類の除去方法
ウニの除去だけでなく、魚類の除去も必要であることがわかった。

＜ウニフェンスの設置方法＞

ウニフェンスは取り入れてみたいと思いました。
ウニフェンスによる対策が大変参考になった。

＜岩盤清掃＞

岩の掃除

②運営

＜構成員の意識・主体性＞

事例紹介のあった活動組織は漁業者自身が危機感を持って磯焼け対策に取り組まれていた。現時点で島根県は深刻な磯焼け状態ではないと考えられているが、今後も活動を続け、早期に成功事例を作り、漁業者のモチベーションを高めていきたい。
効果だけではなく、活動している方のモチベーションをアップさせるような活動をしているというのが。
漁業者自身でできることから行うことが大切だと感じた。
諦めずに継続していくこと。

＜地域住民との協力＞

磯焼け対策。足りないポイントとして、地元の方々と一緒に活動を行うこと。将来子供達が活動関係に興味を持つようにしたい。また、活動を認めてもらうために、一生懸命にしなければならないと思った。
活動に地域の人や子供達を入れて取り組んでいきたい。
地元との関わりが重要だと認識した。

＜活動継続のためのポイント＞

活動継続に当たってのポイント４つが参考になりました。とても基本的な項目ではありますが、４つのポイントを踏まえ再度、活動組織の活動内容の見直し等を行い、協議会としての指導を行っていきたい。
「できることから」、「継続する」ということが、大切であるということを学びました。地元の活動組織を指導する際にもそれを伝えていきたい。

＜活動目標の設定＞

目標設定をはっきりとする。海藻の種苗生産にも、活動組織で挑戦してみたいと思う。

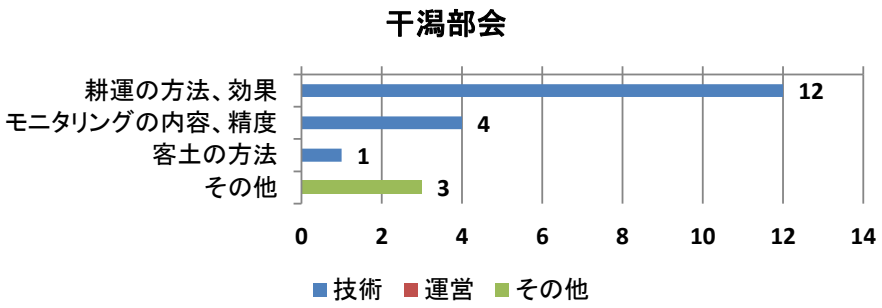
＜活動を行うために必要な資格＞

本市の活動組織では、スキューバの資格を持つ人の数が少なく、ほとんどが素潜りで活動をしている。そのため、駆除の効率が悪く、なかなか成果が見えていない。 組織で資格をとるか、ショップなどに協力を求めるか考えたいと思った。

③その他

藻場回復に手がかかるという事実は重いと感じた。
当市内にも藻場の保全を目的としている活動組織は多いので、まったく同じ活動ではないが、内容を参考にさせてもらい、情報提供していきたい。
構成員の高齢化、天寿全うによる減少により、やりたい事のアイデアはあっても活動が出来にくくなっている。構成員が他所のボランティアの協力をあまり快く思わないこともあり、うまい手が見つからない。

〇干潟部会



①技術

＜耕運の方法、効果＞

耕うんの方法の違い、他地区の耕うんの方法、いろいろとあること。食害に対する対策。
耕耘による評価に関して、様々な観点から評価されていて参考になりました。
噴流式の耕耘機を試してみる価値があると思った。桁網よりもしっかり耕せるだろうと感じた。
耕耘装置など、動画も見られて参考になりました。今後、積極的に耕耘を進めたいと思いました。
耕耘・客土は大切だと思いました。
耕耘活動の効果は大変勉強になった。
平成 25 年度より本事業を活用して、しじみの資源回復による漁業活動の復活を目指し取り組んでいるところですが、様々な要因により前年度放流したしじみが、貝殻も含め、「ない」ことがモニタリングの度に起こった。小川原湖の耕耘による底質の軟化はデータの裏付けもあり効果があると思いますので、自分の地区の底質を今一度確認し、活用していきたい。
現在は行っていないが、今後、耕耘による浅場の保全を始めようと計画している。耕耘による底質硬化の抑制効果が継続するのは２週間というデータを踏まえて計画を練りたい。
今後耕耘を行いたいという活動組織があるが、今回お聞きした話を参考に指導していきたい。
底質の状況を知った上で対策を立てていきたい。
シジミに対する重要性の度合はありますが、２週間に１回耕耘する等の活動をするなどすばらしいと思います。専門家が入って調査した点も素晴らしいと思う。
耕耘によって、シジミが増加するという成果がでていると、活動している方もモチベーションが上がると思うので、うらやましいと思った。底質が硬化している原因を明らかにしないと、これ以上の改善は望めないのではと考えられるので、行政も協力して原因究明に力を入れてはどうかと思った。

＜モニタリングの内容、精度＞

本県の事例と比較して、粘土、シルトの量、水草の量が少なく、耕うんの成果が認められ

るのがうらやましい。しっかりとモニタリングされている点を真似しなければいけないと思った。

科学的な分析をサポート専門家と行い、活動に反映させており、効率的な活動であると感じた。

当協議会の活動組織へ先進事例を紹介し、長期的な視点をもったモニタリングに努めたい。

事前調査、事後調査をきちんと行い、いくつもの効果を確認しながら活動していると感じました。各活動組織がより効果を実感しながら活動できるようにしていくことが重要と思いました。

＜客土の方法＞

覆砂の方法について、いろいろなやり方があると思った。

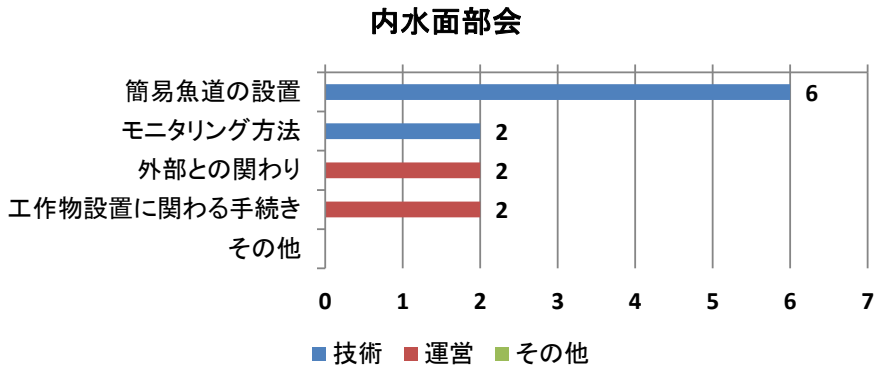
②その他

稚魚の管理についてよく理解できた。

夏期と冬期によって問題点があり対策をしているが一定の効果しかみられない。今後はよりよい成果を期待しております。また、自組織にも考慮すべき点もあると思うので改善していきたいです。

具体的な活動イメージ。

〇内水面部会



①技術

＜簡易魚道の設置＞

魚道は多くの河川に設置されているが、設置後時間が経過し本来の機能を発揮しているのか疑わしい実態が多く見られます。これに対し、機能を回復させるための簡易な補修が可能であることが示されており、すばらしいと思います。地元でも機能を回復させるべく取り組む事例が見られており、参考にしたいと思います。

魚道の設置→モニタリング（利用状況）→損傷部分を発見→一部改修→モニタリングの流れを確立している。河川管理者への連絡やつながりのスムーズさ。質疑応答が活発だったので、AM の干潟部会の時間が本当にもったいないと思った。「サクラマス」を通じて、海

面と内水面が協力し合っている。
作った魚道を利用した魚の調査結果が興味深かった。
魚道の難しさを再認識した。
魚道の利用の仕方も知ることができたので、河川清掃もしながら、川の流れに注意して活動できるようにしたいと思いました。
簡易魚道の有用性とモニタリングのしやすさを考えると、条件が合えば取り組んでみたい。

＜モニタリング方法＞

モニタリング方法と結果検討。
水生昆虫のモニタリングが難しい点がよくわかった。

②運営

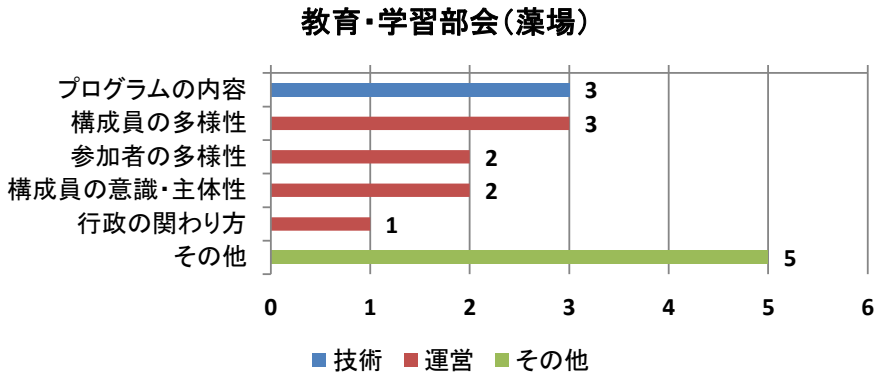
＜外部との関わり＞

河川の漁協だけでなく、海面の漁協も一緒に活動しているのが良いと思いました。同じ目的で活動することによって、サクラマスの生息や漁獲量に繋がることは、とても有効的で重要なことだと思います。
他県の先生方や優良事例を見学に行くなどの積極性。

＜工作物設置に関わる手続きなど＞

魚道設置における河川管理者との調整や魚の遡上の取組。
魚道を作る時に占有や工法に必要な手続きが分かった。

〇教育・学習部会（藻場）



①技術

＜プログラムの内容＞

EFP さんの女性らしい視点で子供のイベントを考えるのは参考になった。男ばかりだと、イベントがやっつけになりがちで反省。（子供がいるのに酒が入る）イベント終了後に子供の数が足りなくなり大騒ぎになった。
当市内での活動組織では、市民参加型のプログラムを行っている事例は限られているため、今後はそういった活動を検討していきたい。

冊子はよい事だと思いました。もっともっと勉強します。良い話が聞けて良かったです。

②運営

＜構成員の多様性＞

構成員にいろいろな団体がいることで、教育・学習の幅が広がるということがとても参考になった。ダイビングショップなどダイバーさんがいる活動組織には参考になると思うので、伝えて参考にしてもらいたいと思う。
漁業者以外のメンバーを仲間に入れたのでさまざまな活動が出来ていること。漁業者に一定の理解があること。
周りを巻き込むことの重要性を感じました。

＜参加者の多様性＞

教育・学習を行っている活動組織はあるが、事例のような充実した内容とは言えないところがある。地元園児・児童対象で行っているが、地元住民・地元全体対象とはなっていない。この事業を広く知って頂くためのヒントを多く頂けた。
本市の活動組織と比べても参加者がはるかに多く、すごいと思った。参加者増加にむけて取り組みたいと思う。

＜構成員の意識・主体性＞

活動組織自体の意識や取り組み、また体験型や子供たちを交えて行う活動を取り入れてみたい。
組合長さんの認識がすばらしいと感じました。市役所がすべて活動の事務をやってしまっているので、自力で出来るような方法を考えていきたい。(活動の方法や今後の展開も市で支えている)

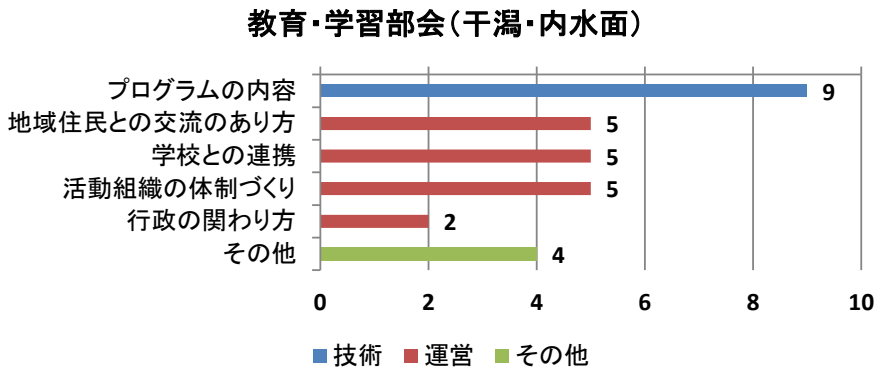
＜行政の関わり方＞

私の市でも、多面的事業とは関係ないが、漁協を中心にブルーツーリズムを推進しようと考えている。今回の講演を聞いて、運営方法や、行政やその他組織との調整など、為になる知識を多く得られました。行政からの支援が得られてから、活動の幅が大きく広がったとのことでしたので、当事者として、どのように事業者と支援していけば良いか、考えなければいけないと感じました。

③その他

漁業と観光を両立させるべく努力が必要であることを痛感しました。
漁協主体でイベント出来るのは良いと思いました。
大変参考になりました。江ノ島の事例良かったです。
体験活動をしている活動組織が少ないため、もっと多くの組織が行う必要があると感じた。
河川清掃のゴミ処理について参考になった。

○教育・学習部会部会（干潟・内水面）



①技術

＜プログラムの内容＞

子供達に体験の感想文を提出してもらう。
小学生を対象とした、漁業体験のスケジュールについて、とても参考になった。
アンケートの方法。
先進事例は市との連携や体験当日のスケジュールなど理想的であった。当協議会においても、協定市等へ事例紹介を行うとともに、安全対策を含め、今年度の活動の参考としたい。
環境教育（食物連鎖等）に繋がるような体験学習も追加できたら良いなと思いました。
事例紹介で発表された船橋漁協は、事業をバランス良く行っていたので、今後は参考にして、重点事項以外はバランスよく事業を実施するべきと思われた。安全対策をしっかりしていたので、取り入れたいと思った。
多種漁業や担い手、漁業体験、ブランド品の推進、食育まで幅広い内容だった。
船に乗っての漁場の見学を行うと、漁業がより身近に感じられると思うので、取り入れられると良いと思いました。ライフジャケットを身に着けたり、安全についても知る事が出来る事も良いと思いました。漁業がより身近になると、環境への関心にもつながっていくと思いました。
小学生向けの食育。

②運営

＜地域住民との交流のあり方＞

一般の方との取り組みが少ないので、今後の参考としたい。
地域との連携、幅広い世代での参加。
漁協の職員の意欲が高いと感じた。特に教育・学習については成果が分かりにくいので、余裕のない漁業者や漁協は手間ばかりかかると思いがちでなかなか協力的な姿勢になりにくい。事例にあったように、漁業者と小学生が実際に交流できれば、漁村外の人たちにも漁村に関心を持ってもらうことができる。自組織の活動では教育関係の活動をしていない

が、タッチプールで子供の気を引くだけでなく、漁業者と子供の、人と人との交流を大事にして活動をしてみたい。
本市でも漁場見学会や小学生のノリすき体験を実施しておりますが、子供や先生、市民の方たちとの「交流」や「心のふれあい」が不足していると感じました。ご紹介いただいた、地場産の水産物を使用した料理を提供してみんなで昼食をとって交流すること、漁業に関する講義学習は非常に効果的であると感じました。この事例を参考に本市でも「交流」や「心のふれあい」といった観点を考えなおして、効果的な事業にしていきたいです。
船橋市の PR の仕方等を参考にしていきたい。漁村の内外の方と交流できる場を作りたい。現在が PR や周知が足りてないのを実感しました。

＜学校との連携＞

小学校との連携の仕方に感心した。小学校教師に協力を呼びかけると、多忙のため、断られることが多いが、(実際に多忙であるが) 組織としてカリキュラムに取り組んでいければ解決できると思った。大変な作業だと思うが、進むべき方向だと思う。
学校へのアプローチ方法は非常に参考になった。
「担い手育成」の観点からみてもとても参考になった。先生に対しての漁業体験はとてもよい。協力が得られる体制づくりが重要だと思った。
学校の先生に対する事前の漁業体験の実施がとても重要だと感じました。自県では、学校が課外授業に消極的なので、まず学校、先生に対して、PR をしていく必要があると思いました。
教育・学習について、子供のみではなく、先生にも入ってもらい、活動内容を知ってもらう機会を作る。

＜活動組織の体制づくり＞

学校関係、漁協、行政間の信頼関係。
船橋市漁業協同組合活動グループは、グループ、市の協力体制が整っていて、円滑な運営ができているが、中々に難しいのが現状である。まずは体制づくりを進めていきたい。
教育・学習の取り組みは現在県内で行っておらず、今後、活動組織と相談の上で取り組みに加えていきたい。そのためには、実際に活動を行う漁業者のやる気、動機付け、および活動組織の事務を行う漁協職員の負担増が課題である。優良事例については、活動組織の実施体制がどのようになっているか参考にしていきたい。
人不足を感じる。構成員のスキルアップをする方法が必要。
これまで教育・学習についての活動は多くなかったため、積極的に取り入れるべきであると感じた。評価の方法は難しいところがあると思うが、他組織の方法等も含め参考にしていきたいと思う。

＜行政の関わり方＞

市や県がもっと積極的に事業に絡んでいくべきであると感じました。(干潟の保全のみで、教育へは参加していない)

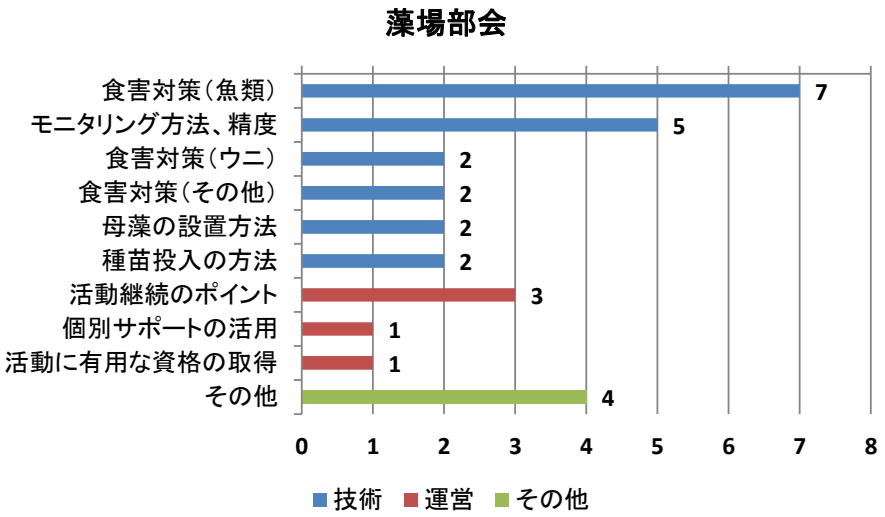
行政が参加申し込み窓口として（学校関係）関わっている点は良いと思った。
当市も教育・学習活動を行っているが、船橋市のようにかなり力を入れて取り組んでいる状況ではなく、今後の活動に力を入れるべき事項と感じました。

③その他

市民の魚に対しての考え方が変わったか（地元産）－消費量変化。
他県の小学生も受け入れ。窓口は市役所だけでなく、NPO や市、県の環境学習登録者でも良いと思います。ビデオ。
県内で客土（砂の供給）の要望はあるが、海保、砂、コスト面で実施できていない。船橋市の取り組みを参考に進めていきたい。

【福岡会場】

〇藻場部会



①技術

＜食害対策（魚類）＞

ウニフェンスやアイゴ、イスズミなどの魚の対策をしていなかったので、対策が必要だと思った。
刺し網の時期、時間
藻食性魚類の駆除
アイゴが近年、見られるようになったため参加。まずは経過を見守ることになるが、定点カメラ等は検討の価値があると思った。
藻食魚の駆除
魚の食害対策に取り組んでいきたい。
モニタリングでは魚の食害はまだ見られてないが、今後発生する可能性があるので対策が必要である。

＜モニタリング方法、精度＞

モニタリングの手法
市内・各組織から、波浪によりコドラートがなくなるという事例の相談を受けているため、景観被度を取り入れるよう助言したい。
モニタリングの精度向上と取り組みの改善。
モニタリングの実施。基本的なことをしっかり続けていこうと思います。
対策を立てる際の事前のアセスメント、評価の基準が不十分？で、ウニを捕れば…魚を捕れば…という安易な対策だけが各地で実施されてしまわれないか心配になった。

＜食害対策（ウニ）＞

ウニを移動させない（侵入させない）技術が必要であると感じました。
ウニフェンスの入れ方（方向）

＜食害対策（その他）＞

駆除と種苗投入のバランスを再考すべきと感じた。
食害対策の重要性

＜母藻の設置方法＞

母藻移植の方法を参考としたい。
母藻投入の方法が先進的だった。

＜種苗投入の方法＞

トリカルネットを使った種苗付の方法は取り入れていきたい。瀬戸内側のように遠浅の海でウニフェンスを設置する場合、囲った方が良いか？判断に迷うところです。アドバイスいただけると助かります。
海藻投入を行ってはいるが、育っていない。食害がメインになるので、対応を考えたい。

②運営

＜活動継続のポイント＞

小さな範囲で確実に活動を行い、評価する姿勢。
唐津では海面・海底清掃をしている団体が多く、活動がマンネリ化しているので、藻場の保全等で、今回の事例を参考にしたい。
継続した取り組みがやはり大事であると感じた。なかなか、成果がでている所やすぐに効果が無いと言われる所が多いので、このような事例があると励みになる。

＜個別サポートの活用＞

サポート専門家の活用→活動組織の意識（藻場再生の意義など）

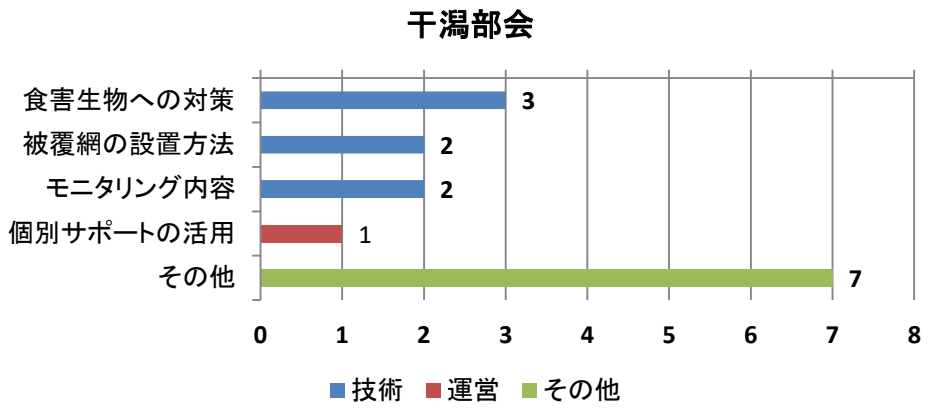
＜活動に有用な資格の取得＞

作業効率を上げるために潜水士資格取得へ向けての取り組み

③その他

藻場造成を今後も継続したい。
自己評価について、特に見えない部分が不十分と思われるので、今後の注意点と思われる。
漂着物等の処理。
モク類の生育促進。

〇干潟部会



①技術

＜食害生物への対策＞

漁場のベントス相が貧弱になると、放流したアサリにナルトビエイなどの食害生物がさらに増殖するということなので、その辺りの対策も考慮しつつ、ナルトビエイ、ホトトギス貝の駆除を行っていこうと思う。
稚貝の密度管理や放流などの取り組みを行う中、食害対策もしていかなくてはならないと、第二期対策から考えるようになった活動組織が多く出はじめていたので、今はどの取り組みが私たちの件に合うか考えていきたい。
外敵生物の拡散対策

＜被覆網の設置方法＞

被覆網の方法として、網掛川ではペットボトルをつけていた。我々がやっている被覆網では付着物の除去が課題であったが、応用してみたいと思う。
母貝団地として、花壇式を取り入れるのが有効ではないかと思われた。

＜モニタリング内容＞

放流場所以外でのモニタリング（活動場所以外へのしみ出しの確認）
活動範囲全体への資源増殖効果把握

②運営

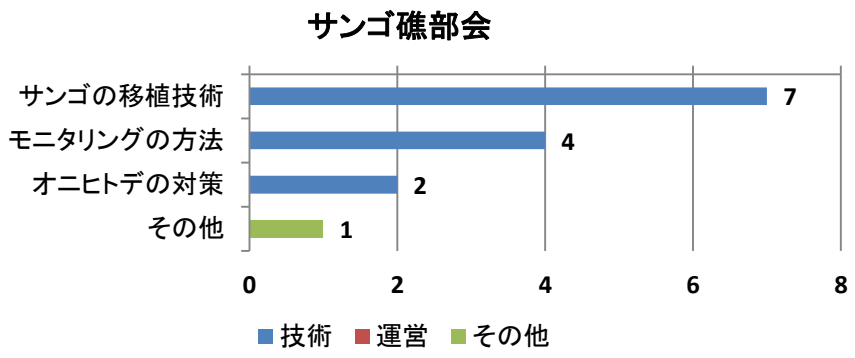
＜個別サポートの活用＞

専門家を招いての問題点等の解決は有効と思いました。

③その他

袋網の活用
内水面で海の干潟とは活動内容が違いました。石倉については研究したいと思いました。
事例紹介と自組織を比較して、外敵生物から二枚貝を守る取り組みを事例紹介の方は考えていた。
本県の取り組みと、内容が異なる点が多かった。
色々な手法で検討を行っている点。
当組織では管轄する範囲にシジミ漁場があるが、他地域にアサリやハマグリにおける事例が多いにも関わらず、シジミ漁場に応用されていないと感じた。考え方が閉鎖的になっている可能性があるため、今回の講習会の事例を応用していきたい。
新たなアサリ養殖の方法を策定していかなければならないが、大規模な風水害が多発する中で、アサリの成長の面だけではなく、災害にも強い養殖方法を検討しなければならないと感じた。

○サンゴ礁部会



①技術

＜サンゴの移植技術＞

植え付け方法など参考になった（気温 30℃以上はダメ）。今後、中間育成等も考えながら取り組みたい。
移植するサンゴの大きさ、水深。モニタリング方法。
サンゴの移植についてもコツがあることが分かった。
移植サンゴのサイズ、手法。全体を考えた仕組み
移植や中間育成など。除去の継続。
中間育成の方法、移植の留意点、モニタリング法。
８ｃｍ以上のサンゴを使用。

＜モニタリングの方法＞

計測方法等の事例
モニタリング方法の再検討

モニタリングの方法、水深について参考になった。
モニタリング方法や今後の活動について参考になった。サンゴの移植については、興味がある団体がいるので、今後、検討したい。

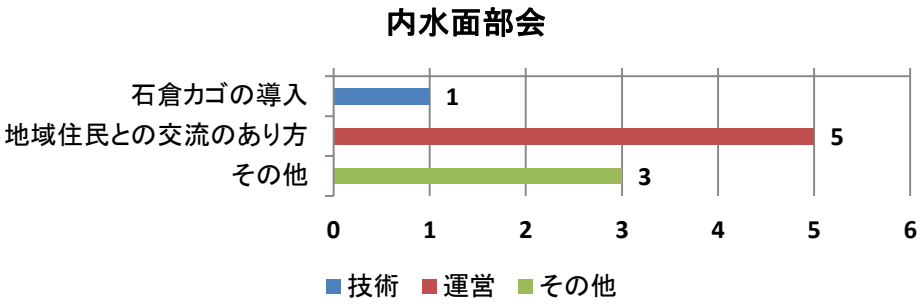
＜オニヒトデの対策＞

オニヒトデ発生のサイクルがあることなど、その対策について勉強になった。
オニヒトデの除去

②その他

恩納村の事例全般

〇内水面部会



①技術

＜石倉カゴの導入＞

石倉カゴの取り組みを行いたいという活動組織が県内にあるが、そもそも石倉カゴの目的が不明だったため、地域協議会として良いとも悪いとも答えられなかった。今回、石倉カゴを用いた活動について学ぶことが出来たので、今後の検討に活かしたい。

②運営

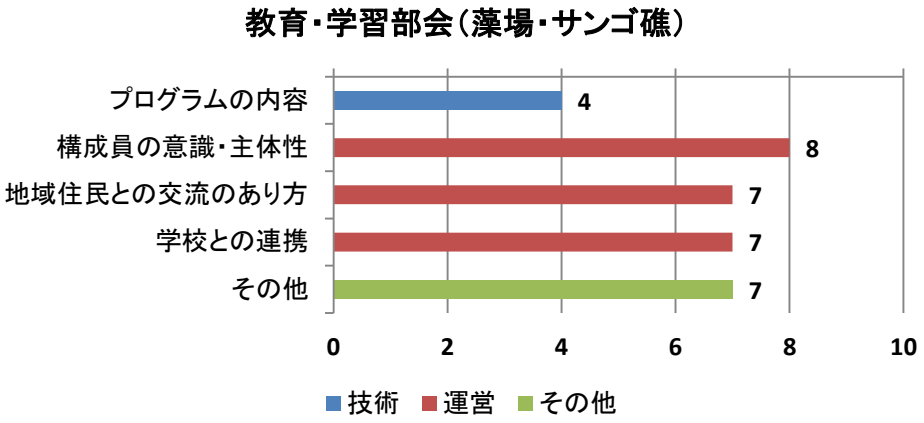
＜地域住民との交流のあり方＞

自組織の活動出来る人数が少なく、もっと多くの方の参加を促したい。
先進地区事例報告の中で行政、漁業者、自治会、学校等のネットワークができており、参考になりました。
足りない点は、漁協以外の団体に組織に入ってもらい、一般市民との繋がりを深めること。
地域の人を巻き込んだ活動を積極的に行っているが、今後取り入れていくべきと感じました。
自治会に小学生等学生の監視を行ってもらっていること、地元の住民と協力する必要性、可能性について、考える必要があると感じた。

③その他

アンケートを実施して、年度ごとに比較していたところ。
石倉の先進地として髙崎会長に発表してもらえたことで、今後、活動が活性化することを期待したい。
教育、啓発活動については本事業において実行できていないので、今後取り入れていく必要があると感じた。

○教育・学習部会（藻場・サンゴ礁）



①技術

＜プログラムの内容＞

単なる学習会のみではなく、スポアバッグの作成や投入、魚食普及等組み合わせて取り組まれており、先進的に感じた。
勉強会や体験等の活動など取り入れていきたいと思います。
観光漁業の取り組み
教育活動と観光漁業
これまで、藻場保全活動の中で学習活動を行ってこなかったが、今年度あるいは来年度から学習活動を考えており、名護屋の事例は参考になった。

②運営

＜構成員の意識・主体性＞

活動組織（管内）に自分達の漁場環境のこととして、もっと積極的に勉強し、活動してもらえたら、今よりは前進するのではないかと改めて思いました。
地区の中心になる人が、やる気を出してこそ、取り組みの意味が出てくると思う。
活動組織の自主的な取り組み
継続して取り組まれており、素晴らしいと思った。
勉強会がすごく充実していてすごいと思いました。
名護屋の教育の事例は大変参考になった。しかし、自分の自治体の力でどこまでやれるか

は不安がある。
活動報告の皆様のスムーズでしっかりした連携が良かった。

＜地域住民との交流のあり方＞

児童、教員を含む地域一体となって、藻場の保全活動に取り組む姿勢。食育を通して、環境の保全意識を高めていくこと。
若い世代の参加を呼び掛けたい。
世代を超えての交流
名護屋地区の地域と子供を巻き込んでの活動はとても有意義だと思った。活発な動きが素晴らしく、参考にさせていただきます。
勉強会などを通じて、もっと多くの方に知ってもらうようにしていくべきだと思いました。
子供達に地域の海を知ってもらう良い活動だと思った。子供だけでなく、親子での参加や大人も参加してもらうのもいいのかもしれない。大人でも地域の海を知らない人はたくさんいるはず。
子供達に海を知る楽しみや大切さを教えていきたい。

＜学校との連携＞

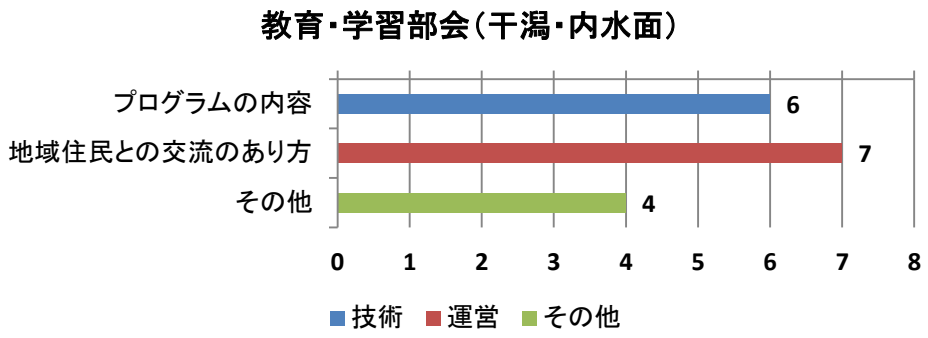
地元の小学生らに対する啓発活動について、改良の余地があるものと感じました。
地域の小学生のみだけでなく、地元高校生と連携した商品開発やマスコミへのＰＲなど相互利益になるように活動をするべきだと感じた。
教育・学習部会において、学校の職員向けの説明会の必要性や有用性が参考になった。
学校単位での学習会･体験プログラムが難しい場合の夏の体験プログラムは参考になった。
なかなか地域を含めての活動が難しいが、地域の問題として、学校等で教えていきたい。
学校との連携をもっと進めていかなければならないと感じました。
教育学習にまだ活動組織が取り組んでいないので、今後、取り組めるように（内容や事例を伝えながら)、検討していきたい。学校との調整についても、組織と打ち合わせしていきたい。

③その他

水産教室の回数を増やしたい。
藻場の保全に取り組む必要あり。
藻場の消失要因（水温、食害生物、種苗不足）等への対策に加えて、これから起こるであろう消失要因の推定や、その特定方法について考えていくべきだと感じた。
７～８年前、名護屋地区の活動に参加、活動させてもらっていた者です。名護屋のグループはサポーターや行政に頼るだけでなく、自主的に活動されていて、財源確保にも努力されている非常に熱心なグループです。学校の合併など、以前より困難な部分も出てきていますが、続いていることに敬意を表する次第です。今後のモチベーションを保つため、行政・普及員としてサポート出来るよう、各地の好事例を学んでいけたらと思います。
NPO 法人化

魚を使った料理の試食をしてみたい。
教育活動の重要性を理解できた。

〇教育・学習部会（干潟・内水面）



①技術

＜プログラムの内容＞

子供を取り込んで、考えさせる活動をされている所などは、未来に繋がる新しい取り組みと感じました。
多くの分野から参加して、活動を行っているところ。
海の漁協が川の環境保全活動に取り組んでいる所がおもしろいと感じました。
学習活動における継続性。
組織の大きさは違うが、多くの時間がとれれば、小学生にもアサリや魚をとる学習を取り入れても面白いと思った。現在は魚とのふれあい。
市民参加型の取り組みは、重要性が高いとの認識があり、本県でも取り組んでいるが、川まつり等での「食べて終わり」であるため、川の教育についても取り組んでいきたい。

②運営

＜地域住民との交流のあり方＞

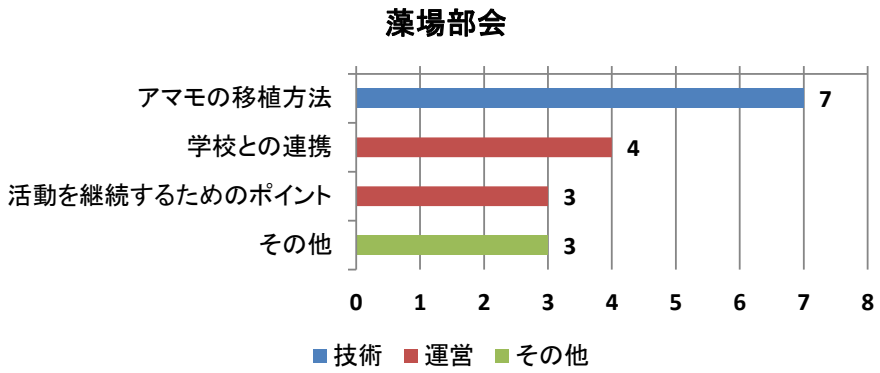
大きなポイントとして、組織活動だけでなく、一般市民の方などに参加してもらうことが、事例紹介と比較して、自組織は足りていない。
地域、子供と共に行動すること。
地域住民や次世代の担い手である子供へのアピール。
なるべく地域住民を巻き込んでいる点。次世代で活動が繋がるようにしている点。
一般市民を巻き込んで、地域で取り組んでいた点。次世代に活動を繋いでいこうとしている点。ハマグリを使ったユニークな活動をしている点。
とても充実した事業内容だったので、参考になった。組織としては、一般市民を巻き込むことの効果は大きいと感じた。
一般市民を巻き込むことの重要性を感じる一方で、なかなかそれが出来ない状況がある。

③その他

ゴミの回収だけでなく、種類も調査していきたい。
組織の活性化をどう図るか。
教育、啓発活動は、積極的に取り入れるべきだと思った。（特に子供を対象としたもの）
次の世代へ伝えていくこと（子供達に伝えることの大切さ）

【大阪会場】

〇藻場部会



①技術

＜アマモの移植方法＞

種苗活動他。
アマモの定着には、「カキがら」をまく。アマモの移植場所は、砂地が無難とわかった。
アマモの移植時期が１～３月がよいとわかった。
アマモの移植場所は、砂地が無難とわかった。
移植環境や時期等。
保全活動については、カキ殻基質の設置、海底耕耘を取り入れてみたいと感じた。
水温や場所、光などの条件を考察し、試行錯誤、工夫を繰り返しながら、実施されている点。

②運営

＜学校との連携＞

地元の子供たちと協力した取り組みについては勉強になった。管内の活動にも生かしていきたい。
漁協から学校などの幅広い連携。
小学校など多くの機関との連携。
地域や行政と連携したネットワーク構築を参考にしたい。

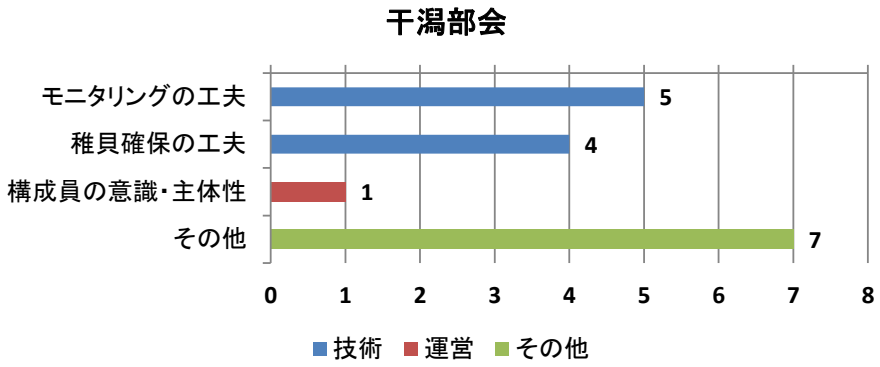
＜活動を継続するためのポイント＞

活動によって、うける効果を提示すること。
PDCA サイクルとして、長年取り組むことや、組織作りが大事であること。

③その他

漁獲量の変化等を調査してはどうか。
現在、自組織は立上検討中でして、海底耕耘を予定しております。しかしながら、本市では、種苗の中育放流を実施しているものの、思うような効果が出ておりません。今後、藻場の造成等検討していきたい。
海藻（ワカメ）の種苗投入に取り組む。
魚類等の稚仔の生産・育生の場として重要であること、学生、一般と協力していること。

〇干潟部会



①技術

＜モニタリングの工夫＞

稚貝分布調査（モニタリング）の独自の調査道具による工夫。事業の進捗の PDCA。
集積場所の見つけ方。ギャップの考え方→逆転の発想。
塩ビのサンプリング道具は使ってみたい。当地区では資源量が少なくて使えないと思うけど。
アサリの密度調査の方法は参考になった。非常に効果の出るやり方なので、参考にしていきたい。
稚貝の調査と息の長いモニタリングを実施したい。

＜稚貝確保の工夫＞

稚貝の確保策として成果を出していることは、言うまでも無いが、今年度から参加者が 50 人増加したという実績からも、簡単、短期間という所に着眼点を置いているということが素晴らしい。継続してやり続けるためにこういった取り組みは必要。
従来方式から積極型の新方式を確立させてしまうという点はとても前向きで良いと思いました。(年配の方はなかなか新しいことをやりたがらないので)
アサリ種苗の確保方法について、試行錯誤を繰り返しながら、ベストな方法を確立された

熱意には感心した。また、全口で取り組まれているケアシェルによる天然採苗は非常に難しいということを再認識した。
活動内容は簡単だが、しっかりと科学的根拠に裏打ちされており、現場、行政、研究の連携が取れている所を見習っていきたい。

②運営

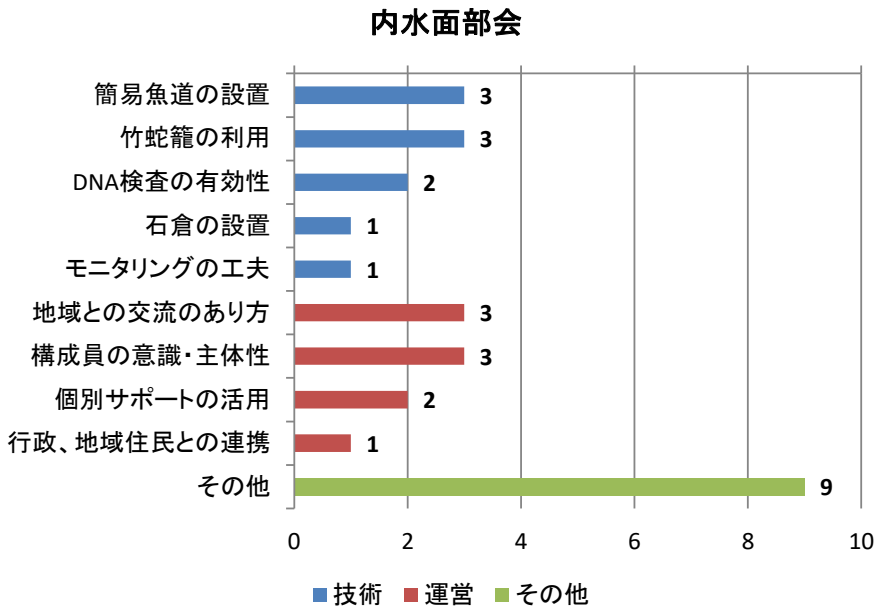
＜構成員の意識・主体性＞

活動組織が中心となって、資源減少の原因把握や増殖対策に科学的な裏付けを持って、高いレベルで取り組んでいるのはすごいと思いました。

③その他

網袋、保護網の設置はほぼ同様に思った。
事例紹介と同じような取り組みをしております。
大野方式も事前調査ありきの様であり、思ったよりも労力を要しそうである。
被害対策が今後も重要であることが分かった。
干潟は難しいと常々思っていました。今日の事例発表は大変参考になりました。
鳥の食害について参考になった。
アサリの密度化で、食害の原因はエイと言われているが、クロダイである。地盤高を見てみる。

〇内水面部会



①技術

＜簡易魚道の設置＞

魚道の設置。魚の住みやすい環境づくり。
仮設魚道の取り組み等、大変参考になりました。
階段魚道。

＜竹蛇籠の利用＞

「竹蛇籠」はじめて知りました。とても興味深いです。
竹蛇籠の設置。
竹蛇籠は伝統工芸としても紹介されたが、石倉作りより安価に対応できそうで参考になった。

＜DNA 検査の有効性＞

大変参考になるお話で良かった。魚類の DNA 調査について興味深かった。
DNA を用いた科学的分析など、新たな視点の報告が知れた。科学的な知見について不足していることも多いと思った。

＜石倉の設置＞

石倉作りが今ブームである。カワウ対策上にも不可欠な対策と思慮している。

＜モニタリングの工夫＞

モニタリングは効果的、能率的、効率的にやらなければいけないと思った。活動団体が一番負担になっているのが、モニタリング調査なので、無理なくできる方法を模索したい。

②運営

＜地域住民との交流のあり方＞

地域住民と協力体制を作る事が大切。時間をかけても作りたい。
モニタリングだけでなく、行動が必要。中心的役割を担ってくれる人の重要性。
漁業者以外に啓発し、協力が必要。(若い人の取り込み)

＜構成員の意識・主体性＞

目的意識、目標を持つこと（組織として）
内水面漁業の重要性を活動する者で認識する。京都の川魚文化。
当町の活動団体は場当たり的な取り組みが目立つ一方、今日の事例発表では計画的に、目標をもって地道に解決、解消、成果達成に向けて取り組まれていた。現状を根本的に改善するためには、何をしなければならないのか、しっかり考えていきたい。毎年同じことをしているだけでは、だめだと思った。

＜個別サポートの活用＞

専門家の知識を取り入れることの重要性を感じた。科学的、理論的な知識を取り入れれば、もっと良い取り組みが出来るかもしれない。熱意をもって取り組んでいきたい。
専門家の方のアドバイスを頂けるチャンスがほしい。

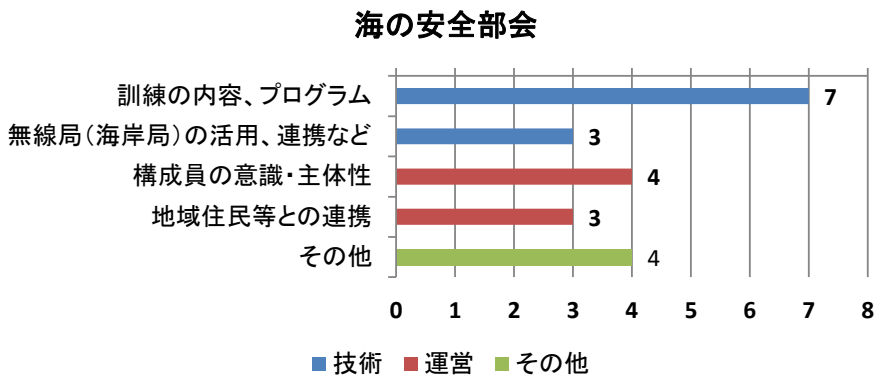
＜行政、地域住民との連携＞

国（河川事務所）、府、市、NPO、大学等の連携が十分活かされた活動組織であり、感心しました。組織の中に、川に関係深い専門家の方が在籍されており、力強いものと思われます。構成員の高齢化に伴う活動人員の確保、専門知識、行政の協力に欠けている。プロ漁師がいない。（漁業で生活できないため）

③その他

河道内の湧水の保全。
河川の環境だけでは無く、今後、生態系及び文化面でも取り組みを行って行かなければ。
研究者を組織に加えないと出来ない活動だと感じた。
多くの取り組みを短時間で説明され、内容もやや難しかったので、理解が難しかったです。
川づくりのノウハウを持った人材の不足。
「自然再生」が必要であることは良く分かるが、予算の問題で STOP している現状を打破する必要を感じました。
専門家の切り口からの説明は、また違った意味で参考になった。
魚の資源有効化（～店に出す）。天然魚の活用（放流魚との調和）。モニタリング方法。
会の発足関連。会の運営方法。DNA 分析。

○海の安全部会



①技術

＜訓練の内容、プログラム＞

地震訓練、油防訓練を取り入れて行くべきと感じた。
救命はやっているが、他の訓練も行いたいと思う。
油濁はやっていないので、やりたい。
年度ごとの訓練におけるテーマの設定。音声及び、文字データ情報通信可能区域の確認。
食との絡みが重要という話があり、炊き出しの費用も事業費に含まれるとの事なので、参考にしたい。
様々な事故を想定し、また、繰り返し行うことを重要としている点。
海難訓練にも様々な取組みがあることを知る事ができ、地元組織にも紹介していきたい。

＜無線局（海岸局）の活用、連携など＞

複数の無線局との連携の必要性。
海岸局が閉局した場合のバックアップ体制の構築。
無線局閉局に備え、他地域・地区との連携が必要。

②運営

＜構成員の意識・主体性＞

モチベーションアップの為に、何をやるか、食事（炊き出し）などの提供を考える。
モチベーションの維持をどの様に行うか。
テーマの設定（救助、防災、救命、油防除、消化等）。その年のテーマを決めて活動すると、訓練が充実すると感じた。
活動の種類が異なるので、比較は難しいが、他の近い活動のものと比べ、様々な活動に積極的に取り組んでいるので、その点は見習いたいと思った。

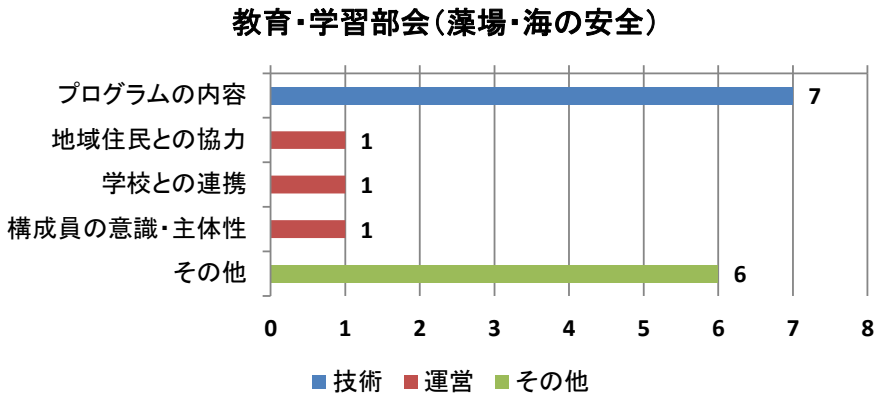
＜地域住民等との連携＞

関係団体を広げ、ちょっと違った内容も取り入れる。地域と共に行う。
地域の参加者を増やすには、炊き出し訓練（食事の提供）等を考えるとよい。
メディアを利用し、より多くの人に活動を周知すること、防災への意識を向ける努力も見習いたい。

③その他

島から近い場所で（ボート）の監視を検討。
もう少しまめに記録すること。
専門の部会とは異なった部会に参加したため、基本的な事を理解しておらず、内容について把握しづらかった。
救命胴衣の着用率をあげるための訓練を行っていきたいと思います。

○教育・学習部会（藻場・海の安全）



①技術

＜プログラムの内容＞

漂着ゴミの項目を使った教育・学習（海ゴミ学習）。※管内の組織は藻場 or 干潟学習の事例のみ。
タコを使った漁獲体験。
体験学習。
アマモ場でのすき網体験をぜひやってみたいです。
地元の民宿の参考にしたいと思います。
民宿との連携。
いろいろな新しいアイデアがすばらしい。おしゃれでいいですね！

②運営

＜地域住民との協力＞

矢代地区の取り組みを紹介していただき、小さい地区でも団結すればすばらしい事業が出来ると感じた。自分達の地域も一部の方々が積極的に取り組んでいるが、組織としてももっとやれることがあると感じた。

＜学校との連携＞

小学生を活動に参加させるには、教育委員会の理解を得ることが一番。

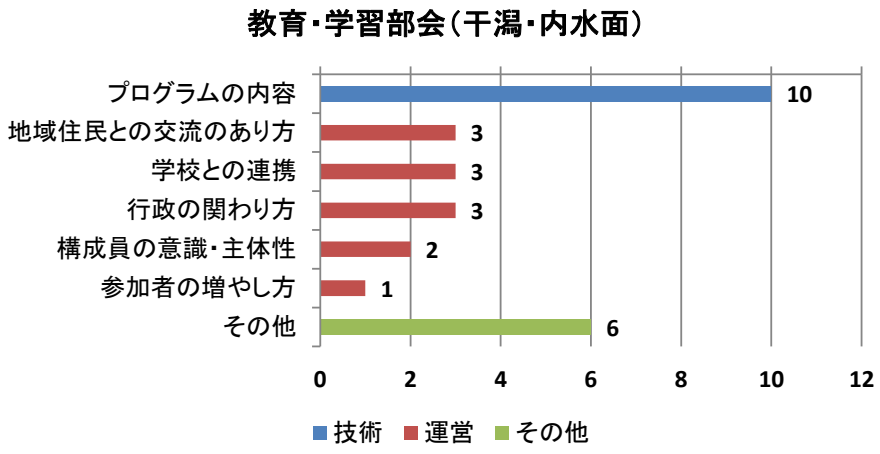
＜構成員の意識・主体性＞

漁業者が漁村の為の活動であるという意識を持ち、より豊かな漁村を取り戻す意思が成果に繋がると感じた。この点を見習いたい。

③その他

小浜市の話は私自身、環境が似ていたので、とても共感を持てました。後継者問題はこれからも大きな問題だと思いますので、お互い頑張っていきましょう。
漁師のやる気は本市にもあるので、西野さんに来てもらいたい。多面的の経費で講師として呼びましょうか。
事業費の使用割合（用途別等）が分かると良い。
組織のまとめ方では、小集落から始めることは良いかもしれない。
不正を正す勇気が必要だと感じました。
密漁の容認をすべての漁家でやめたことはすごいと思いました。

○教育・学習部会（干潟・内水面）



①技術

＜プログラムの内容＞

小学校や寿司店舗での飼育体験が素晴らしいと思いました。サクラマスの保護から活動組織についてまで、知ってもらえることが出来ており、活動の PR や体験参加者等を増やすことが重要であると感じました。
小、中、高、各世代への（体験）学習が充実していると感じました。関係する飲食店も、活動に参加していることが興味深い。参考になりました。
県内でも子供を対象とした活動をしているが、座学や現場見学にとどまっている。今回、紹介いただいた飼育体験は子供の興味を引くうえで、有益と思った。また、飲食店での取り組みにより、一般の方へも啓発できると思う。
１日限りのイベントに終わらずに、飼育体験によって、長い期間継続的に教育できる点が優れているなあと思いました。（１日限りのイベント的な教育・学習活動の効果に疑問を感じているので。）
教育・学習活動の運営や取り組み方が大変勉強になった。
教育活動への工夫、楽しく興味がわくようにという点。
子供、商店地域が一体となっての取り組みが、本事業の目的に大きく寄与されるところであり、事業活動の軸が更に広げられる方策が良く生かされている。
富山市のサクラマス飼育については、全国的にも規範となった。実施するまでの計画、対策が重要であると思われる。
取り組みを実施するにあたり、課題の洗い出しや事業の狙いを精査するのは当然のことであるが、ともすれば、「例年通り」で忘れがちである。モニタリングや自己評価の必要性と、当たり前のことをしっかりやることの大切さを再認識した。活動や水産多面的機能を一般の方にも知ってもらう取り組みの必要性を感じる発表でした。団体との調整、準備の難しさを改めて認識しました。観察ノートのアイデアが参考になりました。
ペットボトルでの話は良かった。

②運営

＜地域住民との交流のあり方＞

現在、取り組んでいる小学生を対象とした体験学習を保護者地域住民と取り組む活動に広げたい。
保全活動はしっかりと行っているのですが、その活動を周辺地域の住民の方に少しでも知って頂いたら、活動も活発になるのかなと思った。
行政、地域等巻き込めるものは巻き込んで行くことが大事。

＜学校との連携＞

地域の学校の子供たちと交流を通じた活動をしている点。学校行事の中で、体験学習を組み込んで、実施することの難しさ。
活動組織と小学校の繋がり、学校指導者に河川への理解者がいる事が、恵まれていると感じた。当組織内では、なかなか学校の先生の理解が得られない。行政との関係も良好なのは、なかなか当組織も参考になる。
地区学校の活動への取り組み。

＜行政の関わり方＞

水産庁一県一市一活動組織一サポート専門家と知恵を出し合って活動することで、活動成果を出すことができると感じました。
各活動組織の活動にもっと市町や県の協力が必要だと感じました。
補助金を交付する側の行政として、平成 28 年度からは一線を引いた状況であるが、やはり、漁協のみでここまでの活動、イベントを行うのは、難しいと感じた。当県の内水面漁協は、基盤が弱く、新しい事へのチャレンジがなかなかできないが、この講習で元気な漁協の話を聞き、光が見えた気がした。

＜構成員の意識・主体性＞

イベントの丁寧さが素晴らしかった。当県では企画力や、熱意が足りない活動組織が多い。
構成員が積極的に活動に参画されていること。当組織では、高齢の構成員が多く、活動参加が厳しい。

＜参加者の増やし方＞

活動に参加する人の集め方。

③その他

活動の計画などサポートが欲しい。
漁業者の知識を持つこと。
まったく同じ活動内容だと思った。自組織では、大学、県水産試験場と協力していて、水質、土質について調査を継続して行っています。
同意見をもちました。
教育・学習面を取り入れて行くべきと感じた。ただ、活動もしながら、両面で成果を上げ

	るには相当のサポートが必要。
	活動人数が限られる中、教育・清掃等に頑張ってくれているが、「体験」とからめた教育活動を充実させていればと考える。

2-2. サポート専門家による技術的指導

以下の要領により、本事業に取り組む活動組織等を対象としたサポート専門家による技術的な指導を行った。

(1) サポート専門家の登録

活動組織の指導にあたるサポート専門家の条件は、対策事業に対する豊富な経験や実績を有し、多くの活動組織のニーズに十分対応できる技術を有する者とした。具体的には、平成21 年度～24 年度環境生態系保全対策及び平成 25 年度～28 年度水産多面的機能発揮対策において登録実績のある者に加えて、登録専門家、有識者（検討委員等）、地域協議会からの推薦があった者とした。登録の有効期間は、登録日から平成 30 年 3 月末までとし、登録にあたっては、以下の書式を用意し、適正かつ公平な運営を図った。

また、活動組織のニーズは様々であるため、サポート専門家の専門分野を表 2-3-2 のとおり分類し、可能な限り広範なサポートができるよう務め、常時派遣が可能な体制を整えた。

今年度登録したサポート専門家は、表 2-2-3 のとおりであり、計 70 名を登録し、うち、藻場の専門家が 48 名、干潟等が 33 名、サンゴ礁が 15 名、河川・湖沼が 17 名、教育・学習が 15 名であった。ヨシ帯と清掃活動は専門家の登録がなかった。

表 2-2-1　サポート専門家登録にあたって整備した書類

種類	内容	備考
専門家登録実施規定	専門家登録の要件と専門家および登録者の責務を規定（図 2-3-1 参照）	
継続登録申請書	平成 25 年度以降の前身事業で登録実績のある者が提出	
新規登録申請書	平成 29 年度から新たに登録する者が提出（氏名、現住所、勤務先、連絡先、専門分野、経歴等を記載）	推薦書を添付
専門家登録通知書	全国漁業協同組合連合会、全国内水面漁業協同組合連合会の連名で通知	

表 2-2-2　サポート専門家の専門分野

分野	対応する活動項目	備考
藻場	藻場の保全・水域の監視	海面
干潟・浅場	干潟等の保全・水域の監視	海面・内水面
ヨシ帯	ヨシ帯の保全	内水面

サンゴ礁	サンゴ礁の保全・水域の監視	海面
河川・湖沼	内水面生態系の維持・保全・改善	内水面
清掃活動	漂流、漂着物、堆積物処理・水域の監視	海面
教育・学習	上記に関連し多面的機能の理解・増進につながる教育・学習に資する取組	海面・内水面

※水域の監視（海洋生物・環境の監視）、種苗法流については、上記各分野に含まれるものとした。

平成 29 年度 多面的機能発揮活動サポート専門家登録制度実施規程

（目的）

第１条　多面的機能発揮活動サポート専門家登録制度（以下「登録制度」という。）は、活動組織が行う「海の安全確保」、「環境・生態系保全」及びこれらの活動効果を高める「教育・学習」に係る活動（以下、「多面的機能発揮活動」という）をサポートする人材情報を登録するとともに、登録された人材の協力を得ることにより、活動組織による効果的、効率的な活動を推進することを目的とする。

（実施主体）

第２条　本制度の実施主体は、全国漁業協同組合連合会（以下、ＪＦ全漁連という）及び全国内水面漁業協同組合連合会（以下、全内漁連という）とする。

（専門家の区分）

第３条　多面的機能発揮活動サポート専門家は、活動組織が抱える技術的な課題をサポートする「技術サポート専門家」と、事業実施に伴う各種事務処理をサポートする「運営サポート専門家」に区分され、それぞれが独立した資格として登録される。

（技術サポート専門家の役割）

第４条　技術サポート専門家は、活動組織が多面的機能発揮活動を実施していく過程で生じる問題に対して技術的なサポートを行うものであり、次に掲げる役割を担うこととする。

一　多面的機能発揮活動の計画づくりに関するサポート

二　多面的機能発揮活動の手法に関するサポート

三　多面的機能発揮活動に係る調査等に関するサポート

四　報告書の作成、一般市民の参加・情報公開などの運営・広報に関するサポート

（運営サポート専門家の役割）

第５条　運営サポート専門家は、活動組織が多面的機能発揮活動を実施していく過程で生じる問題に対して事務的なサポートを行うものであり、次に掲げる役割を担うこととする。

一　関係機関との調整に関するサポート

二　書類の整備状況の確認及び指導

（技術サポート専門家の登録要件）

第６条　技術サポート専門家は、登録を受けるために、次の要件を備えていなければならない。

一　多面的機能発揮活動の主旨をよく理解し、全国の活動組織が行う多面的機能発揮活動への協力の意思がある、わが国在住の個人であること。

二　「海の安全確保」、「環境・生態系保全」、「教育・学習」のいずれかの活動項目のうち、一項目以上の専門的な知識を有していること。なお、「環境・生態系保全」については、藻場、干潟・浅場、サンゴ礁、ヨシ帯、河川・湖沼環境、清掃活動のいずれかの専門知識を有すること。

図 2-2-1(1)　サポート専門家登録実施規定(1)

三　上記の多面的機能発揮活動に係わる業務について、十分な実務経験を有すること。

四　活動組織の要望及び当会からの派遣依頼に応じ、現地を訪問し、活動組織への技術的サポートを行うことが可能であること。

（運営サポート専門家の登録要件）

第７条　運営サポート専門家は、登録を受けるために、次の要件を備えていなければならない。

一　多面的機能発揮活動の主旨をよく理解し、全国の活動組織が行う多面的機能発揮活動への協力の意思がある、わが国在住の個人であること。

二　多面的機能発揮活動の事業実施に伴う書類作成や事務処理に精通していること、または運営事務に係る所定の講習を受講していること。

三　活動組織等の要望及びＪＦ全漁連及び全内漁連からの派遣依頼に応じ、現地を訪問し、活動組織への事務的サポートを行うことが可能であること。

（専門家の責務）

第８条　サポート専門家は、次に掲げる責務を有する。

一　水産多面的機能に関わる専門的な知識、技術の研鑽に努めること。

二　常に活動組織の視点に立ったサポートに努めるものとし、活動組織から要請されている事項以外のこと（個人的な主義・主張の押し付け等）は行わないこと。

三　活動組織へのサポート実施後は、指導の内容等を取りまとめ、海面の活動組織についてはＪＦ全漁連に、内水面の活動組織については全内漁連に、サポート実施後所定の様式により報告すること。

四　サポート活動により知り得た情報等を、他人に漏えいしてはならない。

五　野外作業においては、ヘルメットやライフジャケット等の着用など、十分な安全対策を講ずるとともに、潜水など危険を伴うような活動を行う場合には保険に加入すること。

（登録の申請）

第９条　登録制度に登録をしようとする者（以下、「申請者」という。）は、多面的機能発揮活動サポート専門家登録書（様式第１号）をＪＦ全漁連会長及び全内漁連会長に提出しなければならない。

２　申請者のうち、平成 25 年度～平成 27 年度 水産多面的機能発揮活動サポート推進事業または平成 28 年度 水産多面的機能発揮対策支援委託事業においてサポート専門家登録を行った専門家は、「様式第３号 技術サポート専門家登録更新申請書」及び「様式第４号 運営サポート専門家登録更新申請書」の提出に替えることができる。

３　登録済みのサポート専門家等による推薦を得た場合には、指定した期間に関わらず申請できるものとする。

（登録の承認）

第 10 条　多面的機能発揮活動サポート専門家の登録は、ＪＦ全漁連及び全内漁連において実施し、次に掲げる事項について検討、審査する。なお、登録にあたり、必要に応じて水

図 2-2-1(2)　サポート専門家登録実施規定(2)

産庁または有識者等の助言を求めることとする。

（1） 申請書の人材情報の登録に関すること。

（2） 登録された人材情報（以下、「登録情報」という。）の登録の取消し及び登録情報の抹消に関すること。

2 平成 25 年度～平成 27 年度及び平成 28 年度に多面的機能発揮活動サポート専門家の登録申請を行った者については、前項の規定によらず、登録することができるものとする。

（登録及び通知、登録証の発行）

第 11 条 ＪＦ全漁連会長及び全内漁連会長は、人材情報を登録すべきと認められた者について、速やかに登録申請書に基づき人材情報を登録するとともに、申請者に人材情報を登録した旨を「様式第１号の２ 技術サポート専門家登録決定通知書」及び「様式第１号の３ 運営サポート専門家登録決定通知書」により通知する。

2 ＪＦ全漁連会長及び全内漁連会長は、前項の規定による登録を受けた者（以下「登録者」という。）について、サポート専門家登録証を発行する。

3 ＪＦ全漁連会長及び全内漁連会長は、第 10 条第１項の規定において人材情報を登録すべきでない旨の決定を受けた者について、非登録通知書（様式第１号の４）により、その理由を付して申請者に通知する。

（登録内容の変更）

第 12 条 登録者は、登録内容に変更が生じた場合は、すみやかにＪＦ全漁連会長及び全内漁連会長に登録情報変更申請書（以下、「変更申請書」という。）（様式第２号）により登録情報の変更を申請しなければならない。

（登録者の活用）

第 13 条 ＪＦ全漁連及び全内漁連は、各活動組織の求めに応じ、地域特性や活動組織の要望を勘案した上で適切な人材を紹介し、登録者の活用に努めなければならない。

（登録の期間）

第 14 条 登録者の登録の期間は、第 11 条第１項の規定により登録をした日から平成 30 年 3 月 23 日までとする。

（登録の更新）

第 15 条 前条の規定による登録者の登録の期間の満了時には、希望等に応じて登録の更新を行うことができる。

（登録の取り消し）

第 16 条 ＪＦ全漁連会長及び全内漁連会長は、登録制度の適正な運営に支障を来たすと認められる場合、あるいは、登録者が第８条の規定による専門家の責務に反する行為等が認められる場合には、登録を取り消すことができる。

図 2-2-1(3) サポート専門家登録実施規定(3)

2　ＪＦ全漁連会長及び全内漁連会長は、前項の規定により登録を取り消したときは、取消しを受けた者に対し、登録抹消通知書（様式第５号）により、その理由を付して通知しなければならない。

3　取消しを受けた者は、すみやかに専門家登録証をＪＦ全漁連会長もしくは全内漁連会長に返却しなければならない。

（個人情報の保護）

第 17 条　本規定の実施主体であるＪＦ全漁連及び全内漁連は、個人情報の保護に関する法律に基づき、第９条に掲げる登録の申請によって得られた個人情報を、本規定が定める目的の範囲内で適切に管理、使用し、その他の目的で使用してはならない。

（庶務）

第 18 条　登録制度の庶務は、ＪＦ全漁連及び全内漁連において処理する。

（その他）

第 19 条　この規程に定めるもののほか必要な事項は、ＪＦ全漁連会長及び全内漁連会長が別に定める。

附則

1　この規程は、平成 29 年 4 月 7 日から施行する。

図 2-2-1(4)　サポート専門家登録実施規定(4)

表 2-2-3(1)　平成 29 年度登録専門家(1)

ＩＤ	氏　　名	現住所（都道府県）	勤務先名称	技術ｻﾎﾟｰﾄ	運営ｻﾎﾟｰﾄ	専門分野						
						藻場	干潟浅場	サンゴ礁	ヨシ帯	河川湖沼	清掃活動	教育学習
1	藤田　孝康	神奈川県	日本ミクニヤ(株)	●		○	○					
2	岩瀬　文人	高知県	高知生物多様性ネットワーク	●		○		○				○
3	石田　和敬	福岡県	国際航業株式会社	●		○	○	○				
4	天倉　辰巳	岡山県	日生町漁業協同組合	●	●	○						
5	渡辺　耕平	宮崎県	西日本オーシャンリサーチ	●		○		○				
6	野田　三千代	静岡県	海藻おしば協会	●		○						○
7	田中　賢治	島根県	国土防災技術(株)	●		○						
8	岡地　賢	神奈川県	(有)コーラルクエスト	●				○				
9	太田　雅隆	千葉県	(公財)海洋生物環境研究所	●	●	○	○					
10	木村　尚	神奈川県	NPO法人海辺つくり研究会	●		○	○					○
11	藤原　秀一	沖縄県	いであ(株)沖縄支社	●				○				
12	工藤　孝浩	神奈川県	神奈川県水産技術センター	●		○	○					
13	西田　一豊	兵庫県	西田経営労務事務所		●							
14	大浦　佳代	東京都	海と漁の体験研究所	●	●							○
15	石川　竜子	東京都	海洋プランニング(株)	●		○						
16	椎名　弘	千葉県	海洋プランニング(株)	●		○						
17	宮川　椋	北海道	(公社)北海道栽培漁業振興公社	●		○	○					
18	反田　實	兵庫県	兵庫県農林水産技術センター水産技術センター	●		○	○					
19	伊藤　陽	福岡県	(株)三洋コンサルタント	●		○	○					
20	小島　昭	群馬県	NPO法人小島昭研究所	●		○	○			○		
21	木村　秀二	埼玉県	(株)漁協経営センター		●							
22	柿野　純	千葉県	(株)東京久栄	●			○					
23	斉藤　政幸	埼玉県	(株)東京久栄	●			○					
24	田中　和弘	東京都	(株)水産環境	●	●	○	○			○		
25	野口　亮祐	神奈川県	(株)水土舎	●	●							○
26	中野　義勝	沖縄県	国立大学法人琉球大学熱帯生物研究センター瀬底研究施設	●				○				
27	安藤　亘	埼玉県	(一社)水産土木建設技術センター	●	●	○		○				○
28	岡村　俊邦	北海道	北海道科学大学空間創造学部都市環境学科	●						○		
29	福島　陽子	静岡県	静岡県立焼津水産高等学校	●		○						○
30	吉田　司	兵庫県	(株)シャト一海洋調査	●	●	○	○					

表 2-2-3(2)　平成 29 年度登録専門家(2)

ＩＤ	氏　　名	現住所（都道府県）	勤務先名称	技術ｻﾎﾟｰﾄ	運営ｻﾎﾟｰﾄ	専門分野						
						藻場	干潟浅場	サンゴ礁	ヨシ帯	河川湖沼	清掃活動	教育学習
31	中村　憲司	兵庫県	(株)シャトー海洋調査	●	●	○	○					
32	中野　輝昭	高知県		●		○						
33	秋本　泰	千葉県	(財)海洋生物環境研究所	●		○	○	○				
34	永田　昭廣	兵庫県	滄海生物環境サポート	●		○	○	○				
35	鈴木　信也	神奈川県	(株)日本海洋生物研究所	●			○					
36	中嶋　泰	東京都	オフィスMOBA	●	●	○						
37	細木　光夫	高知県	(有)エコシステム	●		○	○			○		
38	大塚　英治	北海道	(株)沿海調査エンジニアリング	●	●	○						○
39	益原　寛文	福岡県	益原技術士事務所	●	●	○	○	○				
40	川畑　友和	鹿児島県	山川地区藻場保全会	●		○						○
41	吉田　稔	沖縄県	(有)海游	●		○	○	○				
42	南里　海児	福岡県	(株)ベントス	●	●	○	○					
43	長田　智文	沖縄県	一般財団法人　沖縄県環境科学センター	●		○	○	○				○
44	片山　敬一	岡山県	海洋建設(株)	●		○	○					
45	片山　貴之	岡山県	海洋建設(株)	●	●	○	○			○		
46	青山　智	岡山県	海洋建設(株)	●		○	○					
47	穴口　裕司	岡山県	海洋建設(株)	●		○	○					
48	多田　和夫	千葉県	元千葉県漁業協同組合連合会		●							
49	鈴木　龍児	福岡県	環境テクノス(株)	●		○	○			○		
50	伊藤　栄明	宮城県	松島湾アマモ再生会議	●		○						
51	鹿熊　信一郎	沖縄県	沖縄県海洋深層水研究所	●				○				
52	三冨　龍一	神奈川県		●		○	○					○
53	桑原　久実	千葉県	国立研究開発法人　水産研究・教育機構　水産工学研究所	●		○	○					
54	芳我　幸雄	埼玉県		●	●	○	○			○		
55	酒井　章	山口県		●	●	○						○
56	藤田　大介	神奈川県	東京海洋大学 海洋科学部　准教授	●		○						
57	村上　俊哉	北海道	(株)エコニクス	●	●	○						
58	吉永　聡	広島県	(株)水土舎	●	●	○	○			○		○
59	田所　悟	神奈川県	(有)自然環境調査	●		○	○	○				
60	佐藤　智則	新潟県	新潟県水産海洋研究所	●		○						

表 2-2-3(2)　平成 29 年度登録専門家(3)

ＩＤ	氏　　名	現住所（都道府県）	勤務先名称	技術ｻﾎﾟｰﾄ	運営ｻﾎﾟｰﾄ	専門分野						
						藻場	干潟浅場	サンゴ礁	ヨシ帯	河川湖沼	清掃活動	教育学習
61	樋田　陽治	山形県	元　山形県内水面漁業協同組合連合会	●						○		
62	高橋　清孝	宮城県	(一社)漁業情報サービスセンター東北出張所	●						○		
63	浅枝　隆	埼玉県	埼玉大学大学院理工学研究科	●						○		○
64	吉沢　和具	群馬県	群馬県水産試験場	●								
65	林　紀男	千葉県	千葉県立中央博物館	●						○		
66	柵瀬　信夫	神奈川県	鹿島建設(株)	●		○	○	○		○		○
67	桐生　透	長野県	元山梨県水産技術センター	●						○		
68	藤岡　康弘	滋賀県	滋賀県水産試験場	●						○		
69	崎長　威志	広島県	広島県内水面漁業協同組合連合会	●						○		
70	稲田　善和	福岡県	九州・水生生物研究所	●						○		

(2) サポート専門家の派遣

前年度（29 年度）の自己評価結果を整理し、総合評価点が２点未満の活動組織を抽出した。その上で、地域の特性を理解している専門家を選出して現地に派遣、指導した。表 2-3-4 に自己評価点をもとに指導した活動組織と担当専門家を示した。

表 2-2-4　平成 29 年度サポート実績（自己評価をもとに指導した活動組織）

No.	訪問先（都道府県）	訪問先（活動組織名）	専門家氏名	訪問月日	種別	内容	形式
1	岩手県	豊沢川の環境を守る会	樋田陽治	2/7	技術	内水面	個別指導
2	茨城県	久慈川多面的機能活動組織	吉澤和具	11/28	技術	内水面	個別指導
3		利根川しじみ多面的機能活動組織		11/29	技術	内水面	個別指導
4		利根川うなぎ多面的機能活動組織		11/29	技術	内水面	個別指導
5		久慈浜・水木多面的機能活動組織	太田雅隆	1/24	技術	藻場	個別指導
6	長野県	千曲川の自然を守る会活動組織	桐生透	6/30	技術	内水面	個別指導
7	福井県	魚達の住みよい川・湖づくりの会	桐生透	11/24	技術	内水面	個別指導
8	愛知県	寒狭川下流域環境を守る会	桐生透	12/4	技術	内水面	個別指導
9		寒狭清流愛護会		12/4	技術	内水面	個別指導
10	三重県	名張川環境保全会	吉澤和具	6/20	技術	内水面	個別指導
11	京都府	由良川活動組織	稲田善和	11/15	技術	内水面	個別指導
12		上林川天然遡鮎を育てる会		11/5	技術	内水面	個別指導
13	鳥取県	浦富地区海の環境保全活動組織	益原寛文	2/20	技術	藻場	個別指導
14		酒津地区海の環境保全活動組織		2/20	技術	藻場	個別指導
15	島根県	宍道湖流域保全協議会	崎長威志	11/14	技術	内水面	個別指導
16	愛媛県	中山川流域環境保全活動組織	崎長威志	11/22	技術	内水面	個別指導
17	高知県	赤野川河川環境保全活動組織	崎長威志	11/30	技術	内水面	個別指導
18		仁淀川流域の山・川・海の環境保全推進協議会		11/30	技術	内水面	個別指導
19	長崎県	西有家地区環境保全活動組織	益原寛文	2/6	技術	干潟他	個別指導

また、活動組織および地域協議会より派遣の要望があった場合においても、適任の専門家を選出した上で現地に派遣した。近隣の地区でも同じような相談事がある場合には、地域協

議会と調整し、研修会形式にするなど、活動組織を集約して効率化を図った。

要望に応じて指導した活動組織数は延べ 197 組織であり、うち、96 組織に対し、現地を訪問した個別指導を、101 組織（8 会場）に対し研修会形式でサポートを行った。197 組織のうち、180 組織に技術的なサポートを、17 組織に運営面（書類の確認等）のサポートを行った。現地の要望に基づき指導した活動組織と担当専門家を表 2-3-5 に、個別指導の内訳を図 2-2-6 に示した。藻場のモニタリング・保全活動に関する指導が最も多く、次いで内水面のモニタリング・保全活動に関する指導が多かった。

表 2-2-5(1)　平成 29 年度サポート実績（派遣要請に応じて実施した指導）(1)

No.	訪問先（都道府県）	訪問先（活動組織名）	専門家氏名	訪問月日	種別	内容	形式
1	北海道	美国・美しい海づくり協議会	JF全漁連	11/16	技術	全般	研修会
2		小樽海っ子倶楽部					
3		余市町沿岸漁場再生活動組織					
4		美国・美しい海づくり協議会					
5		余別・海HUGくみたい					
6		神恵内の海を守る会					
7		神恵内の海を守る会（神恵内支部）					
8		神恵内の海を守る会（赤石支部）					
9		神恵内の海を守る会（珊内支部）					
10		寿都の海を豊かにする会　寿都支部					
11		寿都の海を豊かにする会　歌棄支部					
12		寿都の海を豊かにする会　磯谷支部					
13		余市郡中央地区水域監視活動組織					
14		神恵内村水域監視活動組織					
15		泊村水域監視活動組織					
16		岩内地区水域監視活動組織					
17		寿都地区水域監視活動グループ					
18		島牧漁協本所水域監視活動組織					
19		島牧漁協元町支所水域監視活動組織					
20		余市郡東部地区水域監視活動組織					
21		余市郡西部地区水域監視活動組織					
22		余市町沿岸訓練実施隊					
23		北海道水産多面的機能発揮対策協議会	JF全漁連	3/13	技術	全般	研修会
24	青森県	新深浦町漁協地域多面的機能発揮活動組織	JF全漁連	6/5	技術	全般	研修会
25		中泊町沿岸訓練実施隊					
26		蟹田平舘地区海岸環境美化活動組織					
27		平内町地域協議会					
28		大畑町地域協議会					
29		むつ市藻場づくり応援協議体					
30		佐井村漁協保全活動の会					
31		大間地区藻場保全の会					
32		奥戸地区藻場保全の会					
33		易国間地区藻場保全活動の会					
34		下風呂地区藻場保全活動の会					
35		蛇浦地区藻場保全活動の会					
36		尻屋地区藻場保全活動の会					
37		小川原湖地区漁場保全の会					
38		今別町地域協議会					
39		三沢地区漁場保全の会					
40		小川原湖地区漁場保全の会	藤田孝康	5/26	技術	干潟	個別指導
41				10/12	技術	干潟	個別指導
42	秋田県	小猿部川の伝統漁法を守る会	樋田陽治・吉澤和具	10/26	技術	内水面	個別指導
43	山形県	遊佐町海づくりの会	藤田孝康	12/8	技術	干潟	個別指導
44	千葉県	船橋市漁協活動グループ	柿野純・桑原久実	5/19	技術	干潟	個別指導
45			大浦佳代	6/20	技術	教育・学習	個別指導

表 2-2-5(2)　平成 29 年度サポート実績（派遣要請に応じて実施した指導）(2)

No.	訪問先（都道府県）	訪問先（活動組織名）	専門家氏名	訪問月日	種別	内容	形式
46	神奈川県	江ノ島フィッシャーマンズ・プロジェクト	田中和弘・中嶋泰	5/13	技術	藻場	個別指導
47				9/23	技術	藻場	個別指導
48				11/18	技術	藻場	個別指導
49				12/2	技術	藻場	個別指導
50				12/9	技術	藻場	個別指導
51				2/10	技術	藻場	個別指導
52				2/18	技術	藻場	個別指導
53			大浦佳代	6/26	技術	教育・学習	個別指導
54	富山県	滑川高校海洋科海洋クラブ	藤田大介	10/25	技術	藻場	個別指導
55		射水市豊かな海を愛する会	野田三千代	11/17	技術	藻場	個別指導
56	石川県	輪島の里海を守る会	石川竜子・椎名弘	6/6	技術	藻場	個別指導
57				10/20	技術	藻場	個別指導
58	福井県	海のゆりかごを育む会	片山貴之	6/19	技術	藻場	個別指導
59			大浦佳代	8/24	技術	教育・学習	個別指導
60		安島マリンプロジェクト	JF全漁連	7/11	技術	全般	研修会
61		崎生態系保全活動グループ					
62		梶生態系保全活動グループ					
63		米ヶ脇里海を守る会					
64		浜地里海を育てる会					
65		勝山九頭竜川環境ネットワーク					
66		日野川環境整備協議会					
67		敦賀河川を守る会					
68		魚たちの住みよい川・湖づくりの会					
69		小浜市海のゆりかごを育む会					
70		南川ラインレスキュー隊					
71		安島マリンプロジェクト	JF全漁連	2/27	運営	その他	個別指導
72		崎生態系保全活動グループ					
73		梶生態系保全活動グループ					
74		米ヶ脇里海を守る会					
75		浜地里海を育てる会					
76		勝山九頭竜川環境ネットワーク					
77		日野川環境整備協議会	JF全漁連	2/28			
78		敦賀河川を守る会					
79		魚たちの住みよい川・湖づくりの会					
80		小浜市海のゆりかごを育む会					
81		南川ラインレスキュー隊					
82	三重県	赤須賀漁協青壮年部研究会	野口亮祐	7/10	技術	干潟	個別指導
83		赤須賀漁協青壮年部研究会	JF全漁連	8/22	技術	全般	研修会
84		マリン塾かわげ					
85		櫛田川第一漁業協同組合活動組織					
86		伊勢干潟保全会					
87		村松浅場保全会					
88		菅島地区藻場保全活動組織					
89		答志支所青壮年部					
90		津村地区藻場保全活動組織					
91		船越漁業活性化協議会					
92		宿浦藻場協議会					
93		相賀浦漁場環境保全活動組織					
94		大内山川の声					
95	和歌山県	和歌浦活性化活動組織	JF全漁連	12/13	運営	運営	個別指導
96	兵庫県	五色地区豊かな海づくり活動組織	西田一豊	4/24	運営	干潟	個別指導
97	鳥取県	淀江地区藻場保全活動組織	酒井　章	6/21	技術	藻場	個別指導
98				10/19	技術	藻場	個別指導
99	島根県	大田地区海域保全協議会	南里海児	6/27	技術	藻場	個別指導
100		益田川と海をつなぐ自然環境保全活動組織	大浦佳代	7/19	技術	教育・学習	個別指導
101	広島県	前潟干潟研究会	吉田司	5/26	技術	干潟	個別指導
102		太田川しじみを守る会	崎長威志	6/13	技術	内水面	個別指導
103		江の川かっぱ道場	崎長威志	7/25	技術	内水面	個別指導
104		東広島市農水産課	柿野純	10/27	技術	干潟	個別指導
105	徳島県	牟岐の藻場を守る会	中嶋泰	8/22	技術	藻場	個別指導
106				10/14	技術	藻場	個別指導

表 2-2-5(3)　平成 29 年度サポート実績（派遣要請に応じて実施した指導）(3)

No.	訪問先（都道府県）	訪問先（活動組織名）	専門家氏名	訪問月日	種別	内容	形式
107	福岡県	糸島磯根漁場保全協議会	南里海児	4/13	技術	藻場	個別指導
108		博多湾環境保全伊崎作業部会		4/28	技術	干潟	個別指導
109		能古アサリ保全協議会		5/1	技術	干潟	個別指導
110	福岡県	脇田藻場保全部会	南里海児	5/16	技術	藻場	個別指導
111		脇の浦磯資源保全部会					
112		藍島藻場保全部会		6/14	技術	藻場	個別指導
113		馬島活動組織					
114		唐泊海士組		6/22	技術	藻場	個別指導
115		柏原地区保全活動組織		7/4	技術	藻場	個別指導
116	長崎県	鰐浦地区藻場保全組織	中嶋泰・渡辺耕平	5/16	技術	藻場	個別指導
117		豊地区藻場保全組織	中嶋泰・渡辺耕平	5/17	技術	藻場	個別指導
118		塩浜地区藻場保全組織	中嶋泰・渡辺耕平	5/19	技術	藻場	個別指導
119		有家の浜を守る会	野田三千代	5/26	技術	藻場	個別指導
120		瀬川地区海渚を再生する会	中嶋泰・渡辺耕平	5/28	技術	藻場	個別指導
121				10/29	技術	藻場	個別指導
122		大瀬戸地区藻場育成会	中嶋泰・渡辺耕平	5/29	技術	藻場	個別指導
123				10/31	技術	藻場	個別指導
124		三重地区活動組織	穴口裕司	5/26	技術	藻場	個別指導
125		深堀地区活動組織	中嶋泰・渡辺耕平	5/18	技術	藻場	個別指導
126				5/30	技術	藻場	個別指導
127				9/9	技術	藻場	個別指導
128		西彼南部地区活動組織	中嶋泰・渡辺耕平	5/26	技術	藻場	個別指導
129		福田地区活動組織	中嶋泰・渡辺耕平	5/27	技術	藻場	個別指導
130				9/11	技術	藻場	個別指導
131		針尾藻場造成協議会	南里海児	7/5	技術	藻場	個別指導
132		佐世保市浅子地区活動組織	南里海児	7/6	技術	藻場	個別指導
133		北九十九島地域活動組織	南里海児・大浦佳代	7/25	技術	全般	研修会
134		佐世保市浅子地区活動組織	JF全漁連				
135		針尾藻場造成協議会					
136		舘浦藻場再生協議会					
137		志々伎地区磯焼け対策活動組織					
138		九十九島漁協田平地区根付部会					
139		「鷹島地区」藻場の保全活動組織					
140		「福島地区」藻場の保全活動組織					
141		「新星鹿地区」藻場の保全活動組織					
142		「松浦地区」干潟の保全活動組織					
143		大村市新城活動組織					
144		大村市松原活動組織					
145		佐須奈地区藻場保全組織	中嶋泰・渡辺耕平	8/29	技術	藻場	個別指導
146		泉地区水域保全組織	桑原久実・中島泰	8/30	技術	全般	研修会
147		鴨居瀬地区藻場保全組織	渡辺耕平・大浦佳代				
148		河内地区水域保全組織					
149		須佐地区藻場保全組織					
150		佐須奈地区藻場保全組織					
151		塩浜地区藻場保全組織					
152		網島地区藻場保全組織					
153		豊地区藻場保全組織					
154		内院地区藻場保全組織					
155		水崎地区藻場保全組織					
156		鰐浦地区藻場保全組織					
157		橘湾地区活動組織	中嶋泰・渡辺耕平	9/10	技術	藻場	個別指導
158		北九十九島地域活動組織	南里海児	10/7	技術	藻場	個別指導
159		浅海地区水域保全組織	JF全漁連	10/26	運営	水域監視	個別指導
160		豊玉東地区水域保全組織					
161		佐須奈地区藻場保全組織		10/27	運営	水域監視	個別指導
162		鹿見地区水域保全組織					
163		内院地区藻場保全組織	穴口裕司	1/18	技術	藻場	個別指導
164		橘湾東部活動組織	中嶋泰	1/18	技術	藻場	個別指導
165		崎山地区活動組織	中嶋泰・渡辺耕平	2/16	技術	藻場	個別指導

表 2-2-5(4)　平成 29 年度サポート実績（派遣要請に応じて実施した指導）(4)

No.	訪問先（都道府県）	訪問先（活動組織名）	専門家氏名	サポート月日	サポート種別	サポート内容	形式
166	大分県	名護屋地区藻場保全活動組織	中嶋泰・渡辺耕平	6/24	技術	藻場	個別指導
167				9/27	技術	藻場	個別指導
168			大浦佳代	7/13	技術	教育・学習	個別指導
169	熊本県	荒尾干潟保全会	桑原久実	9/12	技術	干潟	研修会
170		長洲・牛水地域干潟保全会					
171		岱明漁場保全活動組織					
172		滑石漁場保全活動組織					
173		大浜機能発揮グループ					
174		河内干潟保全活動組織					
175		横島資源回復グループ					
176		松尾干潟保全活動組織					
177		畠口干潟環境保全活動組織					
178		川口二枚貝保全活動組織					
179		住吉漁場活動組織					
180		鏡町アサリ活動組織					
181		熊本県釣り団体協議会	藤田大介	9/13	技術	藻場	
182		魚貫地区振興会					
183		軍浦水産振興会					
184		天草漁協牛深青壮年部					
185	鹿児島県	日置市多面的環境保全協議会	川畑友和	4/20	技術	藻場	個別指導
186		あいら藻場・干潟再生協議会	渡辺耕平	4/24	技術	藻場	個別指導
187		山川地区藻場保全会	酒井章	5/10	技術	藻場	個別指導
188			工藤孝浩・酒井章	3/3	技術	藻場	個別指導
189		網掛川干潟再生の会	柿野純・吉田司	6/26	技術	干潟	個別指導
190		万之瀬川振興会	稲田　善和	8/1	技術	内水面	個別指導
191				9/4	技術	内水面	個別指導
192				10/12	技術	内水面	個別指導
193				11/4	技術	内水面	個別指導
194		高尾野川をきれいにする会	吉永　聡	9/9	技術	内水面	個別指導
195				3/3	技術	内水面	個別指導
196	沖縄県	伊江島海の会	永田昭廣・石田和敬	7/19	技術	サンゴ礁	個別指導
197				1/26	技術	サンゴ礁	個別指導

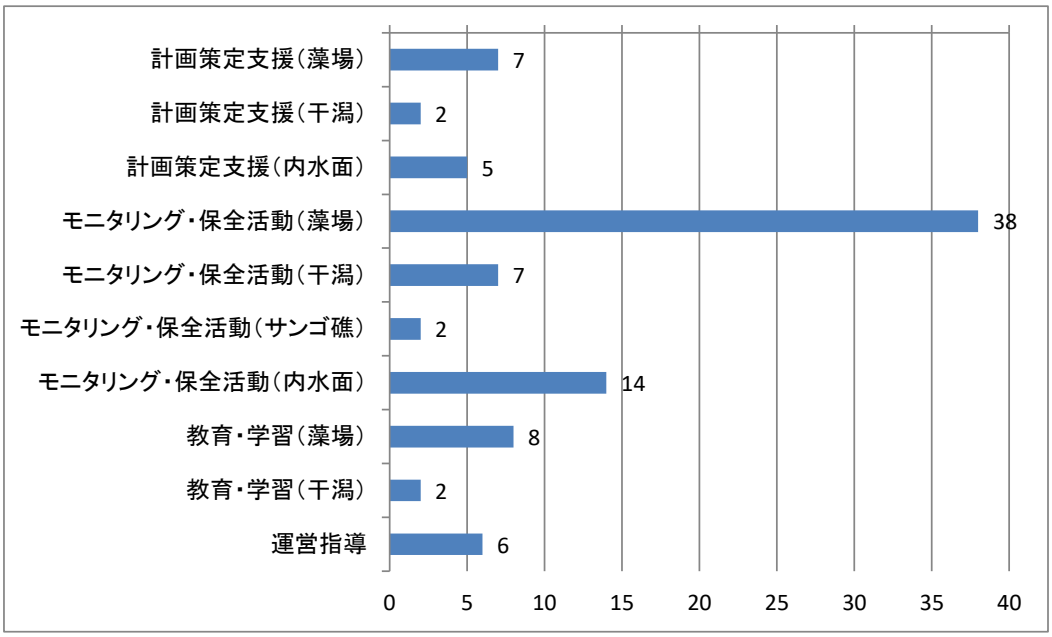


図 2-2-2 個別指導の内訳

上記指導の他、現在、当事業の活動内容にはないものの、活動組織からの要望が多い二枚貝類の種苗生産技術と各活動組織が対応に苦慮している植食性魚類の捕獲方法についての情報収集を行った。情報収集を行った機関と調査担当専門家を表 2-2-5 に示した。

表 2-2-6　平成 29 年度サポート実績(技術の情報収集を行った活動組織)

No.	都道府県	訪問先(ヒアリング先)	専門家氏名	ﾋｱﾘﾝｸﾞ月日	ヒアリング内容	形式
1	広島県	瀬戸内海区水研	吉永聡	6/27	アサリの種苗生産	情報収集
2	千葉県	木更津漁協	柿野純	7/7	アサリの種苗生産	情報収集
3	静岡県	静岡県水産試験場浜名湖分場	柿野純	9/8	アサリの種苗生産	情報取集
4	和歌山県	和歌山県和歌山東漁協	中嶋泰	11/28	ブダイの漁獲方法	情報取集

各サポート専門家は、指導実施後に所定の様式による報告書を作成し、海面の活動組織については JF 全漁連に、内水面の活動組織については全内漁連にそれぞれ提出した。サポート専門家による報告書は資料編 6 に収録した。

(3) 指導内容の整理と参考資料の作成

サポート専門家が提出した報告書を整理し、他の活動組織が参考となると考えられる事項を表 2-2-7 に Q&A として整理した。

表 2-2-7　サポート Q&A

	質疑	応答
①藻場の保全		
1	成熟したカジメの見つけ方がわからない。	①アラメとカジメの見分け方 形態としてアラメの茎は二股になり、カジメの茎は二股にならないことや、江ノ島地先では水深5m 付近まではアラメが、5m から10m 付近までにカジメが優占する等の傾向がある。 ②カジメ成熟個体の特徴 子嚢斑をもつ成熟個体は1 歳の小型藻体には少なく、茎が太く、長い2 歳以上の大型藻体に多い。
2	カジメ石は海底のどのような場所に設置するのか。	設置するカジメ石の大きさに近い大礫が残っているところで、石が波浪等で転倒しないような礫間や礫と砂地の境界等の安定する場所。岩陰等は光が遮られるため避ける。
3	一部箇所で母藻設置の成果が現れていない要因は？	波当たりがきつい場所は、母藻がなくなったことにより種の供給が行えていない可能性がある。ムラサキウニの分布も見られるため、食害の可能性もある。

4	波当たりが強い場所での対策は？	母藻は岩陰になる場所など、波の影響を直接受けにくい場所に設置し、若干なりとも成果が現れている箇所から分布の拡大を目指す。
5	南方系のアントクメが増えている。問題はないか。	海水温の上昇が懸念されている現在、高温耐性のある南方系の海藻を積極的に移植することも考えられる。アントクメは１年生であるが、ウニの身入り向上に役立つ。アントクメのタネ播きは難しいと言われているが、付着器からもタネ（遊走子）をだすので、残った付着器を集めて、スポアバッグ法を試してはどうか。
6	移植したツルアラメ母藻の生残が思ったほど良くないが、どのような対策があるか？	天然のツルアラメは、波の荒い岩の上では単体ではなく、複数個体の仮根ががっちり絡み合った状態で固着してい る。移植の際、絡み合った仮根をわざわざ1 個体にほぐしているが、これをほぐさず、仮根の面積が多いまま縛り付けたほうが、根移りの可能性が大きいのではないか。
7	ワカメのメカブは残した方が良いか？	ワカメのメカブは枯死・流出するまで、タネ（遊走子）を放出し続けるので、漁獲時にメカブを残すことが望ましい。
8	ヒジキを増やすにはどうしたら良いか?	ヒジキは漁期が終わってからタネ（卵）を出す。口開け時に一部残せば、資源を保護することになる。
9	ワカメのメカブ（母藻）を投入する時に、フロートを使って浮かした方が良いか	ワカメやカジメ等の母藻を設置する場合、海底より高いところに浮かした方が、タネ（遊走子）が広く拡散するといわれている。福田地区の場合、汀線付近の浅いところで行うので、水深が浅く、流動が良いので、ブイで高くする必要はない。
10	出羽島のテングサ場が衰退している。回復に施肥は有効か？	出羽島のテングサ場は開放海岸にあり、仮に施肥を行っても直ちに拡散して、効果的な濃度が維持されにくいので、費用対効果面から現実的な対策ではないと思われる。 テングサ漁の漁業者によると、昔は30cm以上の長いテングサが大量に獲れていた。近頃は、夏から秋にかけて先端 部が白化し、短くなるとのことであった。このことから、夏季の高水温に生理的に耐えられなくなって、テングサの先端部が枯死・消失する現象が、近年、繰り返されている可能性が考えられる。テングサ場の衰退が高水

		温によるものか否か、検証が必要である。
11	県の指導によりアラメの種付け（プレートの移設）を行っているが、波浪の影響が大きいためかうまくいってない。	活動組織対応者によれば、当地区でアラメが自生していた記憶が無いとのこと。確認を要するが、その場合はモク類や養殖技術のあるワカメ等による藻場作りも検討していく必要がある。また、プレートの投入数量も十数枚と少ないので、効果的、効率的な活動となっているのかどうか再検討が必要である。
12	小型藻場ブロックではクロメが生長することが確認できているが、周囲にどう広げていくかが課題となっている。	保護枠内で手で動かせるサイズの石にクロメを着生させ、それを移設する方法がある。今回は水深の異なる2箇所に1m 角の保護ネットを設置し、その中央に母藻（種糸）、周りに浜辺で採集した石を設置する。
13	種苗の設置の仕方を改めて教えて欲しい。	クロメの種糸は納入時の小型の藻体の状態で設置しても食害などの影響を受けやすいため、ある程度生長させてから（藻長10 ㎝程度）設置する必要がある。また、納入時のままの状態で生長させてから設置しようとすると、種糸から株が外れたり、傷んだりして効率が悪い。そのため、納入後は早期に何らかの基質に巻き付けることが必要であり、その状態で生長させ、基質ごと設置することで効果が出やすい。 また、採苗用ブロックなどを、良い藻場の中に設置しておくことで、ブロックに海藻のタネを自然に着生させることができる。このようなブロックを回収し、移設することで、比較的容易に種苗の設置ができる。
14	藻場の被度の観察方法が判らない。	被度とは海藻などが海底面を占める割合（%）のことである。景観被度の５区分に分けた被度であり、それらの被度の合計は必ず100%となる。５区分とは、ワカメやホンダワラ類（モク類）などの「大型海藻」、テングサ類やウミウチワなどの「小型海藻」、岩面を覆うピンク色の「無節サンゴモ類」、イワガキ類や二枚貝のヒバリガイモドキなどの「付着動物」、および、砂地や何も付着していない岩肌（裸面）などの「その他」である。このうち藻場の景観をつくる大型海藻と小型海藻を直立海藻と呼び、それらの被度の合計を「藻場の被度」とする。
15	アマモの分布状況を把握するためのモニタリング方法を教えて欲しい。	アマモ群落の縁辺を観察者（スキューバ潜水）が泳ぎ、それを追いかけてもう一人が防水仕様のＧＰＳを用いて、水面を移動しながら位置を記録する方法がある。
16	当組織ではアマモを生やすた	活動組織のモニタリング方法が素潜りによる調査のた

	めに着生マットを設置しているが、成果の出し方が分からない。	め、詳細な調査よりも写真撮影、被度の測定などを行うとよい。
17	濁った海域でアマモを繁茂させるために貝殻を利用した取り組み事例を教えてほしい。	岡山県で行われた貝殻敷設技術の手法や効果、敷設の進め方などを紹介した。
18	藻場の保全において、某団体からの照会により堆肥ブロック（１個１万円）を投入する予定だが問題ないか。	現状の計画では、栄養塩の供給及び母藻の設置が含まれていないので、協議会へ届出をし、計画を変更する必要がある。堆肥ブロックの投入については、メーカーが云う製品の効果を鵜呑みにせず、まずは試験的に投入して効果を判断してほしい。
19	夏季の高水温による影響が大きいと考えているが、対策はあるか？	水深や流れ、場所により海水温は異なるため、条件の異なる複数の場所で取り組み、結果の良いところから藻場の回復を目指す。
20	ウニはどのくらい捕獲すれば、磯焼けが解消するか？	海域によって、ウニ類の量と回復力で異なるので、はっきりとしたことは言えない。海藻の維持のためにはムラサキウニの現存量で100～150g/m2 以下、殻径 50mm の個体では2 個/m2 以下と言われている文献がある。すべてをとる必要はないが、継続的にウニ類をとってほしい。 また、ウニの生殖期を過ぎて、捕獲しても新たな稚ウニが発生するので生殖期前に活動をしてほしい。 また、効果を確認するために今回行った様な、活動前後のウニ類の密度をモニタリングしてほしい。
21	ウニは海底で潰した方がよいか？	駆除したウニを海面上に揚げると、その時点で産業廃棄物（有効利用する場合を除く）となるので、きちんと処理しなければならないので、海底で潰した方が手間がかからない。ウニを潰すと同時に受精が起きるが、そのために翌年、稚ウニが大量発生するというのは誤解である。 ウニを移植する方法もあるが、痩せウニや老齢ウニは餌を与えても身入りは改善されないことが多い。他の海域ではウニ駆除を行う場合、移植は行わずに、対策域内のウニは１つ残らず駆除し、その翌年以降に入ってくるウニの身入りを良くしている。
22	駆除したウニを廃棄しており、利用していない。	他県での除去ウニの利活用方法（堆肥化、ウニ殻・棘アート、イベント販売、蓄養等）を紹介した。
23	ウニ漁業をする人がいるので	身の色が悪く商品価値の低い老齢のウニ（大型のウニ）

	ウニ除去がやりにくい。	から除去をするといった約束事を決め、ウニ漁業者を説得してはどうか。
24	除去ウニをたい肥にする方法は？	「ウニ堆肥ガイドライン（水産庁）」示し、他地域での事例を紹介した。小規模でも生産できるので、市や県の協力の下、まずは試験的に実施するとよい。ただし、生産・販売には関係法令・基準を準拠する必要がある。
25	除去ウニのたい肥化に取り組んでみたいが、実際に取り組んだ方の話や、法規制の実情を知りたい。	ガイドラインや事例報告を見ただけでは、悪臭対策や労力など現場の細かい苦労や、専門的な法律・条令の問題について回答するのは難しい。対応可能な専門家を探し、追って回答したい。
26	除去したイスズミの有効利用法を知りたい	イスズミ、アイゴの加工方法や製品化などの有効利用の方法はほぼ確立されている。しかし、定期的に獲れないので、出荷時のロット数が揃わないことがネックの１つとなっている。
27	最近、ブダイが増加し、クロメやヨレモクモドキを食害している。刺網による駆除を実施しているが、より効率的な駆除方法はないか	改訂磯焼け対策ガイドライン(2015)に、「ブダイの延縄漁法」(99 頁)が紹介されている。和歌山県南部の串本地域では、ブダイを専門的に漁獲する延縄漁が行われている。「ホンダワラ」を餌としているため、植食性魚類のブダイが選択的に漁獲される。そのため、イセエビ等が混獲されないので、刺網漁業と競合しないメリットがある。
28	岩を覆う二枚貝は除去した方が良いか。	岩上のヒバリガイモドキは海藻に直接害を与えることはないが、海藻が着生できるところが少なくなる。除去する場合、除去してその場に放置すると再付着するので、船上に取り上げるか、潰した方が良い。
29	ウニを食べるヒトデやヤドカリは，ウニが増えれば増えるか？	滑川ではヒトデやヤドカリの捕食量は小さく，ウニの減少がこれらの数を決めることはない。
30	モニタリングポイントの設定は、どのようにすればよいか？	モニタリングポイントは、毎回同じ個所にしたほうが良い。
31	モニタリングはいつごろ行うべきか？	現在の大型海藻の種類は、春藻場の主な構成種である。夏過ぎには大型海藻は流出して、疑似磯焼けの海中景観と なるが、小型海藻がどのように推移するのかを秋頃に確認することが必要である。
32	礫場の対策域の目印にロープ	礫場であれば石と石の間にステンレス製チェーンを這わ

	を使用したが，シケで絡まった。対策はあるか？	せる方がよい。
②サンゴ礁の保全		
33	普及啓発時の効果的な方法は？	小学生に作成してもらったサンゴプレートを海底に移殖したり、移植したサンゴがどれくらい大きくなったかを見られるようにするなどの方法はどうか。
③干潟等の保全		
34	大雨などの直後は増殖場のメンテナンスに苦労する。	増殖場が河口に位置していることから大雨などによって流出した砂による増殖場の埋没や洗掘、泥の堆積等の被害はある程度免れないので、泥水の抜け道などを工夫する必要がある。現在の花壇式は竹を1 段にして、河床からの凸部状態を緩和して、ゴミなどが引っかからないような工夫が見られる。
35	増殖場内のハマグリの分布に偏りがみられる。	網袋に収容しているハマグリについては、淡水の影響が強い場所に設置していたため、呼吸し、摂餌する時間が短くなっており、生残率が低下していた。よって、できるだけ海水の影響の強いところに早急に設置し直すことが望ましい。
36	砕石区に放流した稚貝は潜り込むことができるのか。熊本ではナルトビエイやクロダイの食害が多く、潜り込めない場合は食害の影響が大きくなると考えられる。	今後、流れを起こすことのできる水槽を用い、砕石を入れた場合の稚貝の行動を確認する予定。結果が出たらお知らせしたい。
37	モニタリングの方法は、これまでの方法でいいか。	過去のデータと比較するためにも、モニタリング方法はこれまでのやり方で統一する。
④ヨシ帯の保全		
38	シジミの産卵期近くの水温塩分について、河口からの流入状況を把握する必要があると考えているが問題ないか。	再生産するか否かは、６～７月の天候状況による水温塩分に左右されると考えられ、データを蓄積することで、場合によっては稚貝放流を検討することも視野に入れることが必要である。
⑤内水面生態系の保全		
39	効果的な河床耕転の実施方法は？	例えば、アユの漁獲量を増やすための河床耕転と、産卵場造成のための河床耕転は、時期も場所も異なることに留意して欲しい。 アユの漁獲量を増やすのであれば、付着藻類の繁殖量増加促進のため放流前の4，5 月頃に実施する。産卵場造成

		であればアユの産卵期直前の9,10月頃が目安となる。 アユのふ化仔魚は餌が摂れないとふ化後3～4 日間で餓死してしまう（さいのうを吸収してしまう）ので、この間に海に流下させる必要がある。従って産卵場（耕転現場）から河口までの距離が重要となる。 他の魚種で水生昆虫の増加を目指すのであれば、冬場が一番水生昆虫の現存量が多いので、この時期をずらし、秋か春先の河床耕転が効果的と思われる。 雪代が終わる（5 月半ば）とアユ稚魚の放流があり、釣り人等との関係でアユの時期（7～9 月）を外すと、河床耕転の実施時期は限られる。
40	水生昆虫のサイズが非常に小さい個体は、見えづらく、調査者によって結果が異なる恐れがある。分析基準を決めておく方が良いのではないか。	5mm 以上の個体であれば、モニタリングメンバー全員が視認できるので、そのサイズを基準に分析（選別）を行うことにする。
⑥国境・水域の監視		
41	水域監視の方法が判らない。特に水色（海の色観察カード）をどこで決めたら良いか判らない	観察点を数点決めて、毎回、そこで記録する。水色は日陰側でみること。
⑦教育・学習		
42	リピーターもいるので、毎年プログラムを変えている。ネタ切れで大変な面もあり、どうしたらいいのか。	大切なこと、きちんと伝えたいことは、何度同じ話をしてもよい。リピーターの子どもは成長することで前年とは違う学習ができているはず。無理をしてまで毎年違うプログラムを用意する必要はないのでは。
⑧その他		
43	集合写真撮影上の注意点は？	日当を支給される参加者は活動の最初と最後に必ず写っているように注意する。できれば船の登録番号が写るように撮影するのが望ましい。
44	モニタリング地点の目印となっているU字ボルトが見つけにくい。	今回の調査で確認できたU字ボルトには、目立つように白色のPP（ポリプロピレン）製の荷造り紐を結着した。

2-3. 水産多面的機能発揮対策事業の情報提供・共有

(1) 模範、参考となる活動組織（優良事例）の抽出と報告会の開催

① 優良事例の紹介

本調査を効率的且つ効果的に実施するにあたって、表2-3-1に示す優良組織を選定し、聞き取り調査等によって技術面・運営面における内容や特徴を把握し、必要に応じて捕捉調査等のサポートをし、他の活動組織の模範・参考となる資料を作成した。

表 2-3-1　模範、参考となる活動組織一覧

No.	活動組織名	活動項目	地区	主な活動内容
1	湾中地区干潟保全協議会	干潟	根室市 （北海道）	アサリ資源の回復を目指して客土や耕うん、食害生物の駆除に取り組んでいる。
2	火散布沼干潟を保全する会	干潟	浜中町 （北海道）	二枚貝資源の減耗に関する問題点をモニタリング等で明確化し、その解決に向けた取組みで資源の回復に成功している。
3	余別・海 HUG くみたい	藻場	積丹町 （北海道）	自然林の再生とウニ除去を行い、藻場の回復を目指している。
4	かすみがうら市地区 環境・生態系保全活動組織	ヨシ帯	かすみがうら市 （茨城県）	定期的なヨシの管理とヨシ帯分布調査や魚類相調査を行っている。
5	城ケ島藻場保全活動組織	藻場	三浦市 （神奈川県）	アイゴの除去に取り組むとともに、大学と連携して商品開発に取り組んでいる。
6	富山市水辺をきれいにする会	内水面	富山市 （富山県）	学生や児童等の教育一貫で簡易魚道設置やサクラマスふ化体験などによる生態系保全学習会を行っている。
7	榛南磯焼け対策活動協議会	藻場	榛原郡 （静岡県）	藻食性魚類の除去や母藻の設置などにより、藻場が回復している。
8	幡豆地区干潟・藻場を保全する会	藻場 干潟	西尾市 （愛知県）	2つの漁協がうまく連携を取ってアマモ場と干潟の環境改善に取り組んでいる。
9	京の川の恵みを活かす会	内水面	京都市 （京都府）	魚が利用しやすい魚道作りを通じて河川環境の改善に取り組んでいる。
10	益田川と海をつなぐ 自然環境保全活動組織	干潟 ヨシ帯 内水面	益田市 （島根県）	益田川の環境改善とチョウセンハマグリの資源安定化に取り組んでいる。
11	広島県東部アサリ協議会	干潟	尾道市 （広島県）	網袋や被覆網を活用して、アサリ資源の保護に取り組んでいる。
12	前潟干潟研究会	干潟	廿日市 （広島県）	アサリ資源の回復に取り組んでおり、「大野方式」という効果的な稚貝確保法を考案した。
13	愛南さんごを守る協議会	サンゴ礁	愛南町 （愛媛県）	一般ダイバーと協力してサンゴ礁のモニタリングとオニヒトデ除去に取り組んでいる。
14	愛南地区沿岸海難（津波） 救助協議会	海難救助訓練	愛南町 （愛媛県）	継続的に海難訓練を実施している。今年度は地域住民と連携して災害対策訓練を行った。
15	大島地区藻場を守る会	藻場	大島町 （長崎県）	春藻場づくりなど、藻場の現況に応じた取り組みを順応的に行っている。
16	外海地区活動組織	藻場 国境監視	長崎市 （長崎県）	大学生と連携してウニ除去と藻場再生に取り組んでいる。
17	長与浦再生活動組織	干潟	長与町 （長崎県）	水産資源の生産力を回復させるため、客土や耕うん等の底質改善に取り組んでいる。
18	深紅ブループロジェクト	干潟	南島原市 （長崎県）	アオサの除去、被覆網の敷設等の活動で干潟の再生に取り組んでいる。

19	名護屋地区藻場保全活動組織	藻場	佐伯市 （大分県）	磯焼けから藻場が回復した地区で、現在は植食性魚類の駆除を積極的に取り組んでいる。
20	川口二枚貝保全活動組織	干潟	熊本市 （熊本県）	アサリやハマグリの資源保護のため、保護区域の環境改善や網袋の規格の工夫に取り組んでいる。
21	芦北地域アマモ場再生・保全活動組織	藻場	芦北町 （熊本県）	高校生と協働でアマモ場の再生に取り組んでいる。
22	あいら藻場・干潟再生協議会	藻場・干潟 ヨシ帯 漂流・漂着物	姶良市 （鹿児島県）	大学生と連携してアサリ資源の再生に取り組んでいる。
23	恩納村美ら海を育む会	サンゴ礁	恩納村 （沖縄県）	古くからの養殖技術を応用してサンゴ礁の回復に取り組んでいる。

② 事例報告会の開催

1）参加対象及び広報

上記優良事例地区の活動実績を紹介、情報提供することで、水産多面的機能揮対策に取組む全国の活動組織の技術的水準の向上を図るとともに、広く一般に本事業を周知することを目的とした事例報告会を表 2-3-2 に示す会場、日程で開催した。

参加対象は以下のとおりとし、地域協議会を通じて各活動組織に周知した他、（公社）全国豊かな海づくり推進協会のホームページ（図 2-3-1）上に開催案内を掲載する他、ポスターを作成し、事業関係者、教育機関等に配布した（図 2-3-2）。

＜参加対象＞

・水産多面的機能発揮対策事業に参加する活動組織とその構成員
・関係都道府県、市町村及び地域協議会の事業担当者
・水産業・漁村の持つ多面的機能発揮のための活動に関心がある方
・市民活動や環境問題等に興味のある学生（高校生・専門学校生・大学生）

＜開催を通知した教育機関＞

・生物学系学部を有する首都圏大学・短期大学、専修学校（６９学部）
・全国の水産高等学校（４９校）
・都内の専修学校（３校）
・東京都立晴海総合高等学校（会場の近傍の学校）

表 2-3-2　事例報告会の会場・日程

会場	第一生命ホール（東京都中央区晴海1-8-9）
日程	平成30年2月10日（土）10：00～15：30（開場9：00）
定員	550名（先着）

公益社団法人
全国豊かな海づくり推進協会

トップページ | 全国豊かな海づくり推進協会とは | 主な事業 | 海づくり大会情報 | 栽培漁業について

› 水産多面的機能発揮対策事例報告会

平成28年度 水産多面的機能発揮対策 事例報告会 開催概要

本報告会は、「水産多面的機能発揮対策事業」の一環として、全国の先進的、効果的な取組を行う活動組織にこれまでの活動の成果や課題について報告いただくことで、他の活動組織の今後の活動の参考としていただくとともに、活動組織間の情報交換の場の提供と一般市民への周知を図ることを目的として開催するものです。

■主催：公益社団法人全国豊かな海づくり推進協会

■会場・日程

会場	ヤクルトホール（東京都港区東新橋1－1－19） [地図はこちら]
日程	平成29年1月31日（火）10:00～17:00 開場は9:30～
定員	500名（先着）

※事前にポスター等でご案内しておりました会場が変更となっております。ご注意願います。なお開催日時の変更はございません。

■プログラム

□頭発表

時刻	内容		
9:30～	開場・受付		
10:00～10:20	開会・挨拶	公益社団法人全国豊かな海づくり推進協会・水産庁	
10:20～10:40	第1事例	【神奈川県】城ヶ島藻場保全活動組織	藻場
10:40～11:00	第2事例	【福岡県】相島地区藻場保全活動協議会	藻場
11:00～11:20	第3事例	【長崎県】有家の浜を守る会	藻場
11:20～11:40	第4事例	【長崎県】江の浦地区藻場を大切にする会	藻場
11:40～12:40	休憩		
12:40～13:00	第5事例	【青森県】小川原湖地区漁場保全の会	内水面
13:00～13:20	第6事例	【滋賀県】愛知川清流会	内水面
13:20～13:40	第7事例	【鹿児島県】高尾野川をきれいにする会	内水面
13:40～14:00	第8事例	【滋賀県】南湖再生活動組織	浅場
14:00～14:20	休憩		
14:20～14:40	第9事例	【長崎県】深江ブループロジェクト	干潟
14:40～15:00	第10事例	【広島県】前潟干潟研究会	干潟
15:00～15:20	第11事例	【三重県】伊勢干潟保全会	干潟
15:20～15:40	第12事例	【沖縄県】伊江島海の会	サンゴ礁
15:40～	意見交換		

※プログラムの時間及び内容（発表順序を含む）は変更する場合があります。

ポスター発表（開場内に掲示）

第1事例	【青森県】新深浦町漁協地域多面的機能発揮活動組織	国民生命
第2事例	【北海道】余別・海HUG（みたい	藻場
第3事例	【長崎県】北九十九島地域活動組織	藻場
第4事例	【大分県】名護屋地区藻場保全活動組織	藻場
第5事例	【鹿児島県】あいら藻場・干潟再生協議会	藻場
第6事例	【北海道】湾中地区干潟保全協議会	干潟
第7事例	【熊本県】川口二枚貝保全活動組織	干潟
第8事例	【長崎県】長与浦再生活動組織	浅場
第9事例	【茨城県】かすみがうら市地区環境・生態系保全活動組織	ヨシ帯
第10事例	【富山県】富山市水辺をきれいにする会	内水面

■参加対象：

（1）水産業・漁村の持つ多面的機能発揮のための活動に関心がある方
（2）水産多面的機能発揮対策事業に参加する活動組織とその構成員
（3）関係都道府県、市町村及び地域協議会の事業担当者

■申込方法：

参加申込用紙に必要事項をご記入の上、下記申込書提出先まで、Fax、E-mailにてご送付下さい（複数の参加希望者がいる場合には、地域協議会や活動組織単位でまとめてお送り下さいますようお願いたします）。

申込書ダウンロード
（Microsoft Word形式：18KB）

※申込締め切り：**平成29年1月16日（月）**

申込書提出先：**公益社団法人全国豊かな海づくり推進協会　事業推進部　宛**
FAX：03－5651－3502
E-mail：sanka@yutakanaumi.jp

■問い合わせ先
公益社団法人　全国豊かな海づくり推進協会　　小迫・野口
電話：03-5651-3501　FAX：03-5651-3502　E-mail：sanka@yutakanaumi.jp

図 2-3-1　事例報告会の開催案内

図 2-3-2　事例報告会案内ポスター

2）開催内容

事例報告を行う活動組織は、上記優良事例地区及び地域協議会から推薦のあった活動組織とした。表 2-3-3 に口頭発表を行う活動組織を、表 2-3-4 にポスター発表（展示のみ）を行った活動組織を示した。

表 2-3-3　事例報告会のプログラム（口頭発表）

時刻	内容	
9：00～	開場・受付	
10：00～10：15	開会・挨拶、オリエンテーション	
10：15～10：45	日本の漁業・漁村の多面的な役割と国際的評価 八木信行氏（国立大学法人東京大学大学院農学生命科学研究科　教授）	
第1部　トークセッション「これからの市民参加を考える」		
10：45～12：30	木村尚氏（NPO法人海辺つくり研究会理事）	
	【鹿児島県】あいら藻場・干潟再生協議会	干潟
	【島根県】益田川と海をつなぐ自然環境保全活動組織	内水面他
	【長崎県】外海地区活動組織	藻場
12：30～13：30	休憩	
第2部　事例報告会「先進事例に学ぶ-沿岸・河川の環境保全活動-」		
13：30～13：50	【長崎県】大島地区藻場を守る会	藻場
13：50～14：10	【静岡県】榛南磯焼け対策活動協議会	藻場
14：10～14：30	【北海道】火散布沼干潟を保全する会	干潟
14：30～14：50	【愛媛県】愛南さんごを守る協議会	サンゴ礁
14：50～15：10	【京都府】京の川の恵みを活かす会	内水面
15：10～15：30	意見交換	
15：30	閉会	

表 2-3-4　ポスター発表事例

第1事例	【北海道】余別・海ＨＵＧくみたい	藻場
第2事例	【神奈川県】城ヶ島藻場保全活動組織	藻場
第3事例	【大分県】名護屋地区藻場保全活動組織	藻場
第4事例	【長崎県】深江ブループロジェクト活動組織	干潟
第5事例	【熊本県】芦北地域アマモ場再生・保全活動組織	藻場
第6事例	【北海道】湾中地区干潟保全協議会	干潟
第7事例	【愛知県】幡豆地区干潟・藻場を保全する会	藻場・干潟
第8事例	【広島県】前潟干潟研究会	干潟
第9事例	【広島県】広島県東部アサリ協議会（浦島地区）	干潟
第10事例	【熊本県】川口二枚貝保全活動組織	干潟

第11事例	【長崎県】長与浦再生活動組織	干潟
第 12 事例	【富山県】富山市水辺をきれいにする会	内水面
第 13 事例	【茨城県】かすみがうら市地区環境・生態系保全活動組織	ヨシ帯
第 14 事例	【沖縄県】恩納村美ら海を育む会	サンゴ礁
第 15 事例	【愛媛県】愛南地区沿岸海難（津波）救助協議会	海難救助訓練

事例報告者の参加者は 474 名であり、活動組織が 150 名と最も多く、次いで行政機関 134 名、地域協議会 60 名の順で、一般および学生・学校関係者は合わせて 44 名であった。

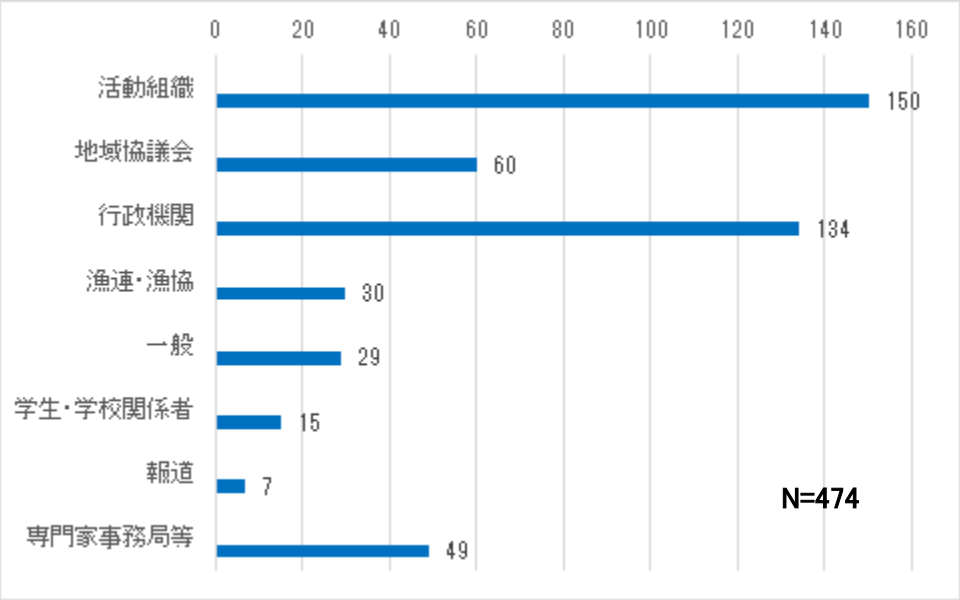


図 2-3-3　参加者の所属

開会

会場

講演

第１部　トークセッション

第１部　トークセッション

第２部　事例報告

第２部　事例報告

ポスター展示

図 2-3-4　報告会の開催状況

4）アンケート結果

参加者に対し、図 2-3-5 に示すアンケートを実施した。

参加者 440 名（事務局、関係団体、コーディネーターを除く）のうち、196 名から回答を得た（回答率 45%）。

平成 29 年度　シンポジウム「里海保全の最前線」参加者アンケート

2018.2.10

1．あなた自身について教えてください

●年齢）①10 代　②20 代　③30 代　④40 代　⑤50 代　⑥60 代　⑦70 代　⑧80 歳以上

●性別）①男性　②女性

●所属等）＜事業関係者＞

①活動組織（ 漁業者・漁協・学校・NPO・民間企業・その他（　　））　②協定市町村

③地域協議会（ 都道府県・漁協・漁連・大学・その他（　　））　④サポート専門家

＜その他＞

⑤行政機関（ 国・都道府県・市町村 ）　⑥学校（ 小・中・高・専門・大・大学院 ）

⑦活動組織に属さない漁業者　⑧メディア　⑨民間企業　⑩主婦　⑪その他（　　）

2．本日のシンポジウム（事例報告会）について伺います

（1）第１部（トークセッション）へのご意見、ご感想をお聞かせください

（2）第２部（事例紹介）で参考になった活動組織、活動内容等がありましたら教えてください

（3）ポスター展示について、参考になった活動組織、活動内容等がありましたら教えてください

3．シンポジウム（事例報告会）の開催について伺います

（1）今後もこのような全国規模の事例報告会は必要だと思いますか？

①そう思う　②どちらともいえない　③思わない　④その他（　　）

（2）今年度新たに行ったトークセッションはいかがでしたか？

①良かった　②どちらともいえない　③事例報告のみで良い　④その他（　　）

（3）土曜日（休日）の開催について、いかがでしたか？

①良かった　②どちらともいえない　③平日の開催が良い　④その他（　　）

（4）今後の事例報告会について、内容、時期、開催場所等についてご希望がありましたら教えてください

（　　）

4．その他、事例報告会や発揮対策事業等へのご意見・ご要望などがありましたら自由にご記入ください

ご協力ありがとうございました

図 2-3-5　アンケート用紙

以下、アンケートの集計結果を示す。

1．あなた自身について教えてください

●年齢

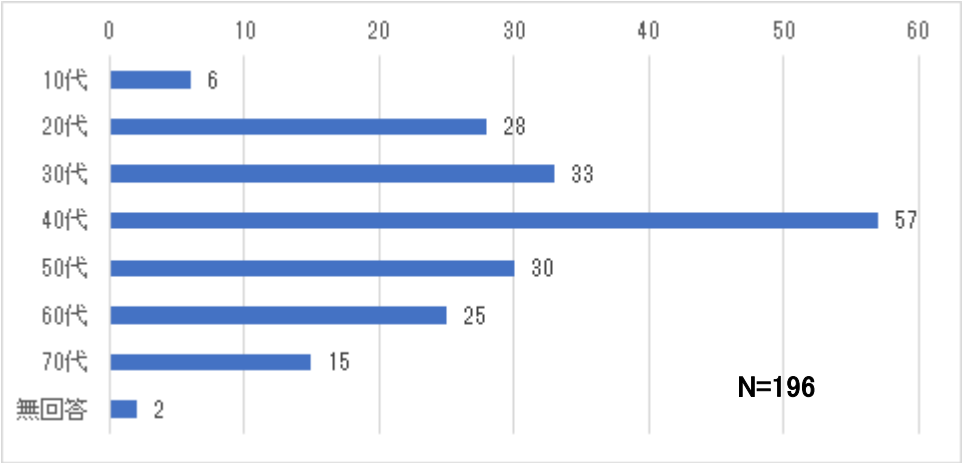


図 2-3-6　参加者の年齢

●性別

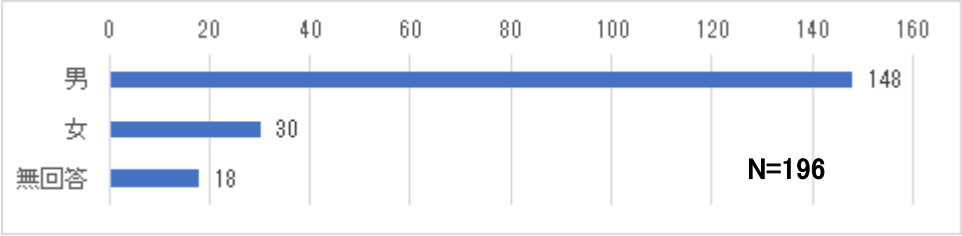


図 2-3-7　参加者の性別

●所属等

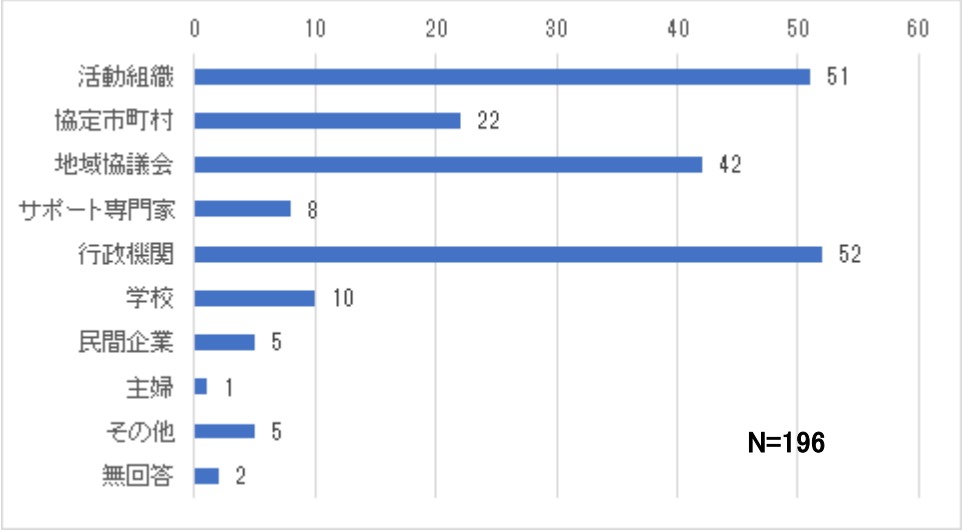


図 2-3-8　参加者の所属等

2．本日のシンポジウム（事例報告会）について伺います。

（1）「第１部（トークセッション）へのご意見、ご感想をお聞かせください」

東京大学大学院農学生命科学研究科 八木信行教授による講演については、「多面的機能と生態系サービスの意義について理解できた」という回答が大多数を占めた。トークセッションについては、「市民や学生等様々な人々との協働が成功に繋がることが分かった」「協働の重要性が理解できた」という回答が大多数を占めた。

一方で、「質疑応答の時間を増やしてほしい」「セッションしている感じがしない」等の回答もあった。

【講演について】

多面的機能という言葉を根本から説明いただき、分かりやすかったです。改めて考えてみようと思いました。
多面的機能、生態系サービスについて理解できた。
「多面的」「持続可能」の意義がよく理解できた。漁協、植林、住民、行政の連携や相互理解が重要であるとの理解。
あまり深く考えずに使っていた表現がストンと腑に落ちました。
多面的の語源が理解でき、併せて色々の説明が大変有意義でした。
「多面的機能」の概念が分かり易かった。
多面的機能発揮対策の意義について、最初に理解できたので、その後の話を理解しやすかった。
水産多面的機能の定義や生態系サービスの話が参考になった。
本事業の意味合いや、世界的な認知などとても良く理解できた。
八木先生の生態系サービスと多面的機能の違いを分かりやすく教えていただきありがとうございました。
八木先生の話は多面的機能についてよくわかり、大変参考になりました。
水産多面的とは何か、根本的な点を学ぶ良い機会となりました。ただ、里海というものの概念や多面的との関連性が理解しにくいものでした。
里海と多面的が同じものだという考えがその通りだと考える。漁業者だけでも一般だけでも上手くいかない。
今後の活動の進め方（多面的の考え方）が参考になった。
八木先生の講演で、多面的事業の定義や世界的な動きとの関連が分かって、とても勉強になりました。
多面的機能に対する国際的な関心や重要度が理解されつつあると感じた。
国際的な理念や諸外国との技術まで、上流部の話題を提供していただいた。このような話はあまり聞くことがなかったので、刺激的であった。
八木先生の国際的な経験が活かされていた。
八木教授の講演は大変分かり易かった。
講演は良かった。

【第１部（トークセッション）について】

横の広がり（地域・学校・企業の巻き込み方）について、大変参考になるお話がきけました。
協働体制の確立が必要だと感じました。
水産系にかかわらず、様々な機関、人々を巻き込んで活動していくことが重要で、時間をかけていくことも大事だと分かりました。
大学、学生、NPO などの協力が活動を進める際に必要だと感じた。
若い方やその他漁業者以外の方を取り入れながら、活動を実施することが大事だと感じた。
第１期対策の頃と比較すると、各地区それぞれの工夫により、横展開されていると感じました。地域と連携した取り組みにより、環境の回復が加速することと、事業が継続することを願います。
NPO 法人のメンバーなど漁業者以外のメンバー中心の活動も多数あり、広がりのある活動報告を聞くことができた。
益田川の方や木村さんのお話の中で、地域を巻き込んだ活動の重要性を感じた。
色々と考える機会になったと思う。普通に生活していては聞けないことが聞けて、人のつながりの重要性も理解できた。面白かった。
地域の方々を巻き込むことの大切さを学んだ。
漁業者や市民との連携がとれた取り組みが多く、とても参考になった。１つの組織で解決するのは非常に難しいので、周りをうまく巻き込むやり方はとても大事だと感じた。
大学や NPO との連携は素晴らしいと思いました。そういう風に連携できる誰か、何かを探すのも大切だなと感じました。
各地域の面白い取り組みは勉強になった。人とのつながりが大きな発展につながるというのが分かった。
当核活動は地域の方々、漁業者以外の者の参画が、成功や継続する秘訣だと感じた。
多方面の様々な人を巻き込んでいく重要性を改めて感じるとともに、着実に横展開の輪が広がっていると感じました。
NPO や学生とうまく協力できている活動例を聞けて参考になった。
興味深かった。活動の協力者の広げ方は参考になった。
人と人とのつながりを活かした取り組みが印象的だった。
保全活動を成功させるキーとして、多様な人材とのつながりの重要性を再確認した。
漁業者だけでの取り組みでは大変な面もあり、水産高校などの協力を想定しているが、今回大学生や小学生、地域の方と協力している事例もあり参考にしたい。企業やダイビングなども。
同じ悩みをかかえて活動しているが、学生とのコラボや駆除の方法を工夫して各活動組織ががんばっていることがわかった。失敗から得るものは大きい。
いかに若者、一般の方を活動に参加させていくのか、国民に周知させていくのかを考えさせられるものだった。
様々な事例を伺い、現在本校で行っている活動について今一度よく考える良い機会になりま

した。アマモ場再生やアサリの資源量調査など、今までは水産試験場や企業との連携が多かったのですが、近くに漁協さんがあるので漁業者の方の意見を聞きながら活動していきたいと思いました。
各活動組織の発表時間も適度で良かったと思います。テーマである「これからの市民参加を考える」について、様々な角度から意見を聞くことができ、有意義でした。
積極的な素晴らしい発表で大変参考になりました。NPO、大学サークルで支援や協力するチームワークが活動の成果につながっていると感じた。組合員のモチベーションが高まる組織づくり、活動内容であった。
地域ごとに課題があり、その中でも地域との連携が今後は必要不可欠だと聞き自分の地域でも足りていない部分だったので勉強になりました。
漁業者の高齢化が進む中、地域住民（小学校、中学校）などの水産業の職場体験などを増やすことが今後の新規漁業者増加に繋がっていくのではないかと思った。
良かった。活動方法だけでなく、活動の意義や目的について考えるきっかけとなる。
企画の参画推進について勉強になった。
多面的事業推進の意義と大切さを再認識した。
全国で様々な形で水産多面的機能に係わっていることを知り、自分がどんな立場にいるかよくわかりました。
全国各地の様々な活動において、活動の内容を越えて情報共有できるのが良い。
木村氏の講演や各地域組織の活動事例から、多面的機能発揮対策の必要性、意義を再確認できた。
各組織、団体が有機的に機能する環境づくりの重要性を認識できました。当町が抱える課題を解決するためのヒントが随所に見られ、勉強になりました。外部への周知・PR と、全町的な啓発強化に努めたいと思います。
先進的な取り組みについての情報があり、非常に良い活動が行われていることが分かった。
海の環境保全取り組みの概要が理解できた。
ヒントになる事例が多くあり、ためになった。
具体的な事例を知り、勉強になりました。
活動優良組織が意見交換できる場となり、聞いている側を含め、とても参考になりました。
活動に対しての取り組み方等に対し、参考になる面があった。
各パネリストの意見が大変参考になりました。
各専門家の観点からいろいろな事例を知ることが出来た。
県内での指導の参考になった。
興味深い内容で参考になった。
上手くいっている、苦労している等各段階の紹介があり、八木先生、木村さんがよくまとめており、整っていた。
非常に興味深かった。特に、気軽に一般の人にも分かりやすくトークが進んだところが良かっ

た。
「里海保全」の言葉が前面に出るようになり、わかりやすくなった。
わかりやすく意義深かった。
率直な意見が分かりやすかった。
大変分かり易く、興味深い内容であり、聞いていても飽きが来ない。自らの地域と照らし合わせ、面白い内容であった。
話が分かり易かった。
きわめて有意義なセッションでした。
生の意見が聞けて良かった。幅広い知識が得られ、新鮮な経験ができた。
今までと違った構成でよかったと思います。
各県の先進的な取り組み事例が聞けて良かった。
さまざまな意見が飛び交っていたので良かったと思います。
トーク方式での発表は参加者全員が参加できるので良かった。
トークセッションは発表より踏み込んだ話が聞けて良かった。
大変良かった。八木先生と木村さんのやりとりは特に良かった。勉強になりました。
水産多面的の活動だけでなく、専門家の話が聞けてよかった。
専門家の話は良かった。面白かった。
いろいろな話が聞けて面白かった。
大変楽しく聞かせてもらった。
今年は特によかったと思う。
全体交流としては良かった。
生態系サービス、川や海の『めぐみ』を一般の方へアピールすることが重要。
最近皆さん熱心に環境に関心を持つようになり幅広い活動の場が広がっているように感じます。良いことですので頑張ろう。
事務局素晴らしい人選をしたと思います。お疲れ様です。
水産復興特区やWTOのような単純な経済活性化は環境や社会に負担なのだと思いました。
活発的な議論ではなかったと思いますが、各地区の事例を拝見させていただきました。
八木先生の言葉の解説が良かった。
アマモ場再生の活動をしていく中で、地元の人との交流ができ、地域の文化も復活したいということが素晴らしいと思いました。やはり継続していくと変わっていくのかと思いました。
東京湾での多様な主体によるアマモ場の活動、その他の活動について興味深く、参考になりました。
木村さんの説明は大変分かりやすくて、アマモ再生の取り組みに感銘を受けました。「食べていければいいのでは」の言葉良かったです。
東京湾のアマモ再生の取り組みでは、地域の人との協働がすばらしいと思った。
木村尚先生の藻場への精神、アマモ再生までの苦労を聞くことができてよかった。

木村氏のアマモの再生から地域活性化への話がよかった。	
木村さんの話が面白かった。いろんな人（企業、一般市民）を巻き込むことが重要だと分かった。	
木村先生の話が非常に聞きやすく、分かり易かった。市民参加の方向も良いのでは。	
木村氏の考え方は勉強になった。	
人の動かし方を木村さんより教授いただき、助かりました。	
企業の取り組みが参考になりました。	
企業との協力。	
木村さんの話は具体性があり、良く理解できたし、興味を持てた。	
全国の水辺に精通している木村尚さんの回答、コメントは大変参考になりました。	
木村さんの発表が印象的であった。	
木村先生の話が良かった。	
木村さんの話が良かった。	
木村さんの話が長すぎた。	
あいら藻場、干潟再生協議会の長年にわたる取り組みと成果は素晴らしい。研究機関や行政の助けが大事なことが認識できた。	
干潟の持つ自浄作用の効率化をうまく図ることの大切さがわかりやすく説明されていた。	
あいら藻場干潟再生協議会、袋の中は砂利だけ？ケアシェルの効果？	
益田川と海をつなぐ活動組織の漁業者と NPO の協働のあり方が参考になりました。	
蛤の会と NPO の関係に興味を持ちました。	
益田川の報告が参考になった。清流のとなりの益田川をきれいにして、漁業者の協力もあり、とても上手くいっていると感じる。	
益田川と海をつなぐ自然環境保全活動組織の市民参加型モニタリング活動が良かった。	
多くの人々を実際に巻き込んだ取り組みをしている益田川における事例が大変参考になりました。	
益田川を通じた、海と川のつながりを重視した、環境の保全活動他組織にとって優れた事例として、参考となる取組。	
内水面の生態系の維持管理、保全活動が身近な発表で、ためになったし、発表者がとても良かった。	
島根県の取り組みは素晴らしい。話も分かり易かった。	
島根県の取り組みが参考になった。	
益田川の事例が大変参考になった。	
益田川と海をつなぐ自然環境保全活動組織の話が良かった。	
益田川の話が良かった。	
同じ島根県でありながら、益田川でこうした活動がされていることを全く知らなかった。勉強不足だったと感じた。	

学生と漁業者の連携した活動が参考になった。
学生も参加していた点が良かった。
長崎の大学とのコラボが参考になった。
外海の活動が若い世代を抱き込んでの活動として意義がある。
外海地区活動組織さんが大学のサークル（水産以外の人）を巻き込んで実施していることがとても魅力的でした。
長崎県の活動組織に大学生のサークルが協力しているのはいいことだなと思った。
外海地区の３人の女の子がかわいく、漁業者もやる気が出るだろうと思った。女子大生との取り組みは非常に良いと思った。
女性の取り組みが利益になると思われる。
長崎のボランティアのスキューバの事例は参考になった。
長崎外海地区のウニ除去は人件費がかからずに実施できるというのが、活動組織らしくて良い。ここで雇用関係が生まれてしまうと、「この待遇はおかしい！！」というような意見が出てしまい、かえって活動が上手くいかなくなると思う。
外海地区活動組織の話が参考になりました。
長崎の活動が参考になりました。
長崎県の取り組みは良かった。
人間と自然との共生を改めて認識した。併せて地域との協働がないと成功しない（海は皆のもの）長崎大学の取り組みを今後とも継続していってほしいと思います。自分も事務方だけでなくガゼの駆除に積極的に参加したいと思います（自身ダイバーとして）
ウニの除去について、除去した「ガンガゼ」をどうしているのか、長崎県であれば良好な釣り場が多く、釣りの餌として活用できると思われる。ダイバーの費用にも活用できると思う。また、食害だけでしょうか。釣り人の蒔き餌が多く、磯やけが起きているのでは？
磯焼けは全国的に悩まされていることがわかった。
長崎県外海について、学生が参入する過程をもっと詳しく知りたいです。他地区でも若い方の参考になるはずなので。
長崎の事例は興味深い。学生を取り入れるきっかけ等について、もう少し深く話を聞きたかった。
「若い女性」についての話題は、よい時もありますが、やりすぎは女子達の負担になることもあります。
外海地区の活動は大学生参加以外では特段特徴が無い。
最後の人間は経済に走りすぎている。
質疑応答の時間を増やしてほしい。
会場との質疑応答の時間が短かった。
質疑応答がもう少しあると良い。
質疑の時間がもっとあればよかった。聞くだけなら事例集を読めばいい。

もう少しディスカッションの時間がとれないか。
参加者のみ参加型で聴者が置いてきぼり感がありました。
出演者の方々が１つの課題に対して議論をする場を設けて欲しかった。
事前に、３題に通じるテーマを指定して、その中で話してもらった方が有意義だったと感じる。ややまとまりに欠けた。
鹿児島、島根、長崎の活動報告をトークセッションというくくりにしているが、第２部の報告会との差があまり感じない。学生が全国で長崎大の学生のように活動している（研究含む）学生の発表がもっとあれば、未来へ続く明るい話題にも繋がる。
それぞれの事例報告があってからのトークセッションでしたが、特に話に広がりが生まれておらず、これであれば事例報告＋質疑応答の形式でもよかったのではないかと思う。もっと自由討論のような形のトークセッションを期待します。
あんまりセッションしている感じがないので人を絞ったほうが良い。司会も工夫したほうが良い。
トークセッションは話の面白い木村氏だから成立したので今後もやるなら人選が大事です。
トークセッションにする意味ありますか。
基調講演。主題が難しくて、語れる人がいないようだ。
市民参加について、もう少し踏み込んだ話をしてほしかった。また、活動の効果として、漁獲量や環境改善がそれほどなくても連携から始めるということなのかはっきりしなかった。
持続可能な開発における３つの背景で、環境が大きくなっている数値的なものが見たい。
大学を巻き込んで活動した方が良いとの話があったが、多面的機能は大学など研究機関のための事業と感じられた。過去に大学に協力してもらったこともあったが、研究するだけで、結果、一度報告会が開催されただけであり、協力した地区に何の恩恵もなかった。このような点で研究機関に対して、嫌悪感があり、巻き込むのを望まない地区もあることを認識してもらいたい。研究機関（特に大学）の意識改革がまず必要と感じる。
目新しいものがなく面白くない。

（２）第２部（事例紹介）で参考になった活動組織、活動内容等ありましたら教えてください

５組織の事例紹介のうち、回答者が参考になった活動組織は「京の川の恵みを活かす会」が最も多く（32 名）、次いで「火散布沼干潟を保全する会」（18 名）であった。

「京の川の恵みを活かす会」については、「アユの簡易魚道づくりが参考になった」という回答が多かった。全体としては、「全国の様々な活動を知る良い機会となった」「活動が状況や目的によって益にも害にもなることが分かった」という回答が多かった。

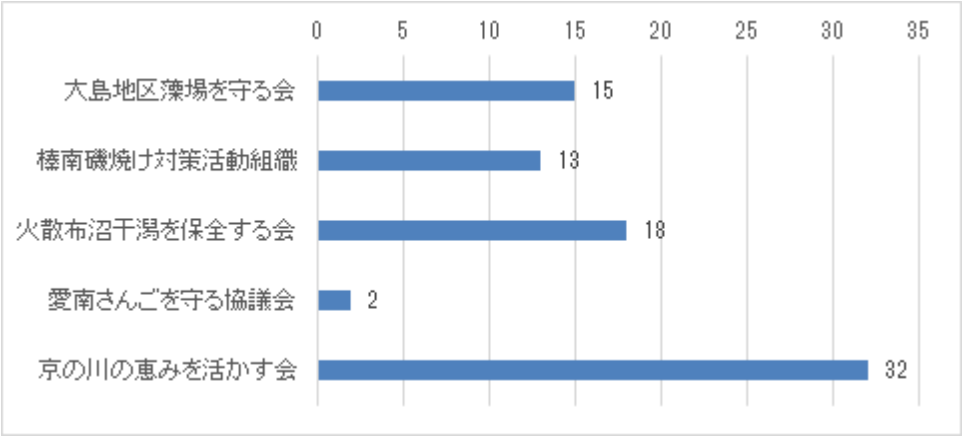


図 2-3-9　参考になった活動組織、活動内容

【大島地区藻場を守る会】

長崎県大島地区の事例発表により、活動継続の重要性と状況にあった藻場回復目標の立て方の重要性が良くわかる発表で参考になりました。
22 年間というロングスパンの中での試行錯誤、リーダーのご苦労やメンバーがモチベーションを維持するなど多くの課題を乗り越えてこられたことと思う。
活動方針の見直し、コンクリート会社の企業との活動について大変参考になった。
藻場再生の取り組みに対しての成果が参考になった。
効果的な行政支援について、方策を研究したくなりました。

【榛南磯焼け対策活動組織】

磯焼けになった原因それぞれに方針・考え方を決めて、具体的な取り組みを実施された所。
藻場再生の取り組みに対しての成果が参考になった。
アイゴの食害が藻場に与える影響がこんなにひどいものだとは思わなかった。魚道が全国的に広がれば。
定置、刺し網でかなりの魚が確保できているのに驚いた。何かコツがあるのであれば知りたい。

【火散布沼干潟を保全する会】

干潟の耕耘。
干潟の耕耘方法について参考になった。
藻の除去が重要であることを学び、今後とも続けて頂きたいです。
中学生に漁場を開放し、漁場の管理を行い、漁獲したものの利益を義援金などに使う取り組みが行われており、感銘を受けた。
モニタリングによる定量的な活動評価は参考になった。
干潟再生の取り組みに対しての成果が参考になった。
干潟・アサリ関係。

入り込んでいる道、試験場のレベルの高さを感じ、我々ももっと出来ることがあると思いました。

【愛南さんごを守る協議会】

一般の方々を巻き込むことが参考になった。

【京の川の恵みを活かす会】

遊漁人口の減少に伴い、活動の経営悪化、放流量の減少が広がっている。これに対し、天然魚の遡上を促すことにより、資源を確保しようとする取組は、今後の１つの方向を示すものと考えられる。
木組み式斜路式魚道の作り方が興味あった。
魚道の取り組みは工夫と考え方が素晴らしい。
自作魚道の工夫
魚道についての活動が面白かった。
鴨川の仮設魚道
アユの魚道が参考になった。以前、京都の出町柳に住んでいたので。
ぜひ継続的に今後も聞きたい。増えたアユをもって、増殖義務にできたとの報告まで追って報告をしてほしい。
広く深い形で展開していた。
内水面関係に関心があったので興味深いものがありました。
感銘を受けました。
内水面の取り組みをもっと広げてほしい。
当県の課題と重なる部分が多く、活用させて頂きたいと思います。今回のシンポジウムを機に少しでも成果のある活動にシフト出来ればと思います。
今年度から私の市においても内水面の活動が始まったが、京都市の活動を参考にしていけると良いと思った。
皆頑張っている。行政の関わりはどの程度か知りたかった。様々な機関との連携が大事ですね。

【その他】

すべて
具体的な事例で良かったです。全国的に活動が広がっていて、励みになります。
全国の活動内容を知るいい機会となった。
各県において、食害生物の被害および対策がねられており、大変勉強になった。
いろんなことをしていることが分かり、良かった。
どれもよい事例でレベルが高い。ほかの活動組織にも紹介したいです。このような発表はyoutube で公開してもよいと思います。

各組織とも多様な活動、参加者を得て、問題意識を持った取組が行われていると思う。
各地区で、数年前、10 年以上前から活動を始めて、ずっと長期的にモニタリングして結果を出しているということが明確な発表ばかりでした。食害種の駆除尾数は活動のおかげで減っていることを知りました。
藻場の衰退が九州と静岡で同時期に発生していると知った。地域的でなく全国的な状況について気付く良い機会となった。
多くの事例紹介のおかげでたくさんのことを知ることができた。
さまざまな課題や対応状況があると自分たちの活動の参考になる。
海と内水面の取り組みの違いがよく分かる。
非常に長期間にわたり、粘り強く、取り組まれている活動について話を聞くことが出来た。
全て良かったです。
どの事例も参考になった。
参考になりました。
特定の事例ではありませんが、状況によって害にも益にもなるという点が考え深く思いました（アマモなど)。
これまで習ってきたことや、やってきたことがすべて当たっているというわけではなく、環境や目的によってはそれが邪になることが分かりました。自分の活動が周りにどのような影響を与えるかを再確認しようと思いました。
アマモは必要か必要でないかについて、今後の進み具合が気になる状況。
藻場を増やすことで磯焼け対策になり、アサリの漁が増えることがわかった。参考にしたい。
日本全体で磯焼けについて悩んでいるのが分かった。
一度で上手くいったのでない事も分かってためになった。大学の協力が得られているのが羨ましい。
内容の濃いものでした。
本当に海は漁業者だけでなく、皆で守っていくという気持ちでいたいと思います。地元住民がその地域をどうやって活性化させるか考えていければと思います。
磯焼けしている地域の話で、私の地域ではひどく磯焼けはしておらず、そこまで目立っていないがこれからする可能性もあるので防止活動に努めたい。
アマモ場調査にサンゴの調査方法が応用していけないかと思いました。また、アサリ漁場の耕うんができるか地元漁協と相談していきたいと思いました。
海が生き返っていると思った。
技術面の発表にとどまっている。多面の意義（社会的な位置作り）へ向けた取り組み、体験などが知りたい。
藻場や干潟が多い。内水面も含めて題目をバランスよく。
眠かった。単調になりすぎた。
目新しいものがなく面白くない。

内容がない。

（３）ポスター展示について、参考になった活動組織、活動内容等ありましたら教えてください」

15 組織の事例紹介のうち、回答者が参考になった活動組織は「城ヶ島藻場保全活動組織」が最も多く（13 名）、次いで「名護屋地区藻場保全活動組織」（５名）、「前潟干潟研究会」（５名）、「富山市水辺をきれいにする会」（５名）であった。城ヶ島藻場保全活動組織の参考になった活動内容は、「アイゴのマーケティング事情」との回答が多かった。

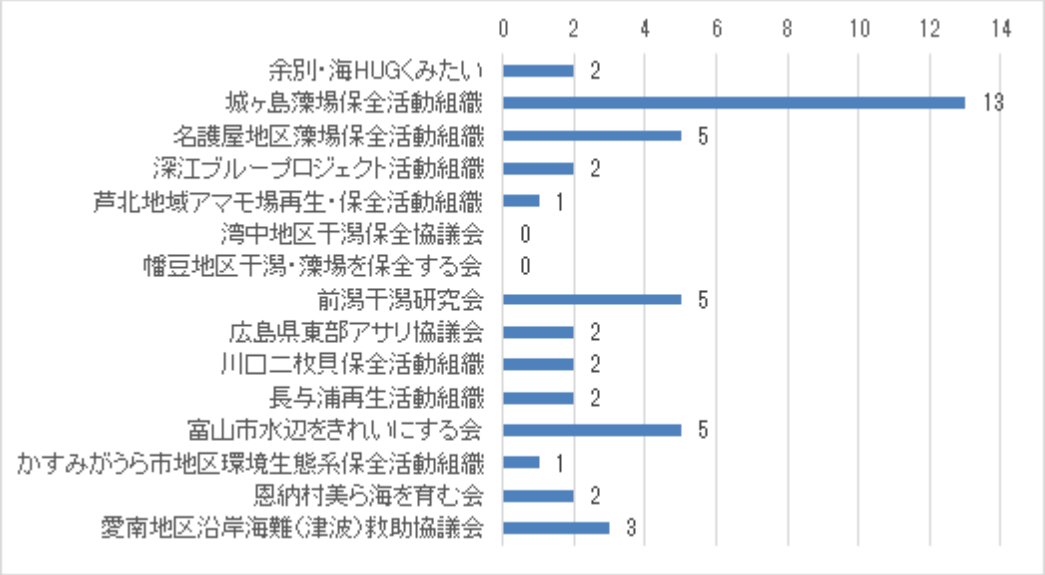


図 2-3-10　参考になった活動組織、活動内容（ポスター展示）

【余別・海 HUG くみたい】

分かり易いポスターでした。

【城ヶ島藻場保全活動組織】

アイゴのマーケティング事情が参考になった。
アイゴの販路開拓。
アイゴのマーケティングは未利用資源の利用から見ても非常に参考になると思われた。
アイゴのマーケティング事情について駆除したものの利用の観点で重要であると思われた。
魚種交代のピンチをチャンスに変える可能性があり、あまり着手例の見なかった、活動組織によるビジネス開拓として良い例だと思った。
利用されている地域、利用方法等が分かり、参考になった。
アイゴの調理方法について、興味深い情報がありました。

【名護屋地区藻場保全活動組織】

スポアバッグ、ネットの労力削減、効率化について。

【深江ブループロジェクト活動組織】

自分達の取り組みについて SNS を活用して周知。PR だけでなく、自分達の「やる気」を出させる。

【前潟干潟研究会】

アサリの大野方式。
着実に活動の輪が広がり、成果も上がっている。

【広島県東部アサリ協議会】

アサリを対象とした活動が参考になった。

【長与浦再生活動組織】

ナマコの沈着促進をもっと知りたい。

【富山市水辺をきれいにする会】

手作り魚道の設置。
小学校、高校、大学と活動していること、アマモ場再生、アサリを対象とした保全活動、スケジュールおよびアマモの播種について。

【かすみがうら市地区環境生態系保全活動組織】

ヨシ帯の活動について、効果の評価方法等。

【愛南地区沿岸海難（津波）救助協議会】

地震、津波の取り組みが良い。
当地域も津波の心配がある場所であり、ほとんどが藻場・干潟等磯焼け対策の取り組みであるが、海難についての対策も考えなければと改めて思った。

【その他】

完成度が高かった。
各地域の活動の特色が良く表現されている。
参考になりました。
活動資料として参考になります。
かなりまとまっている。帰ってからも呼んでみたいと思います。
資料冊子についているのがありがたかったです。(帰ってからゆっくり読ませていただきます)
奥が深いことがわかった。

各活動組織の発表に敬意を表します。
全体的にこれだけのパネル作りは大変素晴らしいと思う。ご苦労様でした。
アサリ関係の取り組み
干潟に関する事例は私どもにとって、とても参考になる事の集合であるので、助かります。
アサリ資源及び干潟再生が多くて、興味をひきました。
アサリの種苗採集と漁場づくりの活動。
干潟・アサリ関係。
干潟再生が参考になった。
アマモ場再生のポスターやアサリの資源量回復に対する取り組みなど、どれも参考になるものばかりでした。アマモの紙粘土法を活用すれば、学校の文化祭などで地域の方にアマモ再生の取り組みに気軽に参加していただけるのではないかと思いました。
主題のまとまらなさを表している。
見にくい。
字が小さすぎた。
展示が多い。もう少し絞ってもよい。15 件→10 件以下
目新しいものがなく面白くない。

３．シンポジウム（事例報告会）の開催について伺います

（１）「【午前の部】講演・トークセッションは今年初めて行いましたが、いかがでしたか？」

「良かった」が 78%（153 名）と最も多く、次いで「どちらともいえない」６％（12 名）、「事例報告のみで良い」６％（11 名）、「その他」２％（３名）で、無回答は９％(17 名）であった。およそ８割の回答者が良かったと回答している。その他と回答した方からは、設問２の（１）でもあった「トークセッションと事例報告の区別があまりない」とのコメントがあった。

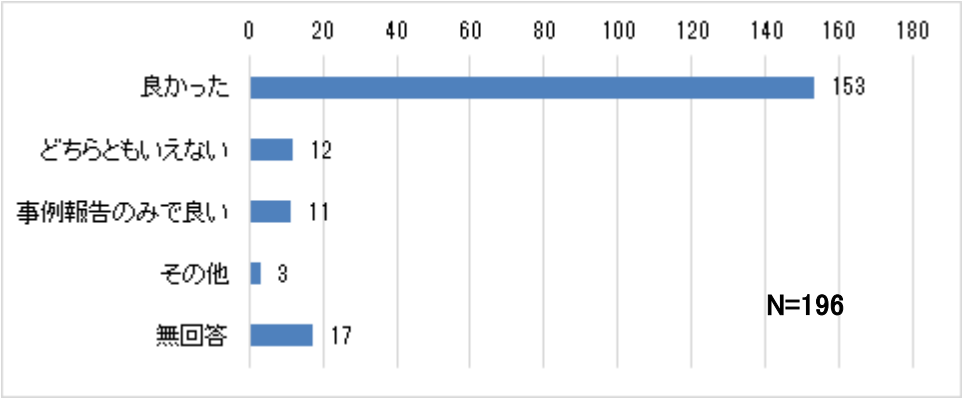


図 2-3-11　参考になった活動組織、活動内容

【「その他」と回答した方のコメント】

時間が足りない。
トークの人にやる気を感じられない。
トークセッションではない？ただの報告？午前と午後の区別があまりない。

（２）【午後の部】事例報告はいかがでしたか？

「良かった」が 72%（142 名）と最も多く、次いで「どちらともいえない」10%（20 名）、「良くない」１％（１名）、無回答は 17%(33 名）であった。およそ７割の回答者が「良かった」と回答している。「良かった」と回答した理由として、「様々な事例を知ることが出来たから」との回答が多かった。

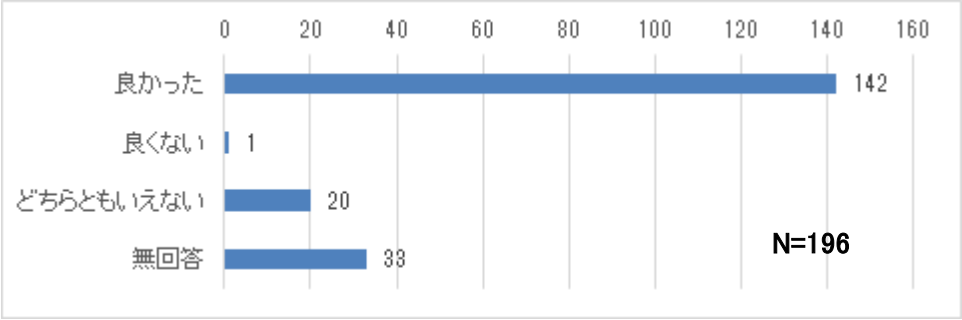


図 2-3-12　事例報告の感想

【「良かった」と回答した理由】

漁業者以外の一般の参加者について知れた。
企業や一般の方とどのように連携するきっかけを作るかなどの話題が上がっていた。
目的や手法、手順を良く練って取り組んでいる活動が多かった。
「環境保全」に絞っていたため。
分かりやすい。
現場の声が伝わる。
京都の報告について。
サンゴの保全活動で漁業者が参加している理由が不明確。京の川の発表がとても良かった。
県内での指導の参考になった。
多岐にわたる活動の報告から、参考になる情報をたくさん聞けたから。
多くの事例を学ぶことが出来た。
各地の事例を知ることが出来た。
様々な事例が聞けたから。
各方面の取り組みがわかる。
それぞれの場合によって、たくさんの考え方を知ることができたから。
他地区の様子が分かった。

他の地域で行っていることが分かったため。

【「どちらともいえない」と回答した理由】

事例は良いが、進め方が技術発表会的。サポート専門家が必ず感想を言うのではなく、一般参加者からの質問を受けた方が良いのでは。
内容の深いものと浅いものがあった。
以前聞いた話が何個かあった。
事例の時間を減らし、多くの事例発表を。
干潟、藻場、内水面を分けてほしい。

（３）土曜日（休日）の開催について、いかがでしたか？

良かったと平日の開催が良いがどちらも 38%（74 名）、次いでどちらともいえない 18%（36 名）、無回答は６％（12 名）であった。「休日開催は従来の参加者の参加が一部困難にはなるが、様々な所属にある一般の市民が参加できるという点で、良かった」とのコメントがあった。

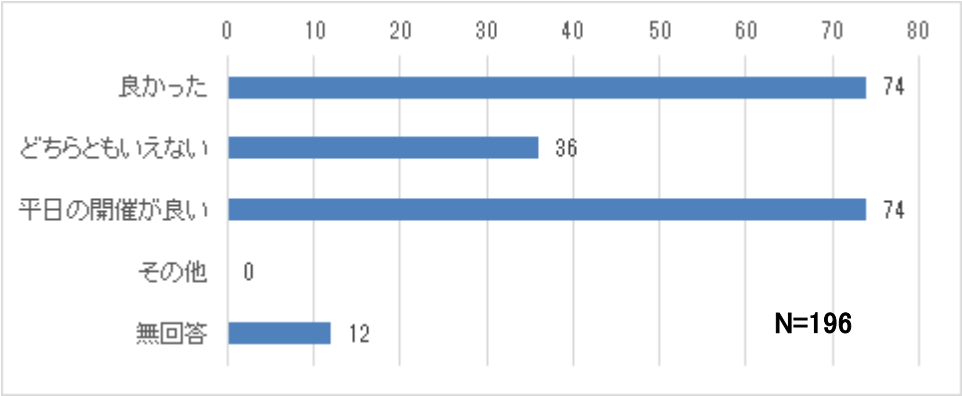


図 2-3-13　土曜日（休日）の開催について

【開催曜日についてのコメント、希望】

土曜開催良かった。
一般の人の参加が出来るという点で、土曜日の開催で良かったと思います。
トークセッション等で著名人を呼んだりするならば、休日開催にし、多くの方が聴講できるようにしたらよい。
休日開催のため、地元からは参加できない者がおり、残念に思っていた。しかし、実際に参加してみると、多様な団体から参加者が見られたので、休日開催は成功だと思う。
土日の場合は AM のみまたは 14 時まで。
開催日について、土曜は仕方ないとしても三連休は外すべき。
休日を挟むと予算にも厳しい。
金曜日

（４）シンポジウム（事例報告会）について、内容、時期、開催場所等ご希望がありましたら教えてください。

内容については、「内水面の事例報告を増やしてほしい」という希望が最も多かった。開催時期は今年度と同様に２月を希望する回答が最も多かったが、次いで、決算や事業執行の都合等を理由に、少し早い時期（11～１月頃）を希望する回答が多かった。日程については、磯焼け対策会議との連日開催が好評であった。開催場所は今年度と同様に東京を希望する回答が最も多かった。会場については、出来るだけ乗り換え数を少なくしてほしい等アクセスのしやすさを求める回答が多かった。

※以下、()内は回答者数

【内容について】

内水面の事例報告を増やしてほしい（ニホンウナギについて等)。（４）
同様に。（２）
世界の第一線の方と漁業関係者との関わりをもっと知りたい。水産業があまり有名でない地域の活動事例を聞いてみたい（埼玉県・山梨県・長野県等)。今日よりも少し小規模な会場でマイナーな組織活動を紹介してみてはどうか。
シンポジウムで出来るだけ多くの事例が知りたいので、各部門で開催してもらいたい。
他分野（環境など）から紹介することがあれば。
一般の方も参加しやすい内容。

【時期について】

同様に（２月)。（９）　理由：宿が安い。上～中旬の間にしてもらえると、県内への情報提供がスムーズ（３月になると事業報告で忙しい)。
１月下旬（頃)。（３）
１１月。（２）
2～3 月は都道府県、民間企業も決算などで忙しいのではないかと思うので、11～1 月ごろがよい。
事業執行の都合もあるので、もう少し早い時期の開催が良いです。
２月は雪のシーズンで北陰からは大変なので、大寒は避けてほしい。
他の事例から学び、今年度や次年度の作業の案と出来る時期が良いと思います。
インフルエンザの流行期はできるだけ避けていただけたらと思います。
季節的に海に感心が集まる時期でも良いと思う。
一般の方も参加しやすい時期。

【日程について】

今年度同様、磯焼け対策協議会との連日開催が良い。（４）

【開催場所について】

東京。（６）　理由：全国から参加しやすいという利点。
東京開催にこだわる必要もないと思う。
関西でも行ってほしい。
島根県松江市
毎年、場所を変えて開催してほしい。
各地で。
地域での情報公開で、皆で取り組み参加機会を増やす。
特筆すべき又は要望の多い現地での発表も検討？

【会場について】

大学。（２）　理由：学生が気軽に参加できるのでは。
地方から参加なので、分かり易く、地下鉄など乗り換えが少ない場所がいいです。今回は分かり易く、助かりました。
開催場所は東京駅の近くが望ましい（できれば電車１本で）
地方からの参加は電車等乗り換えなしの会場が良い。
地方者にとっては場所が分かりにくかった。
場所は羽田空港から行きやすい場所がよい。
場所もスペースゆったりで良かった。
発表者が緊張しないように、会場はもっとフランクに話が出来る場所（平面的な）でも良いと思います。
会場の都合もあるでしょうが、机のあるところが良いです。
一般の方も参加しやすい場所。

４．シンポジウム（事例報告会）や発揮対策事業等へのご意見・ご要望などがありましたらご記入ください

「質疑応答の時間を増やしてほしい」との回答が最も多かった。「一般の市民に様々な活動を知ってもらうために幅広い分野の発表があると良いと思う」「学生からの発表がもっとあると良いと思う」等、市民や学生の参加に肯定的な意見もあった。

【事業について】

事務手続き等を分かりやすくして頂きたい。また、簡易にして頂けると、よりよい事業となると思います。

河川は市町をまたぎ、漁協は県とのつながりが強いので、水産多面のサポートを県がやってくれるしくみがあるとよいと思う。市町はなかなか窓口がなく、30%負担がハードルになっている。都市部は河川愛護、自然保護の団体も多い。漁協と連携した活動が進めば、漁協のイメージ UP にもなると思う。多様な人達による、放流に頼らない水生生物、魚を増やす取り組みが、この制度の活用になって広がるとよいと思う。せっかくのよい制度なので、もっと多くの人に知ってもらい、取り組みが増えるといいですね。

【報告会の内容について】

それぞれがどのくらい補助金を交付されているかも示してほしかった。
地域特認活動をポスター展示などで紹介してはいかがでしょうか。国境・水域監視や避難訓練などについての発表もあると良いのではないかと思っています。今年度から一般の方も対象にした会にされていますので、漁業関係者の活動を知っていただく、良い機会だと思いますので、幅広い分野の発表があると、より有意義な会となると思います。
環境保全の取組は継続が必要と考える。なかなか成果が上がらず困っている組織もあると思うので、悩み・問題を抱えている組織に報告いただき、専門家の方から助言、支援をいただく機会も必要ではないか。
活動組織による事例報告のあとに、サポートした専門家による技術面・学術面の詳しい解説（スライドショー等でしっかり）があると良いと思いました。
里山（里海）の再生（保全）は、生産者の減少により、地域社会（村）が崩壊していくのを、防ぐ目的があるのでは。その住環境（生活環境＋自然環境）を守るために、多くの人々の役割・取り組みを社会面からも取り上げてほしい。多くの組織が（本当に）協働するために、どんな努力・システムで進めたのか学びたい。
初めての参加なので、初見（感）としては、満足でした。ただ、数回参加となると、統一テーマで枠をもって、報告（経年）とかがあると良いと思う。
学生からの発表がもっとあると良いと思う。研究している学生 etc.大学に打診して、よりもっと若い人達を巻き込んで、より良い報告会にして欲しい。
各地域で行っている取り組みは継続する必要があるので、毎年実施して、他地区の取り組みを教えて欲しい。
相互の発表者の交流。
一般の方から感想があったように、こういう発表や報告を聞く機会がもっとあると良いと思いました。
内水面に絞ったシンポジウムを期待しています。
植食性魚類製品の試食、販売などを併せて行ってはどうか。関係者以外の国民が参加しやすくなる試みが必要かと。
さかなクンの話を是非聞いてみたい。
次回は出来ればさかなクンも招待して欲しいです。
シンポジウムの進行方法を再考してほしい。

インターネットでの放送。
活動組織の方がもっと積極的に発言、参加できる上手な雰囲気作り。
専門家を招き、事例報告に対するアドバイスをいただく場がほしい。
今度は懇親会もやればよい。
分野別で紹介、意見交換が出来るとよい。
シンポジウムのプログラム内に、ポスター展示の概要をプレゼンする機会があると良かったです。現状→問題点→対策→結果（１分程度）
内水面の活動事例のポスター展示を増やしてほしい。
もっと大きい紙で展示してほしかった。
ポスター展示は学会よろしく、昼過ぎに説明して、自由に見られる時間を取ったらどうでしょう。
活動組織=漁業者団体という位置づけが強いので、どのように PR を行えば一般の方が参加してくれるか知りたい。

【報告会のスケジュールについて】

1 つ 1 つが良い発表なので、質問などが限られることがもったいない。発表数を減らして時間を確保してはどうか。トイレ休憩と水分補給の時間を間にもう少し入れてほしい。
質問の時間がもっとあってもよかったのでは。
他団体との意見交換の時間を増やしてほしい。
事例報告ではテーマによっては時間不足のものもあったのでは？
始発の新幹線に乗っても開始時間に間に合わないので少し遅く始めていただけたらと思います。
事業説明会は時間をかけて、実施して欲しい。各地で開催される講習会との差が少ない。
事例報告会は内水面と海面を時間的に分けて欲しい。私は内水面関係者なので、集中的に事例報告を聞きたいため。午前を基調講演と内水面事例報告、午後から海面事例報告として欲しい。
特に午後の第二部は、以前から思うことだが集中できない。（報告件数が多い）

【運営について】

この報告会の通知を各都道府県にまずは発出して、そこから関係先への通知をしているが、より直接事務局より案内を出して、より多くの参加を募るようなことをすると良いと思う。来年以降も今回同様、参加者名簿をお願いします。
地域協議会、活動組織向けの案内状にも、休日開催の意義を PR した方が良い。

【その他】

漁業者等に対して、国は規制改革推進会議で漁協組合下にある特定区画漁業権が外部企業の

参入障壁となっているから、誰でも参入できる経営者免許区画漁業権に変更して法規制しようとしている。とんでもないことであります。規制改革推進会議の委員の方々も浜に出て、漁業者とよく話し合いをして判断するように。

【感想】

漁業、水産関係者、団体など様々な視点が異なる立場の意見や活動を知ることができて、とても有意義な時間でした。活動には時間と様々な人の協力、関わりが必要不可欠だということが改めて分かりました。
学生が参加できたのは良い。
活動をしていてなかなか効果が思うように出ませんが、このシンポジウムに参加して元気が出ます。
事例報告の内容はとても興味深いものばかりで、当活動組織が抱える課題と重ねることもできたので、とても有意義でした。
素晴らしいと思います。
今後も行ってほしい。
大変参考になりました。ありがとうございました。
全国から多くの方の意見を聞けて、すごくためになりました。
続けられるようにお願いしたい。
スクリーンが大きくて見やすかった。声がよく聞こえていた。
昨年よりも良かった。
このような機会があったからこそ、もう一度自分の活動を見直すことができました。もっと多面的に、多角的に物事を見ていこうと思います。素晴らしいサミットでした。ありがとうございました。
自分の知っている人にも紹介したい。このプレゼン資料を PDF 化して送ってもいいのでしょうか？
一般の方も参加しやすいのではないか。
全国の活動組織の報告内容の密度が濃くなり浸透度が深くなったと思います。
今後も一般の人を巻き込み続けていくべきだと思います。
とても参考となり業務にも生かせます。今後も続けていただきたい。
中学校で教員をしています。生徒達に提示する教材のヒントにあふれていました。ありがとうございました。
本校では環境に関するコースを設けていますが、なかなか授業の中で環境保全に関する実習を取り入れられないので、このような事例報告会は嬉しいです。このような会を通じ、様々な団体の方と連携していければと思います。
京都の例によると、府が協力してくれているのはありがたいことです。長野県は全く協力して

	くれないのが残念。
	企画は画期的でスタートに意義あり。会で明確だが、水産でも業（=食）の存続の重みを都市市民はしっかり受け止めるべき。SDGS は食放棄を言っていない。地球を守るために、人類が食を失うことは含意されていない。相互理解=折合がゴール。
	少し時間が長いと思いました。
	２階席のせいか、やや音声が聞きづらかった。

(2) 事例集の作成

上記、事例報告会で発表した模範、参考となる活動組織の活動の要点を事例集として整理し、全国の地域協議会及び活動組織に配布した（資料編 7 に収録）。

(3) 各種媒体による情報提供

各地の取組の手法を他の地域での活動に活かすとともに、広く国民にも多面的機能発揮に資する活動に対する理解の増進を図るため、ウェブサイト等の媒体を活用して情報を発信した。

① ポスターの配布

主として事業関係者（活動組織、地域協議会）を対象に、本事業の趣旨と講習会、報告会の開催を周知するためのポスターを制作、配布した（図 2-3-6）。

図 2-3-6　事業案内ポスター

② ウェブサイト

平成 27 年度に構築されたウェブサイト「hitoumi.jp」及び Facebook「hitoumi.net」を継続運営し、採択申請書をもとに「全国の取組情報」を更新した。

図 2-3-7　ウェブサイト「ひとうみ jp」トップ画面

ウェブサイト「ひとうみ jp」への月別アクセス数は 8 月が最も多く（2438 件）、次いで 7 月（1908 件）、5 月（1450 件）と続いた。暖かい時期やまとまった休日のある月にアクセス数が増加する傾向が見られ、一般の訪問者（事業関係者外）の多いことが伺える。

平成 29 年度に最も多く閲覧されたページは「みずべの生きもの図鑑」（7,188 回）で、次いで「全国の取り組み情報」（6,894 回）であり、「イベント情報」（853 回）や「サポート情報」（643 回）などの事業内容に関するページへの訪問数は相対的に少なかった。

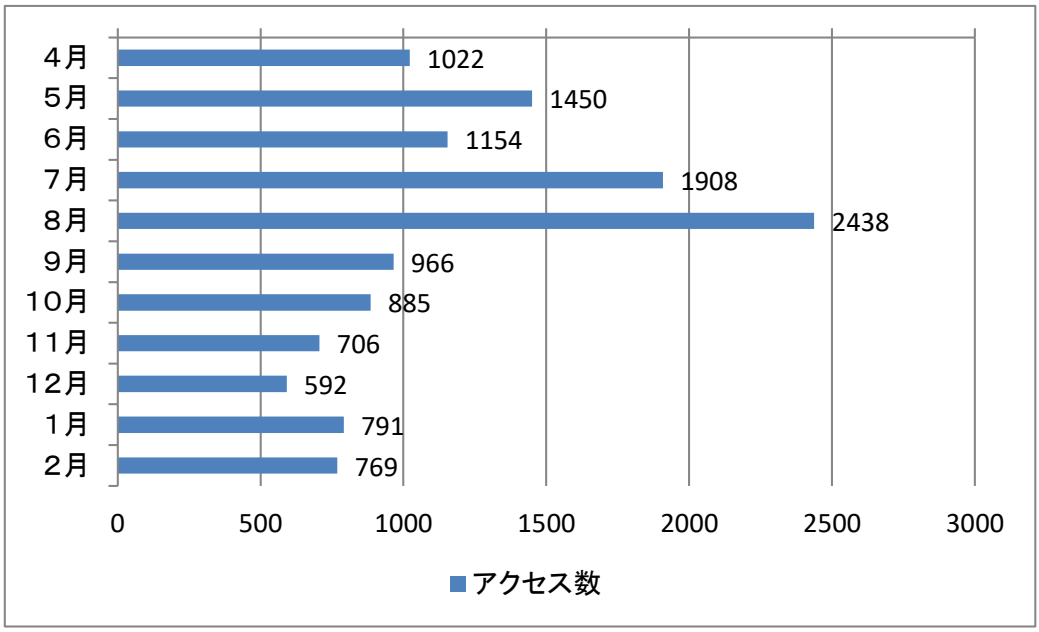


図 2-3-8　月別アクセス数（平成 29 年４月～平成 30 年２月）

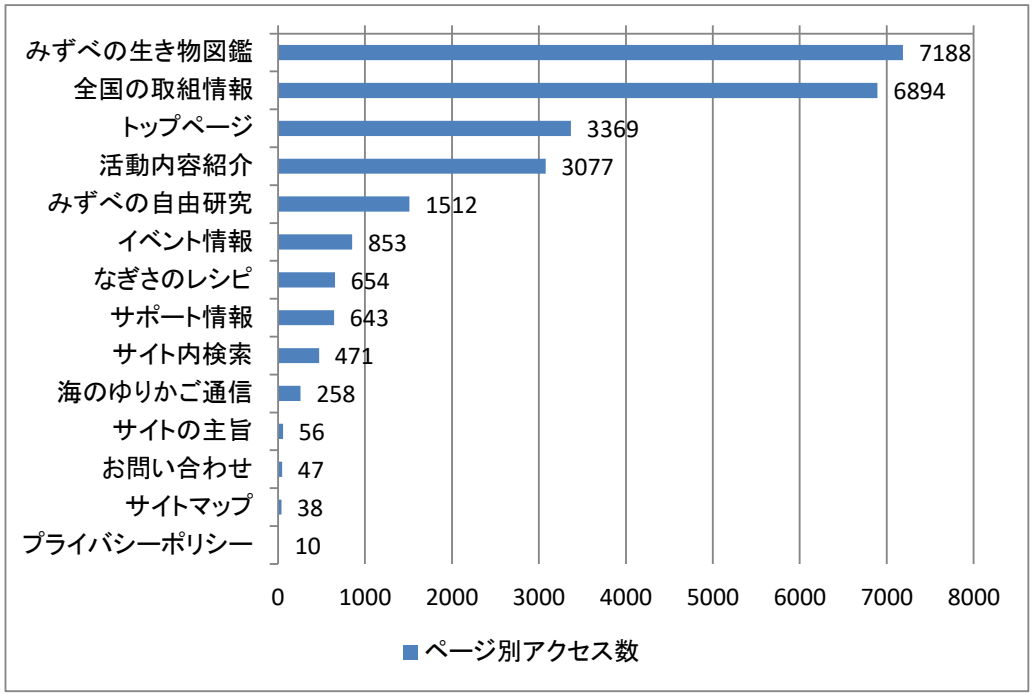


図 2-3-9　ページ別アクセス数(平成 29 年４月～平成 30 年２月)

③ 新聞広告

上記事例報告会における発表組織のうち、市民参加を焦点とした「益田川と海をつなぐ自然環境保全活動組織」、「外海地区活動組織」、「あいら藻場・干潟再生協議会」の発表内容を採録する形で新聞掲載を行い（表 2-3-6、図 2-3-10）、当活動を広く一般市民へ周知した。

表 2-3-6　新聞取材対象及び発行部数

紙名	対象組織	発行部数	掲載日
山陰中央新報	益田川と海をつなぐ自然環境保全活動組織	約 18 万部	2018 年 3 月 16 日（金）
長崎新聞	外海地区活動組織	約 18 万部	2018 年 3 月 16 日（日）
南日本新聞	あいら藻場・干潟再生協議会	約 31 万部	2018 年 3 月 18 日（日）
計		約 67 万部	

の生き字引

「隠忍自重」。長年の研究を通して見えた諫早人の資質をこう言い切る。一つとも我慢し、助け合うことも一歩も譲らない強い心を持つ。その延長線上に、才能豊かな文学者らを輩出した風土と気質が醸成されているとみる。

東小路町の会社にアトリエを併設し、地元芸術家や歴史研究者らの支援を惜しまない。西小路町の妻と子人暮らし。92歳。（高比良由紀）

取り組む。毎年、トルコの遊牧民の村を訪って商品を買い付けている。

エルベックベスは、黒海沿いのエレーリ市の伝統工芸品。各家庭の機織り機で服などを作っていたが、1940年ごろに衰退し、約20年前、生産が復活した。柔らかい肌触りが特徴で、今回初めて展示した。

ヒツジなどの毛を紡いだ糸を染めて織るキリムは、模様となる象形文字や織り方が土地ごとに異なる。ムラートさんは「トルコ伝統の織物を見て触って」と話した。（高比良由紀）

手織り機の作業実演などが披露されたバザー　―諫早市立たらみ図書館

囲碁愛好家が熱戦

雲仙　Aクラスは元村さん優勝

真剣な表情で碁盤に向かう参加者　―雲仙市、南本町公民館

雲仙市視聴覚囲碁大会の個人戦が日曜、同市小浜町の南本町公民館であり、市内の愛好家42人が盤上で熱戦を展開した。

市囲碁連絡協議会（木村喜英会長）が春に個人戦、秋に団体戦を開催している。技量別の3クラスで、10歳から82歳まで世代を超えて競い合った。（中村亮介）

成績は次の通り。（敬称略）

▽Aクラス　①元村康一（小浜町）②伊藤守通（吾妻町）③原田光（小浜町）

▽Bクラス　①藤深既（国見町）②石田弘幸（同）③田中修治（千々石町）

▽Cクラス　①東原貢（吾妻町）②小田恵三（国見町）③浜辺哲夫（千々石町）

犯罪なく3年は運動

愛野の活動を報告

雲仙署

雲仙署はこのほど、本年度の「犯罪なく3年は運動」のモデル地区に指定された雲仙市愛野町の活動について報告会を開いた。

同運動は長警が安全安心なまちづくりを目指して取り組んでいる。モデル地区に指定された同町は、自治会や小中学校で継続的に啓発や、特殊詐欺の被害防止を呼びかける講話などをしてきた。

報告会には自治会長や校長ら約20人が出席。昨年の刑法犯認知件数は市全体で82件（前年比32件減）、このうち同町は4件（同8件減）に減少したと報告された。町自治会長連合会の宮崎正秋会長は「近年、他市からの転入が増えており、近付きづらい雰囲気があるが、各機関と連携し、犯罪のないまちづくりを進めたい」と話した。（中村亮介）

「犯罪なく3年運動」の活動を振り返った報告会＝雲仙市、愛野保健福祉センター

諫早市の姉妹都市

アセンズとの交流強化

長崎ウエスレヤン大訪問団が報告

宮本市長（左）に訪問の成果を報告する佐藤学長　―諫早市役所

諫早市の姉妹都市、米国テネシー州アセンズ市を訪問した長崎ウエスレヤン大訪問団の佐藤快信学長と齋藤仁志国際交流委員長が12日、東小路町の市役所を訪ね宮本明雄市長に現地での活動を報告した。

佐藤学長ら4人の訪問団は、2月15～21日の日程でテネシー州アセンズ市を訪れた。休止していた交換留学制度の復活など、新たな交流協力プログラムについて協議したほか、アセンズ市のチャック・プリスター市長を表敬訪問し、市からの書簡と小長井町の八郎潟の湯飲みを贈呈したと報告。プリス市長から受け取った「今後更なる交流を強化する」と記された宣言文を紹介した。

宮本市長は「姉妹都市締結のきっかけになった同大の国際交流が進むのは素晴らしいこと。アセンズ市には市長就任後一度も訪問できていないので、いつか実現できれば」と希望を話った。（柴田英樹）

広告

シンポジウム「漁師と市民がつなぐ海・川・森」
～里海保全の最前線～

2月10日、全国から漁業関係者や自治体、専門家を始め、一般の方々も参加してシンポジウム「漁師と市民がつなぐ海・川・森～里海保全の最前線」が開催されました。本シンポジウムでは、水産業や漁村がもつ様々な機能の中から「環境保全」に焦点を当て、全国の沿岸環境保全活動に取り組む方々から活動の成果や課題が報告されました。より多くの皆様が、これらの活動に関心をもって参加していただけることを目指しております。

講演

東京大学大学院農学生命科学研究科 国際水産開発学研究室教授　八木信行さん

海難救助など国民の生命や財産を守る役割、生活と交流の場を提供する役割、多面的な熱海地区の取り決めなど、人間が自然の機能を利用しながらこれらの機能を大切にしていくという環境意識を大切にしています。人間が海につながる水産業や農業の多面的機能は、多様な側面を評価する動きとして世界に広がっています。国連等の持続可能な開発の議論の中では、経済発展だけでなく、社会や環境を含めた3つをバランスよく保つことが重視されており、社会や環境を重視しながら伝統的にやってきた地域社会の自立性を高めていくことが国際評価が高くなることから、これらの動きを持続する役割、国境監視や社会環境の保全、地域社会の自立性を高めていくことが大切になっています。

国際的にも評価が高まる漁業・漁村の「多面的機能」

八木　信行さん

水産業や漁村には、水産物を提供するだけでなく、社会や環境を含めた3つをバランスよく保つことが重視されており、社会や環境を重視しながら伝統的にやってきた地域社会の自立性を高めていくことが国際評価が高くなることから、これらの動きを持続する役割、国境監視や社会環境の保全、地域社会の自立性を高めていくことが大切になっています。

トークセッション

NPO法人海辺づくり研究会理事　木村　尚さん

アマモ等を育てる活動を通じて、東京湾の再生に取り組んでいます。アマモは、以前は漁業者から船のプロペラに絡まって厄介者扱いされていたものですが、今はその大切さが理解され、東京湾のアマモもずいぶん増えています。きれいな海の絵のコンテストや魚の試食会、絵本出版、地域の神事の復活、農作物の燃料化など、様々な面から活動の理解を深めるとともに、漁業者や地域の子どもたちを始め、企業や自治体などと様々な方々が活動に積極的に参加しています。その輪は確実に広がっています。日本には、古代から神も自然も人間も一体としてなかっているという自然観があります。自然再生活動も多様な人々がつながりあって、みんなで力を尽くしていくことが大切です。

長崎県

外海地区活動組織

長崎市の北西部に位置する外海地区は、海の中に岩場が多く、イセエビやアワビなどが獲れる漁場です。ところが約20年前から磯焼けが進んだことから、漁場を回復させるために漁業者が船上からウニの駆除を行っていました。

しかし、船上からでは全て駆除できなかったために、長崎大学全学スキューバダイビングサークルの学生たちが協力することになりました。学生たちは事前に専門家から指導を受け、より深い海所や岩陰に潜ひつ、駆除に取り組んでいます。始めはきれいな海で魚と一緒に泳ぎたいという学生ダイバーの藻場回復活動が地区に活気を

漁業者と市民がつながって環境保全に取り組む

地元大学との交流が活動の支えに

学生ダイバーの藻場回復活動が地区に活気を

■この活動の問い合わせ先　JR　全国漁業協同組合連合会　東京都千代田区内神田1-1-12　TEL.03-3294-9616　全国内水面漁業協同組合連合会　東京都港区赤坂1-9-13　TEL.03-3586-4821　水産多面的機能発揮対策情報サイト hitoumi.jp　ひとうみ　検索

表 2-3-6　新聞への掲載（長崎新聞　3/16）

３．平成 29 年度支援事業の成果と課題

3-1. 活動組織によるモニタリング及び自己評価

第 2 期事業の開始年である 28 年度の自己評価結果及びモニタリングデータが集約されたことにより、29 年度以降、増加量等の経年変化を検討するための準備が整えられた。

ただし、モニタリングの対象と自己評価の指標（生物量）とが一致しない組織が多々あるため、引き続き、専門家によるサポートや講習会等を通じ、正確なモニタリングと正しい自己評価の記入方法等を指導する必要がある。また、平成 27 年度に始まった自己評価は、平成 28 年度に要領の運用に定められたことにより、概ね活動組織に定着したと考えるが、PDCA のツールとしての認識には至っていないと思われ、サポートを通じた啓発が必要である。

また、今後は、有識者の精査を得ながら、これらの活動組織の成果を一般市民が共感できる内容（ブルーカーボンなど）に可視化し、公表していく必要がある。

3-2. 講習会の開催

講習会は、活動組織が行う水産多面的機能発揮活動の技術的水準の向上や活動組織相互の交流、情報交換の場を提供すること等を目的として開催した。

アンケートでは、約９割（７～10 割）が「参考になった」と回答した。今年度から、藻場部会と干潟部会については、あらかじめ会場毎にテーマを定めて周知したこと、講師となった模範となる活動組織と自分たちの活動を比較し、自分たちの組織に足りない点や、今後、積極的に取り入れていくべき点を自己診断する機会を得たことが好評の理由であったと考える。また、教育・学習部会ではグループディスカッションの時間を設けることにより相互の交流、情報交換の場を提供することができた。開催地については、今年度講習会を開催した東京、大阪、福岡を希望する回答が多かったが、札幌を希望する声も多く、今後の開催地として検討する必要がある。開催時期については、今年度と同様、夏期の開催を希望する回答が多かったが、「夏期は活動組織の活動時期と重複するため参加が困難」、「活動前である年度当初の開催が望ましい」という回答もあり、開催時期前倒しの検討も必要かと思われる。藻場部会、干潟部会、内水面部会では、テーマについて様々な希望があり、教育・学習部会では、成果報告だけではなく、地域住民とのトラブルや参加者の安全対策、学校および地域との連携等幅広いテーマ（事例発表）の希望があった。本アンケート結果を精査し、次年度は活動組織が参加したいと思えるようなテーマを設定する必要がある。また、次年度以降は国境・水域監視に取り組む活動組織の増加が見込まれるため、海の安全部会の拡充についての検討が必要である。

なお、アンケート結果から、講習会の運営については概ね良い評価を得られたと考えるが、講習会で得た知識を活動組織がどのように活用しているかが不明なままである。次年度以降は、フォローアップの観点から講習会のプログラムを立案する必要がある。

3-3. サポート専門家による技術的指導

今年度、専門家による技術サポートは、自己評価点の低かった組織、地域からの派遣要望のあった組織を中心に実施した。自己評価に基づく訪問は延べ 19 組織、要望に応じて指導

した活動組織数は延べ 197 組織であった。要望に基づくサポートについては、あらかじめ要望の内容を精査し、特に、専門家による技術サポートを複数年或いは複数回受ける活動組織に関しては、活動組織のスキルアップに資すると判断した場合に専門家を派遣した。このような組織について、表 3-3-1 にサポートの成果と課題を整理した。多くの組織は、課題を明確にしたことで、サポートによるレベルアップの程度を明確にすることができたが、一部の活動組織については、サポート専門家に任せきり（モニタリングの丸投げなど）のケースがあり、今後の検討課題である。サポート専門家が仲介役となり、同じような背景、同じような活動を行う模範となる組織と交流し、自己啓発するような工夫が必要と思われる。

講習会と同様、専門家によるサポートについてもフォローアップの観点が必要である。特に、自己評価点をもとに抽出した組織については継続的に専門家が訪問し、補助し続ける仕組み作りが必要と考える。29 年度以降の自己評価では、ほとんどの組織が前年度との比較が可能となるので、それらを精査し、より多くの活動組織への訪問とフォローアップを行うことが必要である。

3-4. 模範、参考となる活動組織の抽出

全国から２３の模範、参考となる活動組織を選定し、聞き取り調査等によって技術面・運営面における内容や特徴を把握し、必要に応じて捕捉調査等のサポートをし、他の活動組織の模範・参考となる資料（事例集）を作成、配布した。また、事例報告会における口頭発表或いはポスター等の発表資料を作成し、情報共有を図った。

前述のとおり、29 年度以降の自己評価では、ほとんどの組織が前年度との比較が可能となるので、今後はそれらを精査し、より多くの模範、参考となる活動組織を発掘し、情報共有を図る必要がある。

3-5. 事例報告会の開催

今年度の事例報告会は、広く一般に本事業を周知するという目的を踏まえ、土曜日の開催とし、「これからの市民参加を考える」と題したトークセッションと事例報告の２部形式とした。

アンケート結果からは、冒頭の講演「日本の漁業・漁村の多面的な役割と国際的評価」（東大八木教授）が、その後の発表内容や当事業の理解に大きな貢献をしたことが伺え、また、開催日については、「休日開催は一般市民も参加できるという点で、良かったと思う」等、一般市民が参加しやすかったという意見・感想を得ることができた。休日開催の是非については「良かった」と「平日の開催の方が良い」が半々であったが、一般市民の参加しやすさを考えると、今後も休日の開催が望ましい。

一般市民へのアピールの第一歩として、生物学系学部を有する首都圏大学・短期大学、専修大学（６９学部）、全国の水産高等学校（４９校）、都内の環境系専修学校（３校）、会場の近傍の都立高校に開催を案内し、少数とはいえ、教育関係者（学生、教諭）の参加が得られたことは大きな成果であった。トークセッションは全体的に高評価であったが、「議題を設け、登壇者が議論する場を設けて欲しい」、「質疑応答の時間を増やしてほしい」等の意見

があった。また、事例報告については、藻場再生のための取り組みや魚道の作り方など、多くの参加者から技術的な参考になったという感想を得た一方で、事例報告に対する専門家のアドバイスや質疑応答の時間を増やしてほしい等の意見もあった。

今後も、当事業が科学的な知見に基づき、国民の公益的機能の裨益を念頭に実施されていることを明示しつつ、より一般の方々（まずは学校関係）の興味を引くようなプログラム及び周知方法を検討する必要がある。

3-6. 各種媒体による情報提供

ウェブサイト（ひとうみ.jp、hitoumi.net）や地方新聞を活用し、当事業に関する情報提供を行った。新聞については、事例報告において、市民参加に焦点を当てた活動組織の発表内容を採録する形で掲載し、発表組織の存する島根県、長崎県、鹿児島県を中心に約６７万部を発行した。事例報告会の開催に当たっては、広報ポスターを作成し、首都圏の学校等に配布した。

ひとうみ.jp に関しては、「全国の取り組み情報」へのアクセス件数が多いことから、今後は当ページの充実を図らなければならない。活動組織ごとに、取り組みの背景や内容、成果をわかりやすく整理し、より多くの一般市民に興味をもってもらうような構成にする必要がある。

新聞は、一度により多くの一般市民に情報を届けられるのが利点ではあるが、現状は、既読か未読か、或いは既読の場合の反響も把握できないため、今後の実施に当たっては、効果の把握方法についての検討が必要である。